

史跡旧二条離宮（二条城）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

二〇〇九―一四

史跡旧二条離宮（二条城）

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、防災整備工事に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

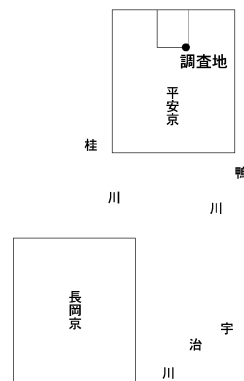
平成 22 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）・平安京跡
- 2 調査所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541 番地 二条城
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009 年 9 月 7 日～ 2009 年 11 月 4 日
- 5 調査面積 947 m²
- 6 調査担当者 柏田有香・山本雅和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 桜の園・緑の園で通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 柏田有香・山本雅和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 調査・遺物整理にあたっては、元離宮二条城の防災設備工事に係る協議会委員：尼崎博正、上原真人、武田恒夫、西 和夫、橋本初子（敬称略 50 音順）の皆さんからご指導をいただいた。また、下記の方々からもご教示をいただいた。
河角龍典、高 正 龍、鈴木久男、中井 均、西山良平、
福島克彦、藤川昌樹、松尾信裕、丸山真史、宮本裕次、
森岡秀人、森島康雄（敬称略 50 音順）



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査の経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	5
3. 桜の園の調査	7
(1) 概要	7
(2) 基本層序	9
(3) 第1面の遺構	12
(4) 第2面の遺構	15
(5) 第3面の遺構	22
(6) 下層の層序・遺構	27
4. 緑の園の調査	32
(1) 概要	32
(2) 基本層序	32
(3) 1区の遺構	34
(4) 2区の遺構	34
5. 桜の園の遺物	36
(1) 遺物の概要	36
(2) 土器類	36
(3) 瓦類	43
(4) 土製品	53
(5) 石製品	54
(6) 金属製品	55
(7) 木製品	58
(8) その他の出土遺物	58
6. 緑の園の遺物	58
7. ま と め	59
(1) 遺構の変遷	59
(2) 瓦の種類と用途	66

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 1 桜の園西壁断面（北北東から）
2 桜の園セクション断面（X=-109,495 ライン付近 北西から）
- 図版 2 遺構 1 桜の園北半部第 1 面（北東から）
2 桜の園南半部第 1 面（北東から）
3 桜の園南部第 1 面（西から）
- 図版 3 遺構 1 桜の園第 2 面全景（北から）
2 桜の園北半部第 2 面（北西から）
- 図版 4 遺構 1 桜の園南半部中央第 2 面（北から）
2 桜の園石鳥居（石 97・石 98 北から）
- 図版 5 遺構 1 桜の園石組 92（西南西から）
2 桜の園集石 77（西から）
3 桜の園集石 81（北から）
4 桜の園集石 85（北から）
- 図版 6 遺構 1 桜の園南西部第 2 面礎石群（東から）
2 桜の園南西部第 2 面礎石群・集石 93（東から）
- 図版 7 遺構 1 桜の園溝 43 北部・溝 45 北部（北東から）
2 桜の園溝 45 北部（北から）
3 桜の園土坑 100 セクション断面（南東から）
- 図版 8 遺構 1 桜の園第 3 面全景（北から）
2 桜の園南半部第 3 面（北西から）
- 図版 9 遺構 1 桜の園溝 130 南部（北から）
2 桜の園溝 130 断割 C - C' 断面（北から）
3 桜の園溝 130 断割 B - B' 断面（北から）
4 桜の園石 29（北から）
5 桜の園石 30（北から）
6 桜の園石 134（北から）
7 桜の園石 135（北東から）
- 図版 10 遺構 1 桜の園南東部第 3 面根石群（西から）
2 桜の園東側拡張部石列 211 復元状況（南西から）
- 図版 11 遺構 1 桜の園東側拡張部北壁断面（東南東から）
2 桜の園土坑 100 北壁・東壁断面（南西から）

図版 12	遺構	1	桜の園旧 9 区北拡張部南壁断面（北から）
		2	桜の園旧 8 区南拡張部石垣・南壁断面（北東から）
図版 13	遺構	1	桜の園旧 8 区中央拡張部南壁断面（北東から）
		2	桜の園旧 8 区北拡張部石垣・南壁断面（北東から）
図版 14	遺構	1	緑の園 1 区全景（北北東から）
		2	緑の園 1 区溝 17（北西から）
		3	緑の園 2 区全景（南から）
図版 15	遺物		軒丸瓦・鬼瓦・菊丸瓦
図版 16	遺物		菊丸瓦
図版 17	遺物		輪違瓦・熨斗瓦・面戸瓦
図版 18	遺物		金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査区位置図（1：5,000）	1
図 2	調査区配置図（1：800）	2
図 3	周辺調査位置図（1：5,000）	3
図 4	桜の園調査前状況	7
図 5	桜の園作業状況	7
図 6	桜の園西壁断面図（1：50）	8
図 7	桜の園南壁断面図（1：50）	10
図 8	桜の園セクション断面図（X=-109,495 ライン付近 1：50）	12
図 9	桜の園第 1 面平面図（1：200）	13
図 10	桜の園第 2 面平面図（1：200）	14
図 11	桜の園石鳥居（石 97・石 98）実測図（1：40）	15
図 12	桜の園石組 92 実測図（1：40）	16
図 13	桜の園集石 77 実測図（1：40）	16
図 14	桜の園集石 81・集石 85・集石 93 実測図（1：40）	17
図 15	桜の園溝 43・溝 45 実測図 1（1：50）	18
図 16	桜の園溝 43・溝 45 実測図 2（1：50）	19
図 17	桜の園第 2 面南西部礎石群実測図（1：50）	20
図 18	桜の園土坑 100 セクション断面図（1：50）	21

図 19	桜の園第 3 面平面図 (1 : 200)	23
図 20	桜の園溝 130 セクション断面図 (1 : 40)	24
図 21	桜の園東側拡張部北壁断面図 (1 : 50)	26
図 22	桜の園土坑 100 北壁・東壁断面図 (1 : 50)	27
図 23	桜の園旧 9 区北拡張部南壁断面図 (1 : 50)	28
図 24	桜の園旧 8 区南拡張部南壁断面図 (1 : 50)	29
図 25	桜の園旧 8 区中央拡張部南壁断面図 (1 : 50)	30
図 26	桜の園旧 8 区北拡張部南壁断面図 (1 : 50)	31
図 27	緑の園 1 区調査前状況	32
図 28	緑の園 2 区調査前状況	32
図 29	緑の園 1 区断面図 (1 : 50)	33
図 30	緑の園 2 区断面図 (1 : 50)	34
図 31	緑の園 1 区・2 区平面図 (1 : 200)	35
図 32	土器類実測図 1 (1 : 4)	38
図 33	土器類実測図 2 (1 : 4)	40
図 34	土器類実測図 3 (1 : 4)	42
図 35	軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦拓影・実測図 (1 : 4)	45
図 36	菊丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	47
図 37	輪違瓦実測図 (1 : 4)	50
図 38	熨斗瓦・面戸瓦・道具瓦拓影・実測図 (1 : 4)	52
図 39	瓦刻印拓影 (1 : 2)	53
図 40	石製品実測図 1 (1 : 4)	54
図 41	石製品実測図 2 (1 : 4)	54
図 42	金属製品拓影・実測図 1 (1 : 2)	56
図 43	金属製品実測図 2 (1 : 2)	57
図 44	桜の園周辺造営経過模式図	61
図 45	寛永期本丸御殿絵図と検出遺構	63

表 目 次

表 1	遺構概要表	11
表 2	遺物概要表	36

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査の経過

今回の調査は、京都市中京区二条通堀川西入二条城町に所在する史跡旧二条離宮（以下「二条城」という）における防災設備工事に必要な情報を得るための埋蔵文化財確認調査である（図1）。二条城は城内全域が史跡に指定されており、また、北西部は平安宮、北東部は冷然院、南部は神泉苑などの遺跡が重複している。これまでに城内で実施した遺跡調査では、弥生時代から江戸時代に至る遺構を検出し、縄文時代から江戸時代の遺物が出土していることから、今回も各時代の遺構を検出するとともに、遺物が出土することが予測された。

このため、文化庁・京都府・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）と元離宮二条城事務所（以下「二条城事務所」という）が協議を行い、元離宮二条城の防災設備工事に係る協議会の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、埋蔵文化財確認調査を実施するはこびとなった。

調査は防災設備設計計画に基づき、二条城城内南部の桜の園、北東部の緑の園の2箇所で行った（図2）。最終的な調査面積は桜の園約737㎡、緑の園約210㎡の合計約947㎡である。

桜の園の調査は、当初は樹木を避けたために不整形な形状の2箇所の調査区を設定して開始し

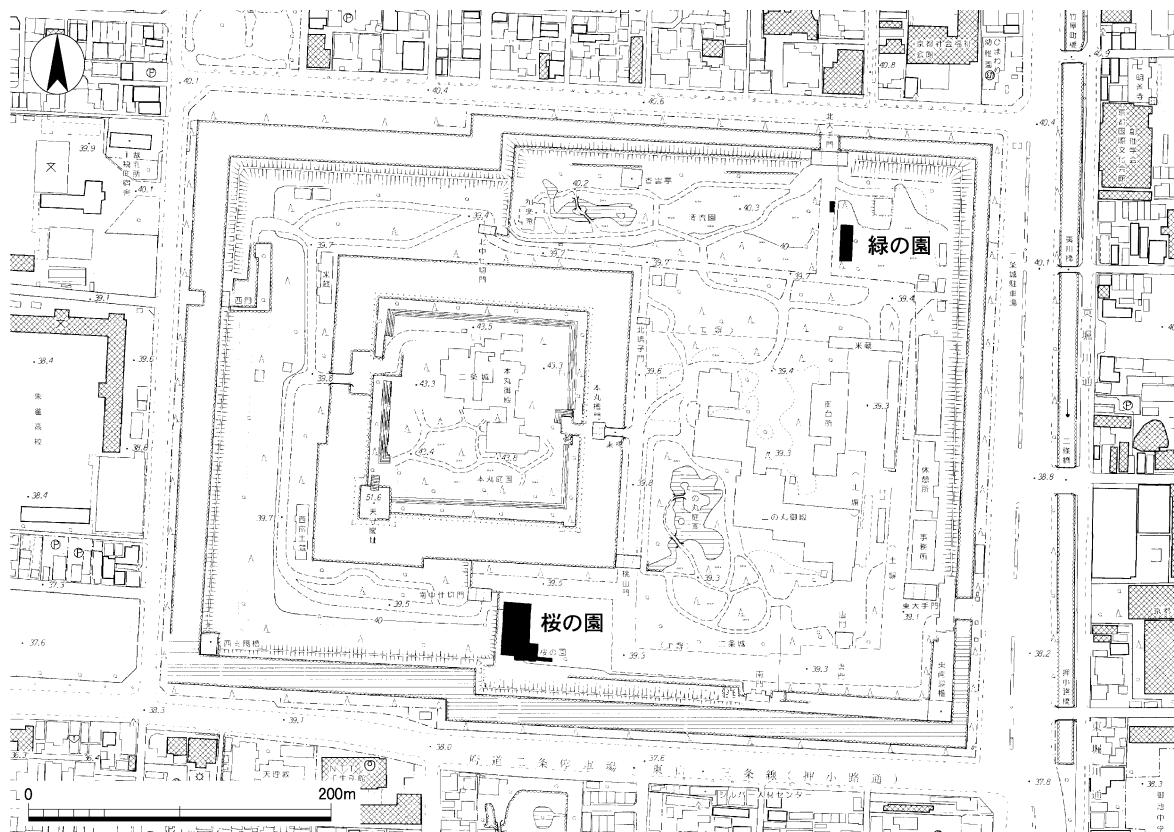
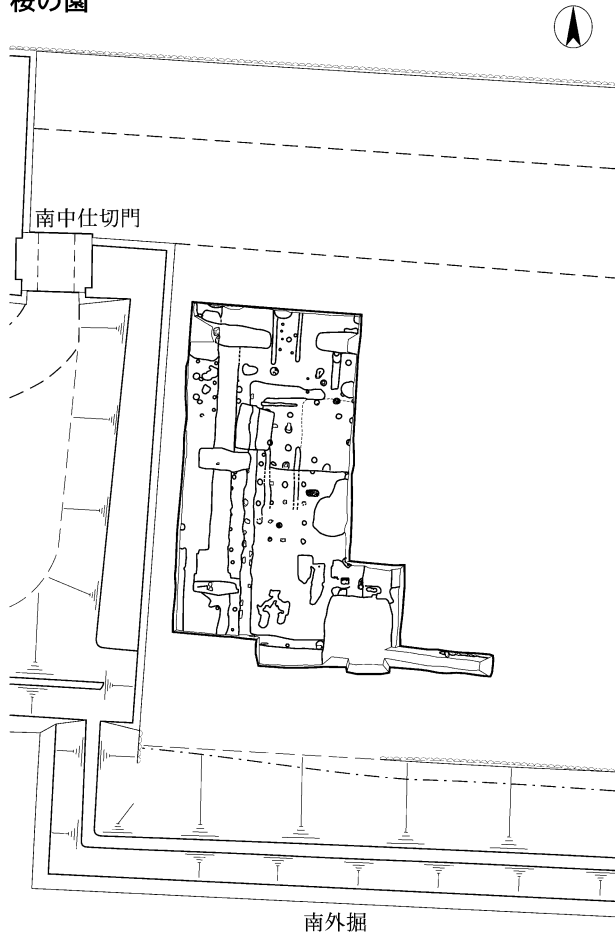


図1 調査区位置図（1：5,000）

桜の園



緑の園

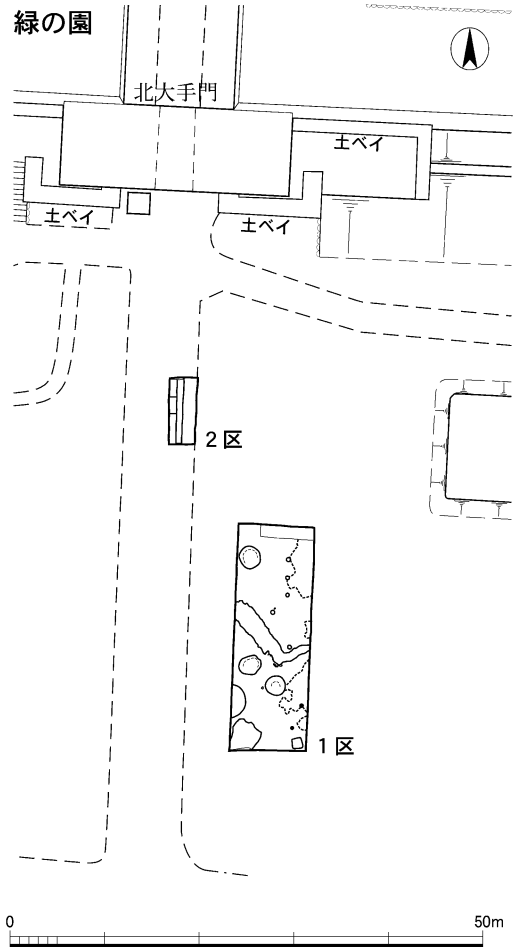


図2 調査区配置図 (1 : 800)

たが、検出した遺構の拡がりを確認し、より詳細な状況を明らかにすることを目的として、西側・南東側へ大きく拡張し、全体として一つの調査区としてすすめた。また、緑の園の調査は、緑の園西部（1区）と北大手門からの城内通路東端（2区）の2箇所調査区を設定してすすめた。

各調査区では表土・近現代の盛土を重機で掘削したのち、江戸時代後期から末期の遺構面から調査を開始し、逐次、文化財保護課の指導を受けながら必要に応じて調査区の拡張、下層への掘り下げを行った。各遺構面では写真・図面の記録を取り、遺物を採集した。

機械掘削土・調査に伴う人力掘削土は調査地周辺に積み上げて処理し、調査終了後に遺構面を保護したのち、すべての調査区を埋め戻した。

なお、11月16日には桜の園にて現地説明会を開催し、約300名の参加を得た。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は二条城城内に位置し、平安遷都以前の二条城北遺跡・堀川御池遺跡および平安京跡にあたっている¹⁾。

二条城北遺跡は丸太町通に沿って東は西洞院通、西は智恵光院通付近に拡がる集落跡で、弥生時代の柱穴・炉・溝などが見ついている。二条城では北大手門・緑の園付近がこの遺跡の南端に含まれている。堀川御池遺跡は北は二条通、東は油小路通、南は姉小路通、西は大宮通付近に拡がる集落跡と考えられている遺跡で、縄文時代から古墳時代の流路・溝などが見ついている。二条城では二の丸御殿より南東側がこの遺跡に含まれており、桜の園は西側縁辺部にあたる。

また、二条城は平安京では平安宮南東部および左京二条二坊・三条一坊・三条二坊と重複しており、今回の桜の園の調査地は左京三条一坊十六町（神泉苑）、緑の園の調査地は左京二条二坊三町（冷然院）に位置している。

平安京左京三条一坊十六町は神泉苑の北東部になる。神泉苑は平安京内に営まれた苑地で、北

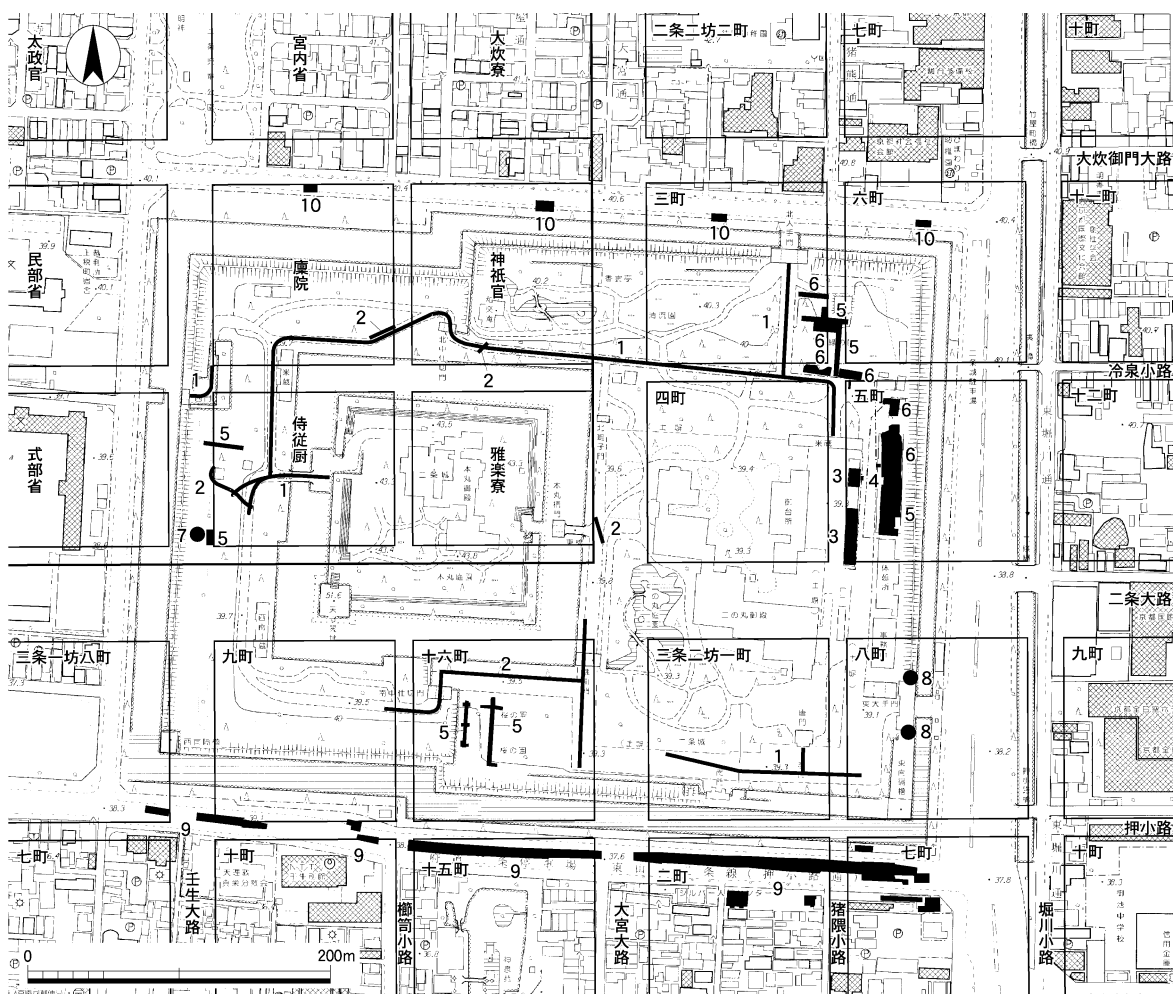


図3 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

は二条大路、東は大宮大路、南は三条大路、西は壬生大路に囲まれた東西2町・南北4町を占めていた。その北部が二条城の南西部・南外堀にあたる。神泉苑の内部には広大な池が拡がり、中心建物である乾臨閣をはじめ左閣・右閣や東西の釣台とそれらを繋ぐ回廊などの施設があったことが記録に残されている。神泉苑は9世紀前半は禁苑として天皇の遊宴や狩猟が行われていたが、9世紀後半になると祈雨や止雨の儀式が頻繁に行われるようになり、また、池の水が灌漑用水として使用されるようになった。平安時代後期には、池の規模が土砂の堆積により徐々に縮小していったと推定されている。

冷然院は平安京を代表する後院の一つで、北は大炊御門大路、東は堀川小路、南は二条大路、西は大宮大路に囲まれた左京二条二坊三町から六町の2町四方を占めていた。その西半部が二条城の北東部にあたる。嵯峨天皇にはじまり、仁明天皇・文徳天皇・村上天皇らが里内裏・院御所として居住しており、『文華秀麗集』の詩文には庭園の優れた景観が詠じられている。貞観17年(875)の火災以降、焼亡と再建を繰り返したが、遅くとも13世紀には衰微していたと推定されている。

鎌倉時代後半以降の調査地周辺に関わる記録はあまり残されていない。神泉苑は室町時代になると南部を中心に居住地や田畑として利用されたようである。また、桃山時代には豊臣秀吉による聚楽第造営に伴い、一定の整備が行われたと考えられている。

二条城は徳川家康により慶長7年(1602)から造営が開始され、翌年に完成した。慶長期の二条城は、富山勝興寺蔵の『洛中洛外図屏風』などに描かれた様子から、現在の二の丸御殿の位置を中心としており、堀は一重の方形で、堀川通に大手門を開き、城内北西部に天守が聳えていたことがわかる。

その後、二条城は後水尾天皇の行幸に備えて、徳川秀忠・家光により寛永元年(1624)から増改築が行われた。これは非常に大規模なもので、城域を西側へ約1.5倍に拡張し、新たに本丸の堀と石垣を構築した。また、本丸天守台に伏見城から天守を移設、二の丸御殿・庭園を改修し、天皇たちが滞在する行幸御殿・秀忠の宿所となる本丸御殿を新造した。同時に慶長期の天守を淀城へ移築するなど、城内の施設にも改造を加えている。寛永3年(1626)に行われた後水尾天皇の二条城行幸は、徳川秀忠の娘・和子の入内の後、天皇家と徳川家が円満な関係にあること、いわゆる公武融和を広く喧伝することを目的としたものである。寛永期の増改築により、二重の堀と石垣に囲まれた現在の二条城の姿が出来上がった。二条城行幸の頃の状況を描いた絵図によると、桜の園の調査地はこの時に造営された行幸御殿西側の台所に付属する部分にあっている。また、緑の園の調査地付近には蔵が建てられていたことがわかる。²⁾

寛永11年(1634)の徳川家光の入洛以降、二条城は徳川政権の京都支配の象徴として修造が続けられたが、寛延3年(1750)には落雷で天守が焼失、天明8年(1788)に起こった京中の大火では本丸御殿などの城内の建物の多くが類焼した。桜の園の調査地周辺は火災での焼失は免れており、江戸時代中期から後期の絵図によると、調査地南西隅には稲荷社、南東側には焰硝蔵、中央から北側には幕府の与力・同心の屋敷があったことがわかる。³⁾

幕末になると二条城は再び政治の舞台となり、文久3年(1863)の徳川家茂の入城から、慶応3年(1867)の徳川慶喜による大政奉還の表明までの期間に様々な再整備が行われた。本丸には仮御殿が建設され、緑の園の調査地周辺を含む城内各所には、軒を接するように警備の武士たちの番衆小屋が建ち並んだ⁴⁾。

さらに、明治維新後は太政官代・京都府庁として使用され、明治17年(1884)には宮内省所管の二条離宮となり、大正4年(1915)の大正天皇即位の大典に伴う整備が行われた。昭和14年(1939)には宮内省より京都市へ下賜され「元離宮二条城」と呼称、平成6年(1994)には世界文化遺産に登録され、京都を代表する観光地として、連日、大勢の観光客でにぎわっている。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では、これまでも多数の遺跡調査が行われているが、ここでは二条城城内を中心に主要な調査の概要を記す(図3)。

城内北部から西部および南部の照明灯設置工事に伴う立会調査(図3-1)では、平安時代後期・江戸時代の遺物包含層を検出し、平安時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦が出土した⁵⁾。

城内中央部から南部および西部の保安灯設置工事に伴う立会調査(図3-2)では、平安時代後期・室町時代・江戸時代の遺物包含層を検出し、平安時代後期の土器類・瓦、室町時代の土器類、江戸時代の陶磁器類・瓦が出土した⁶⁾。

城内東部の収蔵庫建設工事に伴う発掘調査(図3-3)では、縄文時代の流路、平安時代前期の猪隈小路東側溝・土坑、平安時代後期から室町時代の二条大路北側溝・区画溝・井戸・土坑・柱穴、江戸時代の道路敷・建物などを検出した。江戸時代の道路敷は南北方向に延び、側溝・柵を備えており、江戸時代初期(慶長期)に属すると考えられる。建物は礎石据付穴が東西・南北方向に並んでおり、寛永3年(1626)の城内を描いた絵図にある2番蔵から6番蔵に相当する。出土遺物には縄文土器、平安時代から室町時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦などがあり、江戸時代の遺物が多くを占める⁷⁾。

城内東部の防火水槽設置に伴う発掘調査(図3-4)では、平安時代の池状の落ち込み、鎌倉時代から室町時代の溝・柱穴、桃山時代から江戸時代の瓦組暗渠・井戸・土坑・柱穴などを検出し、縄文土器、平安時代の土器類、江戸時代の陶磁器類・瓦などが出土した⁸⁾。

二条城築城400年記念事業収蔵施設建設に伴う試掘確認調査(図3-5)は、城内東部1箇所・北東部2箇所・西部2箇所・南部2箇所の調査区で実施した。東部の調査では平安時代の池・溝・井戸、室町時代後期の井戸・土坑・柱穴、江戸時代前期から中期の整地層・土坑・柱穴を検出した。北東部の調査では弥生時代中期の竅穴住居と考えられる遺構、平安時代の庭園、江戸時代前期(寛永期)の礎石据付穴・雨落溝、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを検出した。平安時代の庭園は冷然院の一画にあたっており、遣水・景石・瓦敷・玉石敷などの意匠に富んだものである。また、江戸時代前期の遺構は二条城行幸にあたって整備された蔵跡、中期から後期の遺構は二条城番頭屋敷・番小屋に関連するものと推定できる。西部の調査では平安時代の溝、室町

時代後期の溝・土坑・柱穴、江戸時代前期（寛永期）の整地層などを検出した。南部の調査では江戸時代初期（慶長期）の石垣、江戸時代前期（寛永期）の整地層、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを検出した。出土遺物には弥生時代の土器・土製品、平安時代の土器類・瓦・金属製品、室町時代の土器類・木製品、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・土製品・石製品・金属製品などがある。⁹⁾

二条城築城400年記念事業収蔵施設建設に伴う発掘調査および試掘確認調査（図3-6）は、城内東部の収蔵庫建設選定地に1箇所、東部から北東部の整備予定地に6箇所の調査区で実施した。東部の発掘調査では縄文時代前期の遺物包含層、平安時代の庭園・溝・井戸、室町時代後期の整地層・井戸・柱穴、桃山時代の溝、江戸時代前期（寛永期）の整地層・土坑・柱穴、江戸時代中期から後期の井戸・土坑・柱穴・鑄造遺構などを検出した。平安時代の庭園は冷然院の一部で、前期から後期まで維持されており、多数の景石や洲浜などを備えた複雑な構成となっている。江戸時代の鑄造遺構は中央に鋳滓と焼土層が堆積し、側面の壁は焼け歪む。北東部の確認調査では平安時代の庭園、室町時代後期の土坑・柱穴、江戸時代前期の整地層、江戸時代中期から後期の溝・井戸・石組遺構・瓦敷の土間・土坑・柱穴などを検出した。前年の試掘確認調査と合わせた一連の調査により、冷然院の北部から南東部に拡がる庭園の状況が明らかにできたことは大きな成果である。出土遺物には縄文時代の土器・土製品・石器、平安時代の土器類・瓦・石製品、鎌倉時代の土器類・瓦・石製品、室町時代の土器類・瓦・石製品・金属製品、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・金属製品などがある。¹⁰⁾

城内西部の防火水槽設置工事に伴う発掘調査（図3-7）では、平安時代後期の柱穴、室町時代後期の落ち込み、桃山時代の溝、江戸時代の土坑などを検出し、平安時代の土器類・瓦、室町時代の土器類・瓦・石製品・金属製品、江戸時代の陶磁器類・瓦などが出土した。¹¹⁾

城内東部の東大手門築地塀の確認調査（図3-8）では、築地塀を固定する石柱の基礎の状況を確認し、石垣裏込めを検出した。出土遺物は平安時代中期の軒平瓦1点のほかは、大半が江戸時代以降のものである。¹²⁾

二条城南側の押小路通沿いでの地下鉄東西線建設や上水道・共同溝埋設工事に伴う発掘調査（図3-9）では、縄文時代の流路・凹地、弥生時代の溝、古墳時代の溝、平安時代の壬生大路路面・東側溝、大宮大路路面西側溝、猪隈小路路面・東西側溝、築地・庭園・建物・井戸・柱穴、鎌倉時代から桃山時代の猪隈小路路面・東西側溝、溝・井戸・土坑・柱穴、江戸時代初期から前期の整地層、江戸時代から近代の押小路路面などを検出した。平安時代の庭園は神泉苑の一部で、縄文時代の凹地を利用して池を整備し、汀には舟着の足場板を設置している。出土遺物には縄文時代後期から晩期の土器・種実などの自然遺物、弥生時代から古墳時代の土器、平安時代の土器類・瓦・石製品・ガラス製品、鎌倉時代から桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦などがある。平安時代の瓦の中には「神泉苑」銘の刻印のあるものが含まれている。¹³⁾

二条城北側の竹屋町通路路面での公共下水道埋設工事に伴う発掘調査（図3-10）では、平安時代の整地層・溝・土坑・柱穴、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝・土坑・柱穴、桃山時代の堀状遺

構・溝・土坑、江戸時代初期の建物・溝・柱穴、江戸時代前期から近代の路面・側溝・柵・石列・土坑などを検出した。江戸時代の路面は二条城行幸にあたって整備され、大正年間まで嵩上げ・修造を繰り返しながら維持されていた。出土遺物には平安時代の土器類・瓦、鎌倉時代の土器類、室町時代の土器類・瓦、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・金属製品¹⁴⁾などがある。

また、今回の調査の直後に、城内緑の園・二の丸・本丸各所で実施した確認調査では、平安時代の池、江戸時代初期から前期の整地層・路面・建物・溝・木樋・土坑・柱穴、江戸時代中期から後期の整地層・路面・溝・土坑・礎石・柱穴・火災層などを検出し、弥生・古墳時代の土器、平安時代の土器類・瓦、鎌倉時代から桃山時代の土器類・瓦・土製品・石製品、江戸時代の陶磁器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品¹⁵⁾などが出土した。

3. 桜の園の調査

(1) 概要

調査地では2000年から2001年にかけて試掘確認調査が実施されている。調査では江戸時代初期（慶長期）の石垣、江戸時代前期（寛永期）の整地層、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを検出した。出土遺物には江戸時代の陶磁器類、金箔瓦を含む瓦類、石製品、金属製品などがある¹⁶⁾。

調査区は桜の園西部に設定した。当初は樹木を避けたために不整形な形状の2箇所の調査区を設定して開始したが、検出した遺構の拡がりを確認し、より詳細な状況を明らかにすることを目的として西側・南東側へ大きく拡張し、全体として一つの調査区として調査をすすめた。調査区の平面形は南東部で南へ約3m、東へ約6mの張り出しをもつ南北約35m、東西約18mの方形になる。さらに第3面調査中には遺跡の状況を追求するため、南壁の一部と東側への拡張を行った。最終的な調査面積は約737㎡である（図4・5）。

調査はベンチなどの施設の撤去や樹木の伐採・根株の根起こしを行ったのち、3面に分けて実施した。第1面で江戸時代後期、第2面で江戸時代中期、第3面で江戸時代前期の遺構を検出し、大型の遺構や既調査区などの断面で下層の層序・遺構の状況を観察した。検出した遺構数は211



図4 桜の園調査前状況



図5 桜の園作業状況

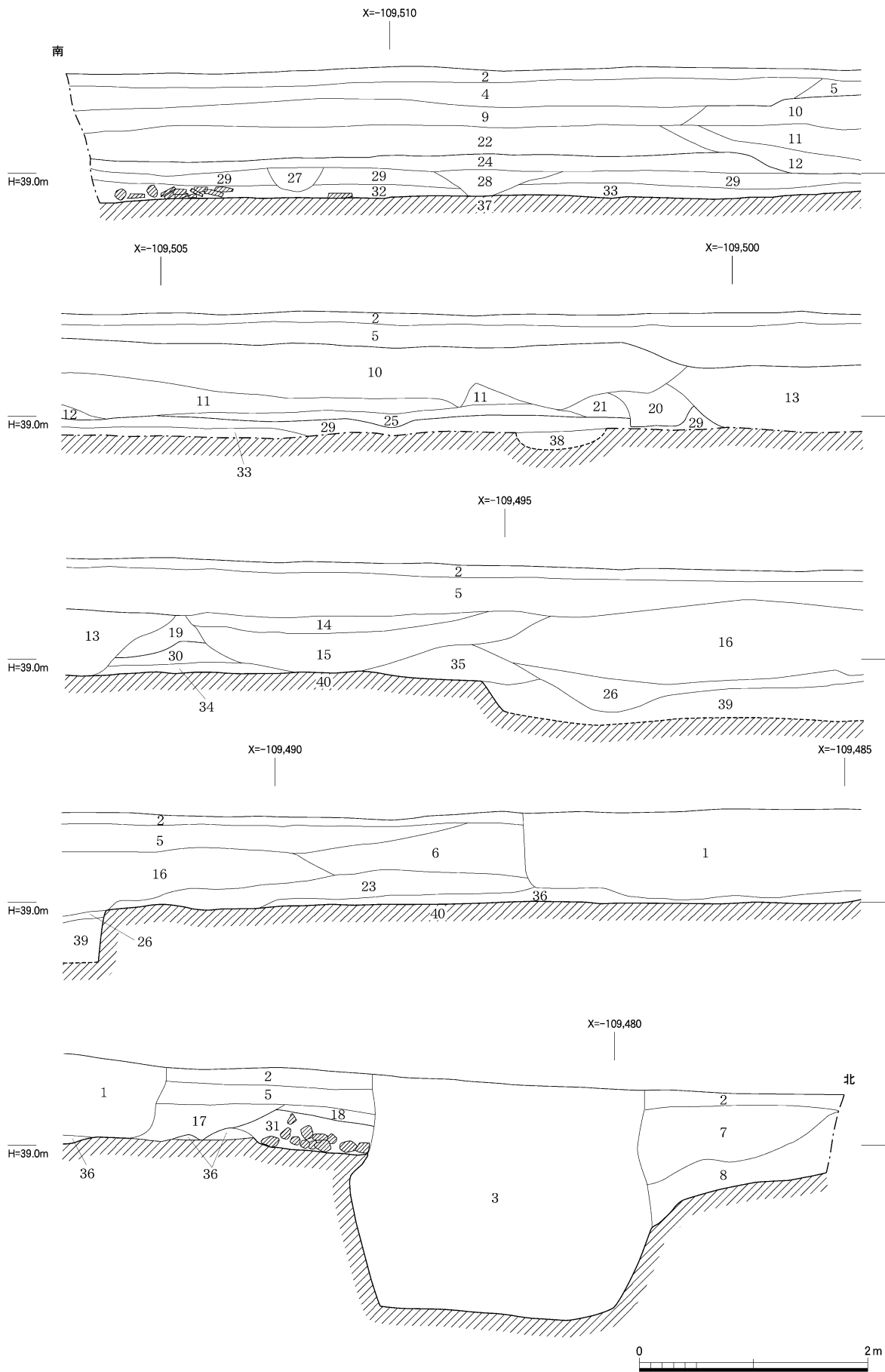


図6 桜の園西壁断面図 (1 : 50)

- 1 根の攪乱
- 2 表土
- 3 旧8区北拡張部埋土
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 瓦片を微量含む(近代盛土)
- 5 10YR4/4褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む 瓦片を微量含む(近代盛土)
- 6 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1～8cmの礫を中量含む 磁器片・瓦片を中量含む(近代)
- 7 7.5YR3/3暗褐色砂泥 締まりが悪い φ1～5cmの礫を少量含む(近代)
- 8 10YR3/4暗褐色砂泥 締まりが悪い 瓦片を多量含む(近代)
- 9 7.5YR4/3褐色砂泥 締まりが悪い φ1～15cmの礫を多量含む 瓦片を中量含む(近代か)
- 10 7.5YR4/4褐色砂泥 締まりが悪い φ1～8cmの礫を微量含む 瓦片を微量含む(江戸時代中期～後期の土坑か)
- 11 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～8cmの礫を少量含む 10YR4/6褐色シルトのφ1～3cmのブロックを多量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む(江戸時代中期～後期の土坑か)
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む 瓦片を微量含む(江戸時代中期～後期の土坑か)
- 13 10YR4/4褐色砂泥 炭を中量含む 磁器片・瓦片を少量含む(土坑82 江戸時代中期から後期)
- 14 7.5YR3/4暗褐色砂泥 締まりが悪い 炭・焼土を少量含む 瓦片を少量含む
- 15 10YR3/3暗褐色砂泥 締まりが悪い 炭を多量含む 瓦片を多量含む
- 16 10YR3/4暗褐色砂泥 締まりが悪い φ1～10cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を少量含む
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 締まりが悪い
- 18 7.5YR4/4褐色砂泥
- 19 10YR4/6褐色砂泥 花崗岩片を少量含む 炭を微量含む
- 20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 花崗岩片を中量含む 炭を微量含む
- 21 7.5YR4/3褐色砂泥 焼土を微量含む
- 22 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや締まる φ1～10cmの礫を少量含む 2.5Y6/4にぶい黄色極細砂のφ1～10cmのブロックを少量含む 炭を微量含む 土器片・瓦片を微量含む(江戸時代中期～後期整地層)
- 23 10YR4/6褐色砂泥 やや締まる 炭・焼土を少量含む(江戸時代中期～後期整地層か)
- 24 7.5YR4/3褐色砂泥 やや締まる φ1～3cmの礫を微量含む 炭・焼土を少量含む(江戸時代中期整地層)
- 25 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土を微量含む
- 26 10YR2/3黒褐色砂泥 締まりが悪い 炭を中量含む 瓦片を微量含む(土坑 江戸時代中期)
- 27 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 28 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 瓦片を少量含む
- 29 10YR6/6明黄褐色砂泥 堅く締まる 炭を微量含む(江戸時代中期整地層 粘土)
- 30 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや締まる 炭・焼土を微量含む(江戸時代中期整地層)
- 31 7.5YR4/3褐色砂泥 φ10～15cmの礫が詰まる 瓦片を少量含む(集石77)
- 32 10YR4/2灰黄褐色砂泥 瓦片を多量含む(江戸時代中期整地層)
- 33 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～5cmの礫を微量含む 下部に10YR5/6黄褐色極細砂ブロックを含む 炭を少量含む(江戸時代中期整地層)
- 34 7.5YR4/4褐色砂泥 炭を少量含む(江戸時代中期整地層)
- 35 10YR4/4褐色砂泥 炭を少量含む 瓦片を少量含む
- 36 10YR4/6褐色砂泥 堅く締まる 炭を微量含む(江戸時代中期整地層)
- 37 7.5YR3/2黒褐色砂泥 堅く締まる φ1～3cmの礫を少量含む(溝155)
- 38 10YR4/4褐色砂泥(土坑120)
- 39 7.5YR3/4暗褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 土器片・瓦片を多量含む(土坑50 江戸時代中期)
- 40 10YR5/6黄褐色砂泥 やや締まる(江戸時代前期整地層)

基である。

(2) 基本層序(図版1、図6～8)

調査地全域には約10～15cmの厚さの表土の下に、約20～30cmの厚さの近代の盛土が行われている。近現代の表土・盛土は南に向かって厚くなる。この下層は約20～25cmの厚さの江戸時代後期の整地層である褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥などである。

これらの下層は約30～40cmの厚さの江戸時代中期の整地層である。江戸時代中期の整地層は南西に向かって厚くなり、西壁断面南部では褐色砂泥・明黄褐色砂泥・黄灰色極細砂のブロックを含む灰黄褐色砂泥の3層、X=109,495ライン付近セクション断面西部では黄褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥・黄褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色小礫混シルト～細砂の3層を認めたことから、3段階にわたって行われていることがわかる。

この下層は江戸時代前期の整地層である褐色粘質土・黄褐色砂泥・褐色砂泥などが調査区のほぼ全域に広がる。整地層は東に向かって厚くなり、東部中央では褐色粘質土の上に、ほぼ方形の平面形で暗褐色砂泥を積み上げている。調査はこの整地層上面での遺構検出にとどめているので、この層を含めた下層の層序については下層の遺構と合わせて後述する。

調査では重機で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、江戸時代後期整地層下面を第2面、江戸時代前期整地層上面を第3面として遺構検出を行った。また、江戸時代後期整地層を第1層、

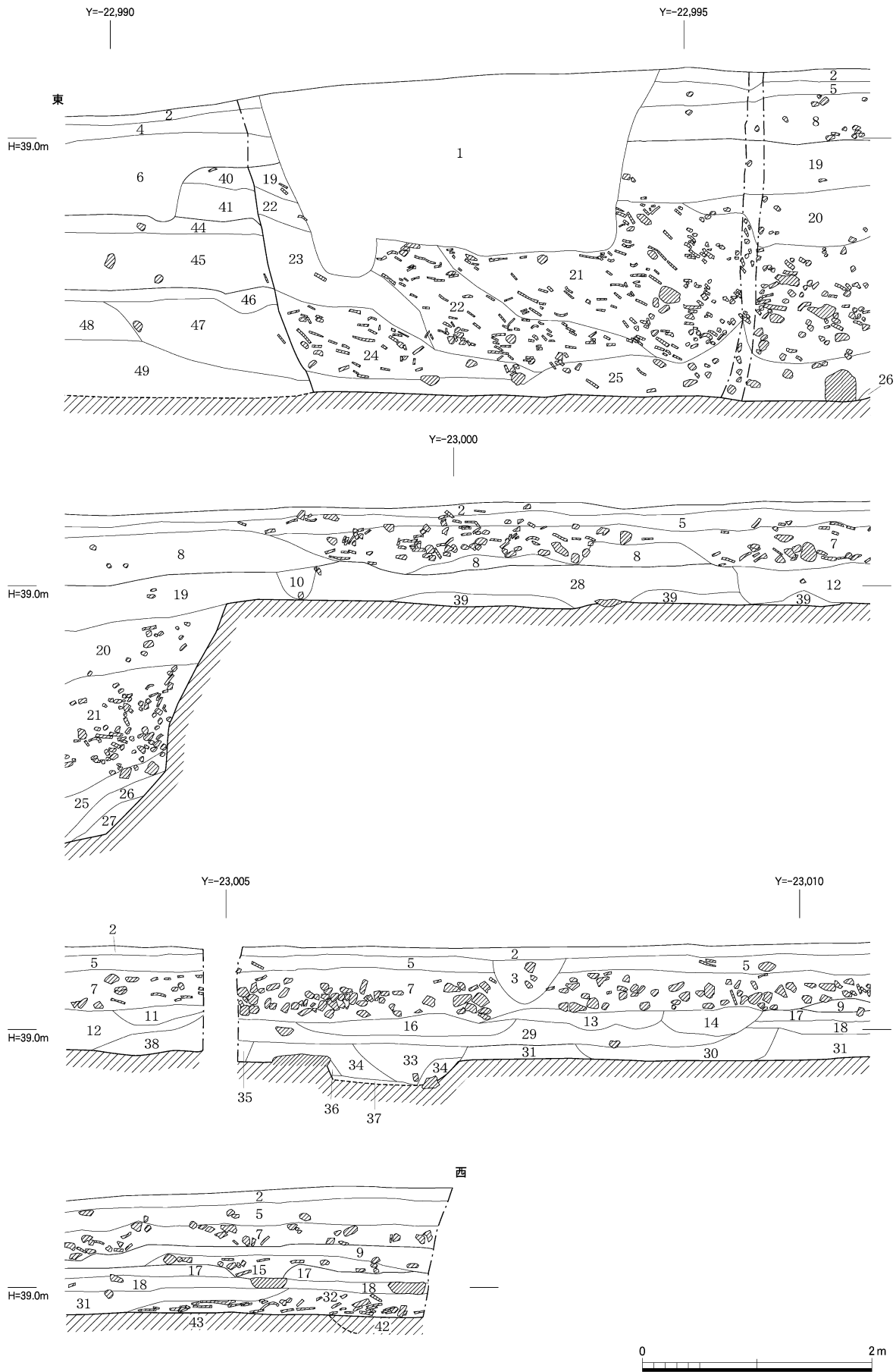
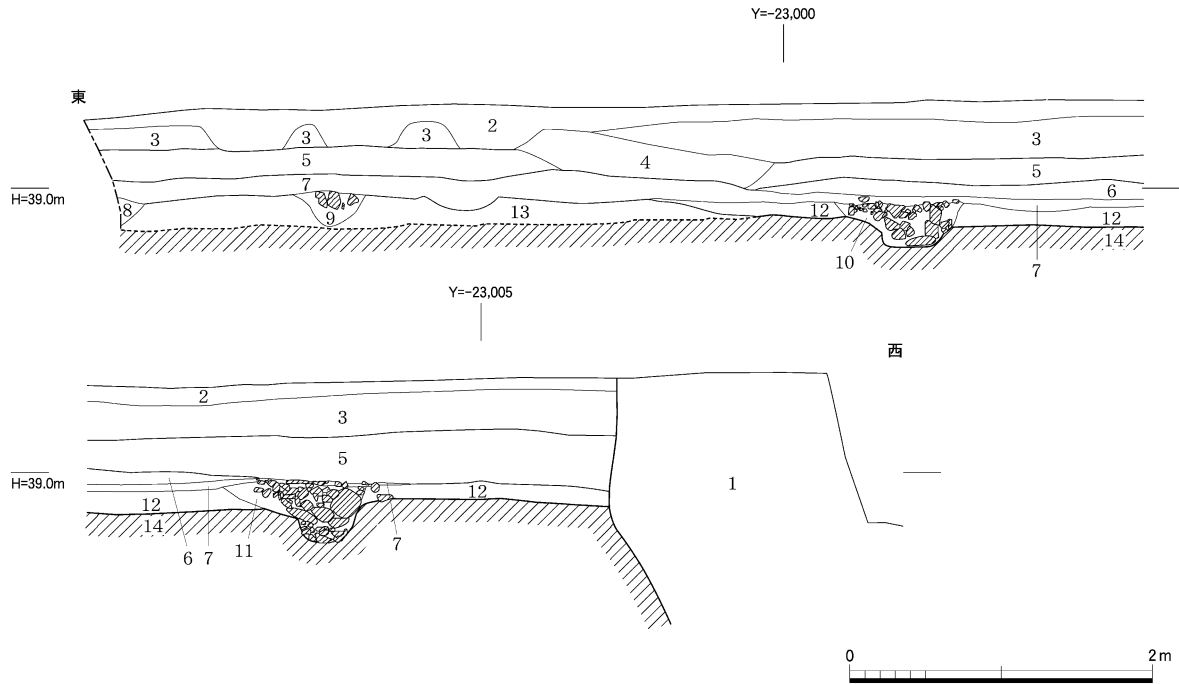


図7 桜の園南壁断面図 (1 : 50)

- 1 旧9区埋土
- 2 表土
- 3 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～8cmの礫を中量含む
- 4 2.5Y3/3オリーブ褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 瓦片を微量含む(近代盛土)
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 瓦片を少量含む
- 7 7.5YR4/3褐色砂泥 締まりが悪い φ1～15cmの礫を多量含む 瓦片を中量含む(近代か)
- 8 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや締まる φ1～10cmの礫を少量含む 2.5Y6/4にぶい黄色極細砂のφ1～10cmのブロックを少量含む 炭を微量含む 土器片・瓦片を微量含む(江戸時代中期～後期整地層)
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む
- 11 10YR3/4暗褐色砂泥
- 12 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 14 10YR4/4褐色砂泥 φ1～8cmの礫を少量含む 土器片を微量含む
- 15 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 16 10YR4/4褐色砂泥(土坑71)
- 17 7.5YR4/3褐色砂泥 やや締まる φ1～3cmの礫を微量含む 炭・焼土を少量含む(江戸時代中期整地層)
- 18 10YR6/6明黄褐色砂泥 堅く締まる 炭を微量含む(江戸時代中期整地層 粘土)
- 19 10YR4/4褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器を微量・瓦片を少量含む(土坑100第1層)
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量・瓦片を少量含む(上部土坑100第2層 下部土坑100第3層)
- 21 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を中量含む 瓦片を多量含む(土坑100第3層)
- 22 10YR3/4暗褐色泥砂 締まりが悪い 瓦片を多量含む(土坑100第3層)
- 23 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 やや締まる 瓦片を少量含む(土坑100第3層)
- 24 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～10cmの礫を微量含む 瓦片を中量含む(土坑100第3層)
- 25 10YR4/2にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を中量含む(大礫あり) 10YR5/2灰黄褐色シルトのφ5～10cmのブロックを少量含む 瓦片を少量含む(土坑100第3層)
- 26 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 粘質 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む(土坑100第4層)
- 27 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 極細砂～φ3cmの礫を少量含む 炭を少量含む(土坑100第5層)
- 28 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 29 7.5YR3/4暗褐色砂泥 φ1～5cmの礫を中量含む
- 30 10YR4/4褐色砂泥 φ3～10cmの礫を多量含む(土坑88)
- 31 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ1～5cmの礫を中量含む(江戸時代中期整地層)
- 32 10YR4/2灰黄褐色砂泥 瓦片を多量含む(江戸時代中期整地層)
- 33 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ1～5cmの礫を多量含む(溝130埋土)
- 34 10YR4/6褐色砂泥に10YR5/6黄褐色粘質土のφ1～3cmのブロックが微量混じる φ1～5cmの礫を少量含む(溝130石材抜き取り痕か)
- 35 10YR4/6褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む
- 36 7.5YR4/4褐色砂泥(溝130)
- 37 10YR5/6黄褐色砂泥 粘質・やや締まる(溝130粘土か)
- 38 10YR3/3暗褐色砂泥 炭を少量含む
- 39 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥に10YR5/6黄褐色極細砂のφ1～3cmのブロックが少量混じる 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 40 10YR2/3黒褐色砂泥 粘質 土器片を微量含む(江戸時代前期整地層)
- 41 10YR5/6黄褐色極細砂と10YR4/4褐色砂泥が混じる 炭を少量含む 土器片を少量含む(江戸時代前期整地層)
- 42 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を少量含む(溝155)
- 43 10YR5/6黄褐色砂泥 やや締まる(江戸時代前期整地層)
- 44 10YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～5cmの礫を少量含む(江戸時代前期盛土)
- 45 10YR5/6黄褐色泥砂 堅く締まる φ1～10cmの礫を多量含む(江戸時代前期盛土)
- 46 10YR4/4褐色粘質シルト φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む 土器片を微量含む
- 47 10YR2/3黒褐色粘質シルト細砂 φ1～3cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を微量含む
- 48 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 堅く締まる φ1～5cmの礫を多量含む
- 49 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 土器片を少量含む

表1 遺構概要表

時代	遺構
江戸時代初期	桜の園整地層
江戸時代前期	桜の園溝130・溝164・溝165・溝175・中央部礎石柱穴列・柱穴29・柱穴159・南東部根石群・石列211・整地層
江戸時代中期	桜の園石鳥居・石組92・集石77・集石81・集石85・集石93・溝25・溝26・溝27・溝43・溝45・南西部礎石群・土坑105・土坑50・土坑82・土坑100・土坑103・礎石
江戸時代後期	桜の園土坑20、緑の園土間・柱穴24
近代	緑の園溝17



- 1 旧8区埋土
- 2 表土
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 瓦片を少量含む (近代盛土)
- 4 10YR2/3黒褐色砂泥 φ1～5cmの礫を微量含む 瓦片を中量含む (近代盛土)
- 5 7.5YR4/3褐色砂泥 φ1～5cmの礫を微量含む 瓦片を微量含む (江戸時代後期整地層)
- 6 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む (江戸時代中期整地層)
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む (江戸時代中期整地層)
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑128)
- 9 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥 (土坑)
- 10 10YR4/4褐色砂泥 φ2～15cmの礫が詰まる (溝45)
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ2～15cmの礫が詰まる (溝43)
- 12 10YR5/3にぶい黄褐色小礫混シルト～細砂に2.5Y5/4黄褐色シルトブロックが混じる φ2～8cmの礫を多量含む (江戸時代中期整地層)
- 13 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～3cmの礫を少量含む (江戸時代前期整地層)
- 14 10YR4/6褐色粘質土 きめが細かい (江戸時代前期整地層)

図8 桜の園セクション断面図 (X=-109,495 ライン付近 1:50)

江戸時代中期整地層を第2層として遺物を採集した。ただし、第2面の調査は複数の江戸時代中期整地層を順次掘り下げながら、遺構の精査・記録を行った。

(3) 第1面の遺構 (図版2、図9)

遺構は少なく、土坑などを検出したのみである。南半部を中心に樹木の根株による攪乱が広い範囲に及んでいる。西部の南北方向に細長い攪乱は2000年から2001年にかけての調査の旧8区、北東部・南東部の方形の攪乱は同じ調査の旧9区¹⁷⁾である。

土坑20 中央部で検出した。平面形は南北約4.0～5.0m、東西約4.0mのほぼ方形で、深さは約0.4mである。大きき約5～20cmの礫が密に詰まる。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代後期の遺物が少量出土した。

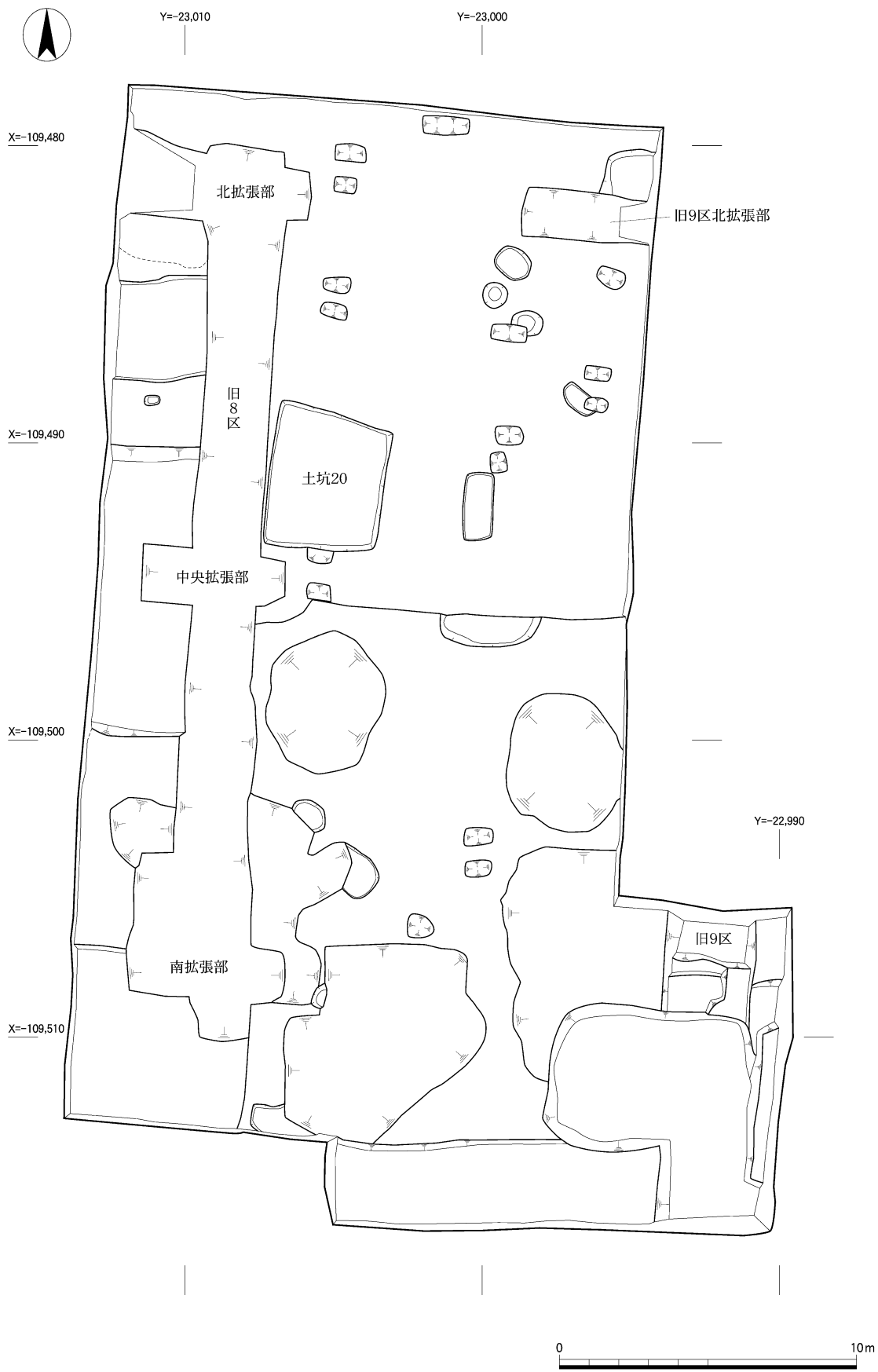


図9 桜の園第1面平面図 (1:200)

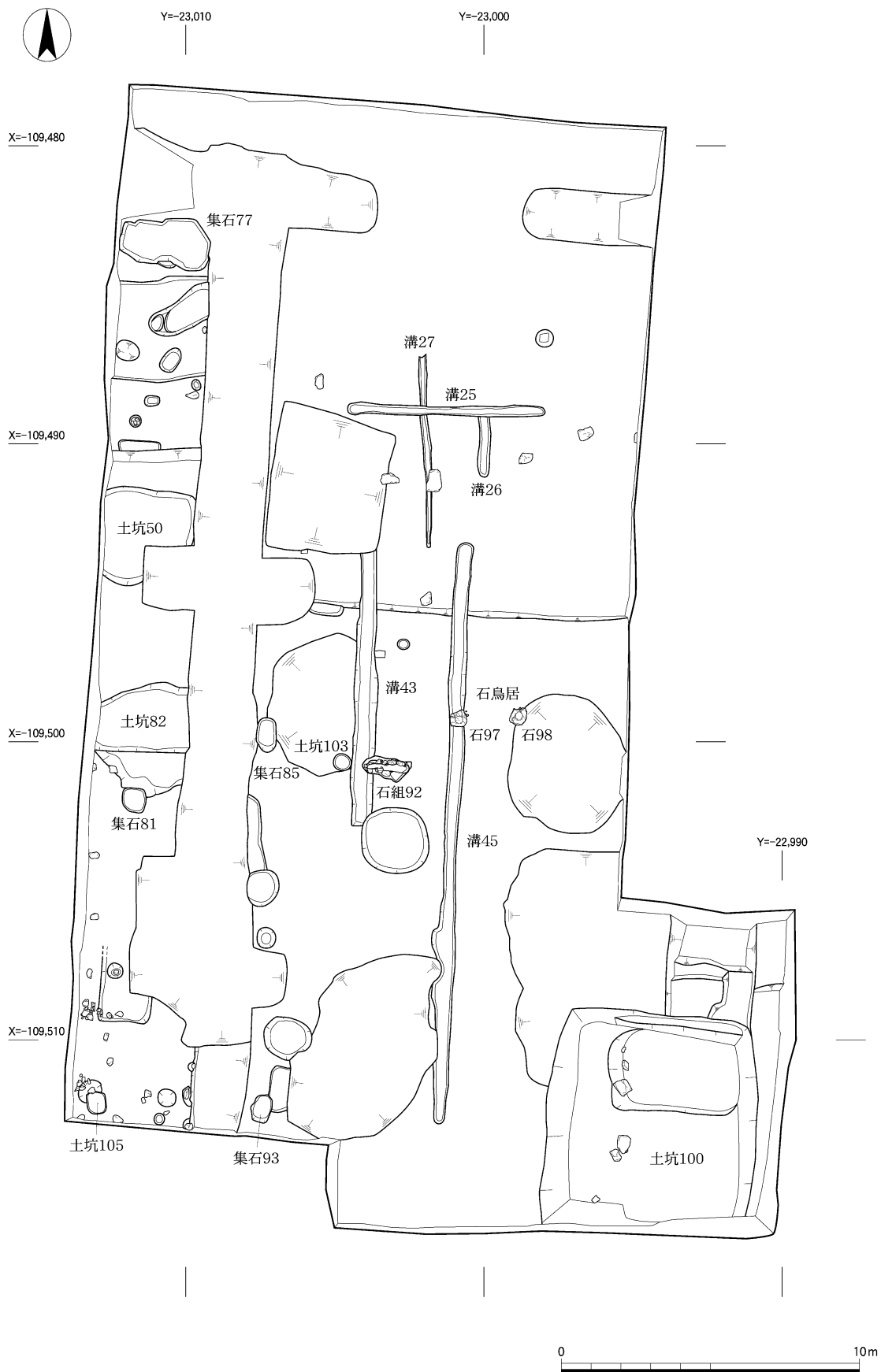


図10 桜の園第2面平面図 (1 : 200)

(4) 第2面の遺構 (図版3～7、図10～図18)

石鳥居・石組・集石・溝・土坑・柱穴・礎石などを検出した。

石鳥居 (図版4-2、図11) 中央部で検出した。石97・石98が対になる。石97は大きさ約60cmで、上面中央に直径約25cm、深さ約10cmの円形の穴を穿つ。北西側の上面は少し破損する。石材の種類は花崗岩である。掘形は直径約0.8mの円形で、深さは約0.3mである。石98は大きさ約60cmで、上面中央に直径約25cm、深さ約10cmの穴を穿つ。石材の種類は花崗岩である。掘形は南東側を攪乱されるが、長径約1.1m・短径約0.9mの楕円形に復元できる。深さは約0.3mである。石97・石98の穴の間隔は約2.0mで、2基が1組となる石鳥居の台石と考えている。周囲の整地層上面にはやや粘質の褐色シルト～極細砂をうすく貼っており、化粧土の可能性はある。

石組92 (図版5-1、図12) 中央部の石鳥居南西側で検出した。不明瞭であるが、掘形は南北約0.6～0.7m、東西約1.6mの不整形な平面形で、深さは約0.1mである。大きさ約10～40cmの石を平坦な面を内側に向けて東西方向に細長い「コ」字形に並べる。東側には石はない。石材の種類は砂岩・チャートなどである。埋土は褐色砂泥～細砂で、江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

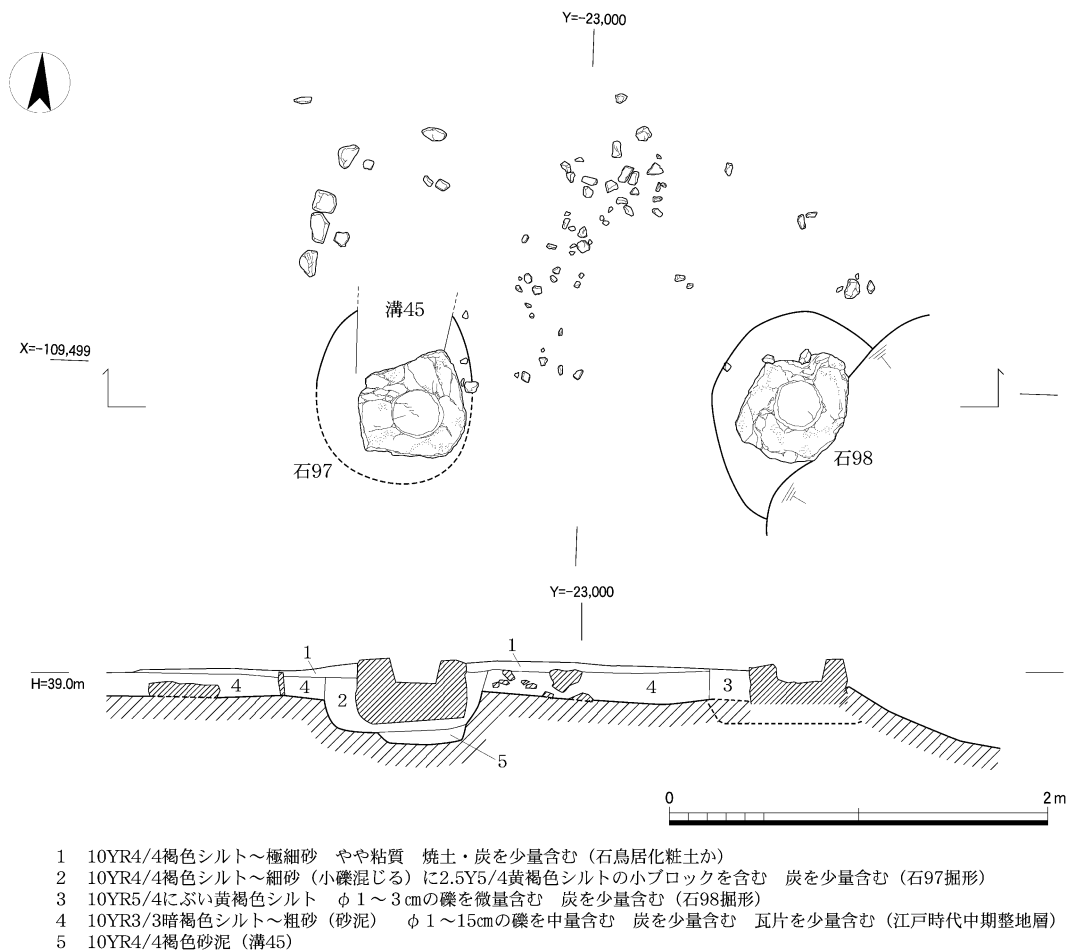


図11 桜の園石鳥居 (石97・石98) 実測図 (1:40)

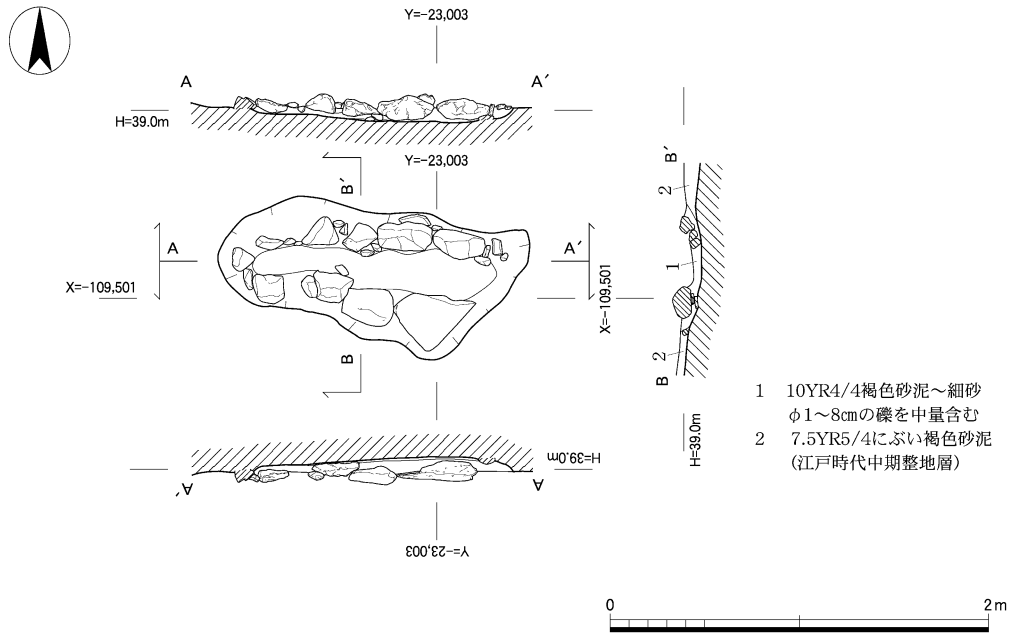


図12 桜の園石組92実測図(1:40)

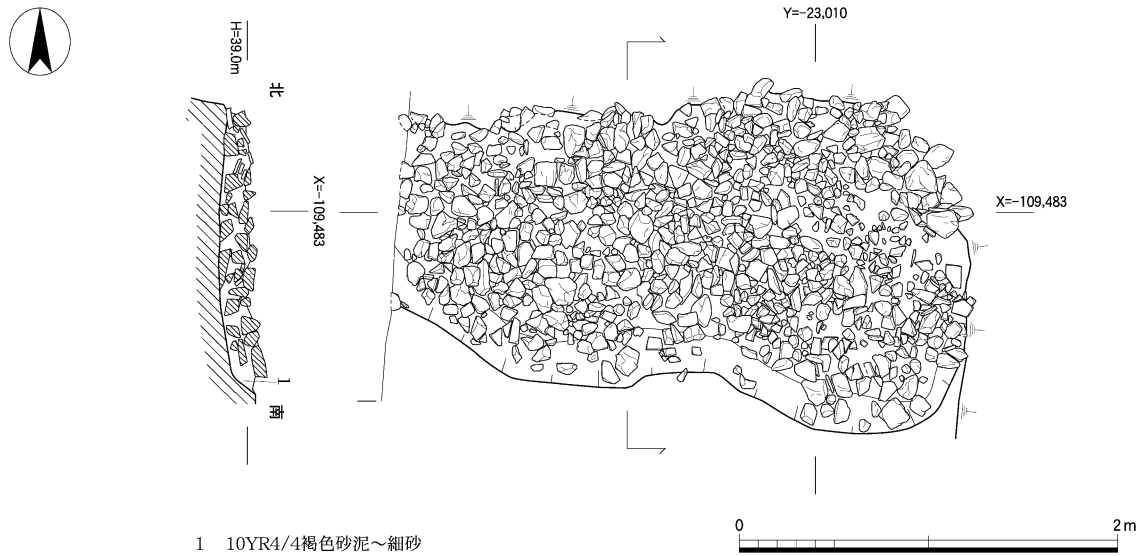


図13 桜の園集石77実測図(1:40)

集石77(図版5-2、図13)北西部で検出した。北側・東側を旧8区に攪乱され、西側は調査区外となるが、平面形は南北1.8m以上、東西3.0m以上の隅丸方形に復元できる。深さは約0.2mである。大きさ数cmから20cmの礫が密に詰まる。埋土はにぶい黄褐色砂泥~細砂で、江戸時代中期の遺物が出土した。

集石81(図版5-3、図14)西部で検出した。平面形は南北約0.8m、東西約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.1mである。大きさ数cmから20cmの礫が詰まる。埋土はにぶい黄褐色シルト~細砂で、江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

集石85(図版5-4、図14)中央部で検出した。わずかに西端を旧8区に攪乱されるが、平

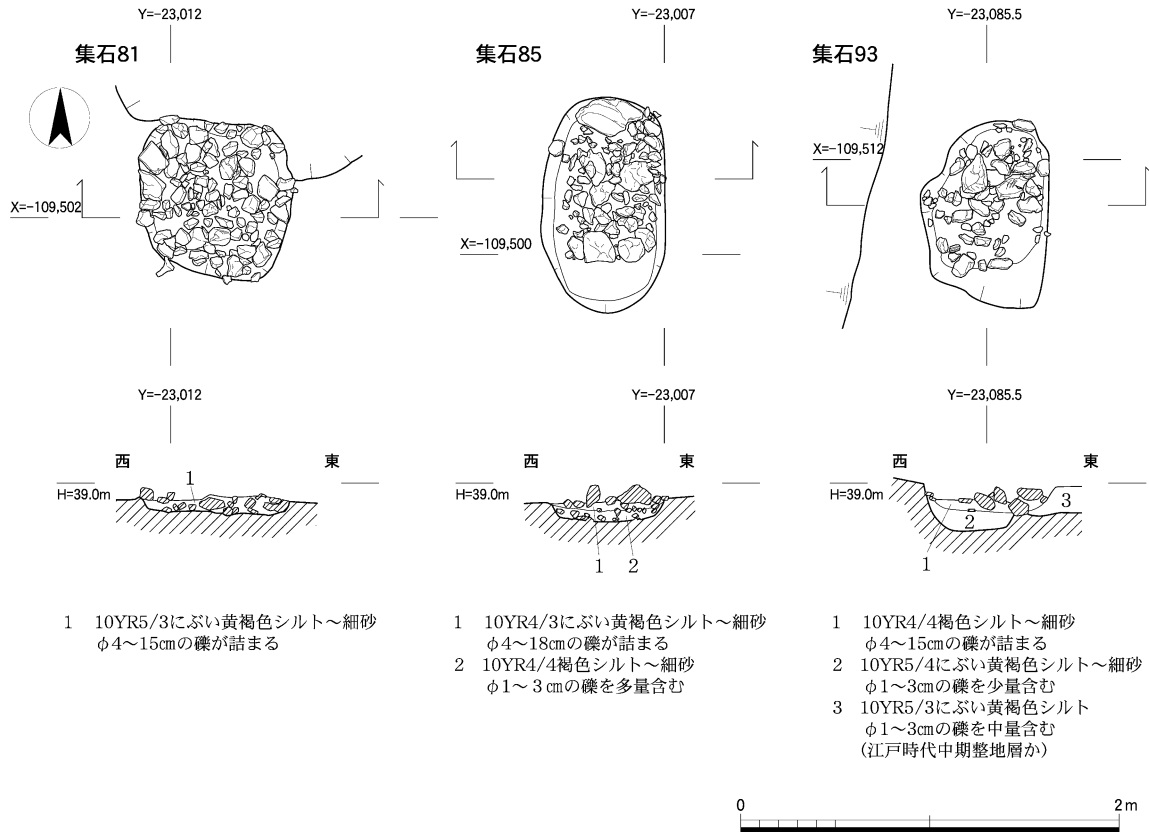


図 14 桜の園集石 81・集石 85・集石 93 実測図 (1 : 40)

面形は南北約 1.1 m、東西約 0.6 m の楕円形で、深さは約 0.2 m である。大きき数 cm から 30 cm の礫が詰まる。埋土はにぶい黄褐色シルト～細砂などで、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

集石 93 (図版 6 - 2、図 14) 南西部で検出した。平面形は南北約 1.0 m、東西約 0.7 m の楕円形で、深さは約 0.2 m である。大きき数 cm から 20 cm の礫が疎らに詰まる。埋土は褐色シルト～細砂などで、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

溝 25 (図版 3 - 2) 中央部北寄りで検出した東西方向の溝である。東側・西側とも調査区内で途切れる。西側でわずかに北に振る方位をとる。断面形は U 字形で、長さ約 6.6 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m である。底面は平坦で、大きき数 cm から 15 cm の礫が詰まる。埋土は黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

溝 26 (図版 3 - 2) 中央部北寄りで検出した南北方向の溝である。南側は調査区内で途切れ、北側は溝 25 に接するが、溝 26 の方が古い。断面形は浅い U 字形で、長さ約 2.0 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.1 m である。底面は平坦で、大きき数 cm から 15 cm の礫が詰まる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

溝 27 (図版 3 - 2) 中央部北寄りで検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区内で途切れ、溝 25 と直交するが、溝 27 の方が古い。北側でわずかに西に振る方位をとる。断面形は浅い U 字形で、長さ約 6.4 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.1 m である。底面は平坦で、礫は含まない。

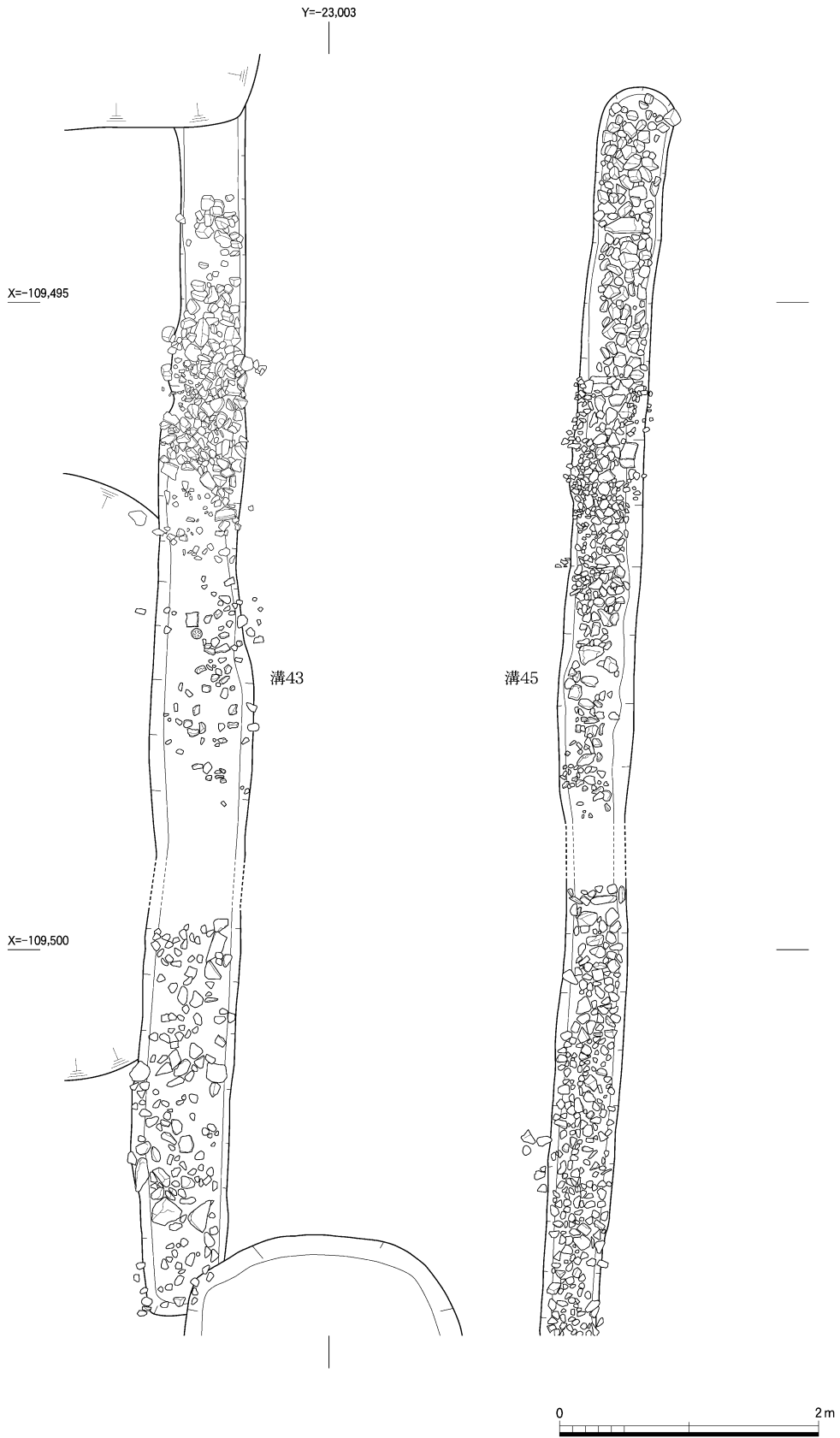


図15 桜の園溝43・溝45実測図1 (1:50)

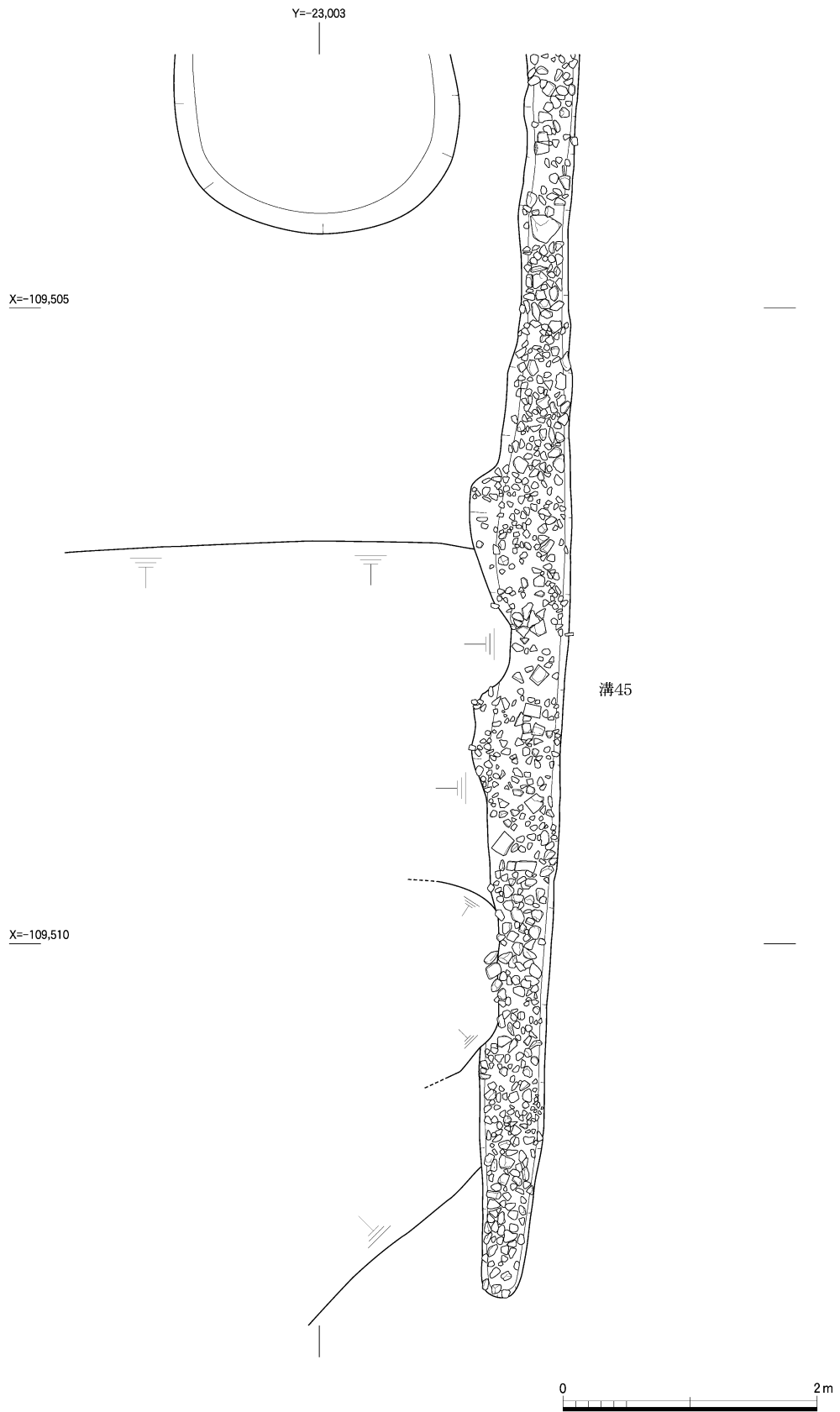


図16 桜の園溝43・溝45実測図2 (1:50)

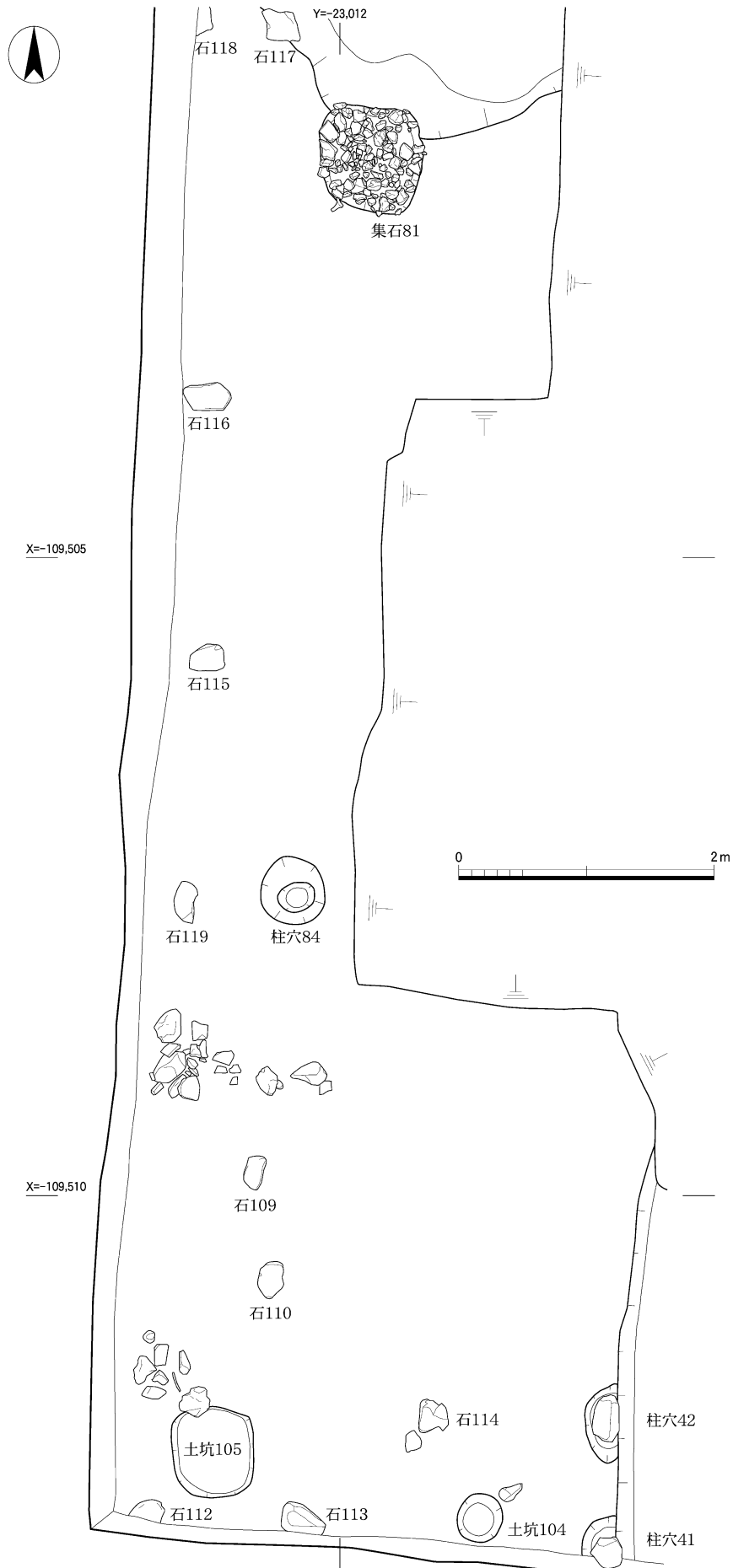
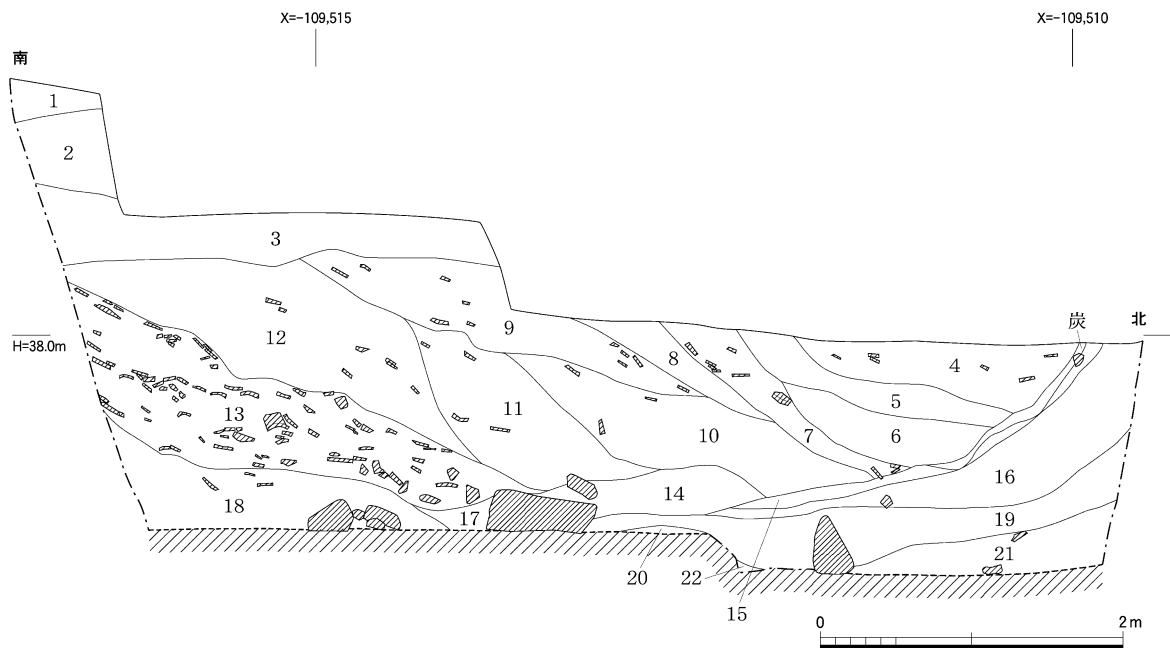


図17 桜の園第2面南西部礎石群実測図 (1 : 50)



- 1 表土
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む
- 3 10YR4/4褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む 土器片・瓦片を微量含む（第1層）
- 4 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～5cmの礫を中量含む 炭を微量含む 瓦片を少量含む（第3層）
- 5 7.5YR3/4暗褐色砂泥 φ1～8cmの礫を少量含む 炭片を微量含む 瓦片を微量含む（第3層）
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 瓦片を微量含む（第3層）
- 7 7.5YR4/4褐色砂泥 締まりが悪い φ1～10cmの礫を多量含む 瓦片を少量含む（第3層）
- 8 10YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～3cmの礫を中量含む（第3層）
- 9 7.5YR4/3褐色砂泥 φ1～8cmの礫を少量含む 土器片を微量・瓦片を少量含む（上部第2層・下部第3層）
- 10 10YR4/4褐色砂泥に10YR5/6黄褐色極細砂のφ0.5～3cmのブロックが少量混じる φ1～8cmの礫を少量含む 瓦片を微量含む（第3層）
- 11 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～15cmの礫を多量含む 瓦片を中量含む（第3層）
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量・瓦片を少量含む（上部第2層・下部第3層）
- 13 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を中量含む 瓦片を多量含む（第3層）
- 14 10YR3/3暗褐色砂泥に10YR5/2灰黄褐色シルトのφ5～10cmのブロックが混じる（第3層）
- 15 10YR4/4褐色砂泥 粘質 炭を多量含む（第4層）
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 粘質 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む（第4層）
- 17 10YR6/2灰黄褐色シルト粗砂 φ5cmの礫を中量含む 炭を微量含む（第3層）
- 18 10YR4/2にぶい黄褐色砂泥に10YR5/2灰黄褐色シルトのφ5～10cmのブロックが少量混じる φ1～10cmの礫を中量含む（大礫あり）
瓦片を少量含む（第3層）
- 19 2.5Y4/3オリブ褐色シルト 極粗砂～φ3cmの礫を少量含む 炭を少量含む（第5層）
- 20 10YR3/2黒褐色砂泥 やや締まる φ1～3cmの礫を中量含む 土器片を微量含む
- 21 2.5Y4/1黄灰色粘土 粗砂～極粗砂を中量含む 炭・植物遺体を中量含む 瓦片を少量含む（第6層）
- 22 7.5Y3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～5cmの礫を多量含む

図18 桜の園土坑100セクション断面図（1：50）

埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

溝43（図版7-1・2、図15・16） 中央部から南部で検出した南北方向の溝である。北側は攪乱され、南側は調査区内で途切れる。北側でわずかに東に振る方位をとる。断面形はU字形で、長さ約9.3m、幅約0.5～0.7m、深さ約0.4mである。完掘していないため底面の傾斜は不明である。大きさ数cmから15cmの礫が詰まる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

溝45（図版7-1、図15・16） 中央部から南部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区内で途切れ、石鳥居の石97と重複するが、溝45の方が古い。北側でわずかに東に振る方位をとる。断面形は浅いU字形で、長さ約19.5m、幅約0.4～0.6m、深さ約0.3mである。完掘していないため底面の傾斜は不明である。大きさ数cmから15cmの礫が詰まる。埋土は黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物が出土した。溝43とは約3.1mの間隔で平行する。

南西部礎石群（図版6、図17）南西部に分布する。大きさ約20～40cmの石を平坦な面を上にして据える。石材は砂岩・チャートが多い。掘形は直径約0.3～0.4mの円形で、深さは約0.1～0.2mであるが、掘形を確認できない礎石が多い。間隔が不揃いであることから、抜き取られたものがあると考えており、建物の礎石であった可能性が高い。また、周辺の江戸時代中期の整地層からは金箔瓦を含む瓦がまとまって出土した。

土坑105 南西隅の南西部礎石群に囲まれた位置で検出した。平面形は南北約0.7m、東西約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、ブタ／イノシシの後肢の骨がまとまって出土した。

土坑50 西部で検出した。南東側を旧8区に攪乱され、西側は調査区外となるが、平面形は南北約3.8m、東西3.0m以上の隅丸方形に復元できる。深さは約0.3mである。埋土は褐色細砂～砂泥で、江戸時代中期の遺物がまとまって出土した。

土坑82 西部で検出した。東側を旧8区に攪乱され、西側は調査区外となるが、平面形は南北約3.8m、東西3.1m以上のほぼ円形に復元できる。深さは約0.3mである。埋土は暗褐色砂泥などで、江戸時代中期の遺物が出土した。

土坑100（図版7-3、図7・18）南東部で検出した大型の土坑である。南側は調査区外となるが、平面形は南北7.7m以上、東西約7.0mの方形で、深さは約2.1mである。底面には大きさ約40～60cmの石が散在するが、掘形はなく、据え付けたものかは不明である。調査区南壁・セクション断面の状況にあらわれているように、いったん北側から埋めたのち、南東側から一気に埋め立てている。埋土は大小の礫や多量の瓦を含む褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、6層に分けて遺物を採集したが、顕著な時期差を看取できなかった。新しい特徴をもつ土器があることから遺構の埋没年代は江戸時代中期であるが、出土遺物の大部分は江戸時代前期に属する。

土坑103 中央部で検出した。樹木の根株により攪乱されるが、平面形は直径約1.1mの円形で、深さは約0.2mである。大きさ数cmから20cmの礫を含む。埋土は褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

礎石 調査区北半南東部を中心に分布する。掘形をもたず、方位・間隔が不揃いなものが多いが、一部の礎石については第3面で掘形を確認できたことから、江戸時代前期の礎石上部が中期の整地層上面に露呈していたことが明らかとなった。

（5）第3面の遺構（図版8～10、図19～21）

溝・建物礎石・柱穴列・柱穴・石列・整地層などを検出した。

溝130（図版9-1～3、図20）北部から南部にかけて検出した逆「コ」字形の溝である。北部東西方向部分東側は調査区内で途切れ、南部東西方向部分東側は土坑100に攪乱される。また、南西側屈曲部分は調査区外となる。東西方向部分では西側でわずかに北、南北方向部分では北側でわずかに東に振る方位をとる。北部東西方向部分は、断面形は皿形で、長さ約7.9m、幅約1.0～1.5m、深さ約0.1mである。南北方向部分は、断面形は浅いU字形で、長さ約26.7m以上、

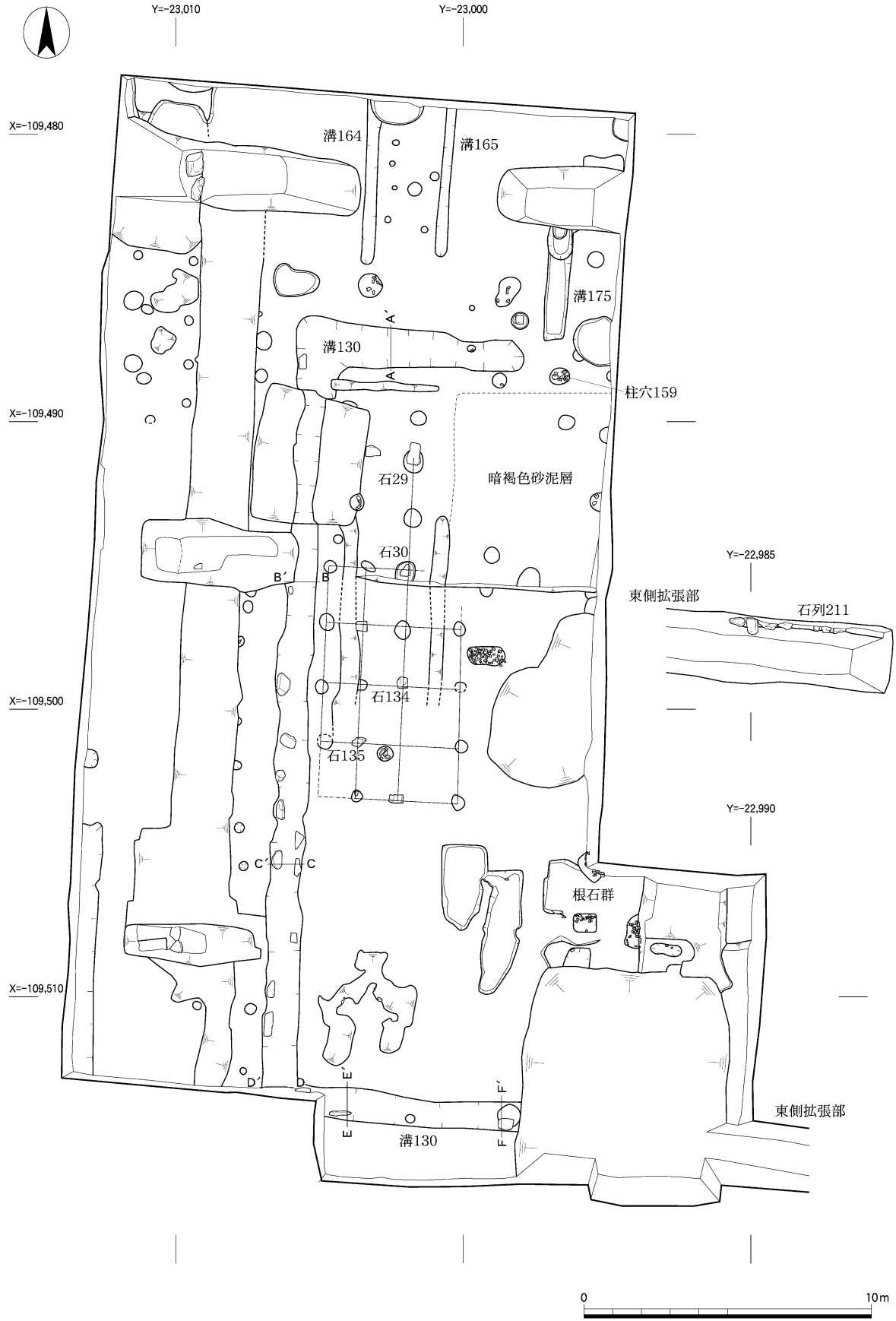
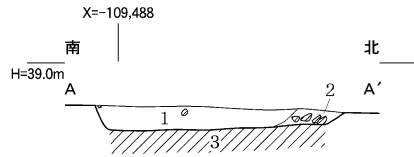
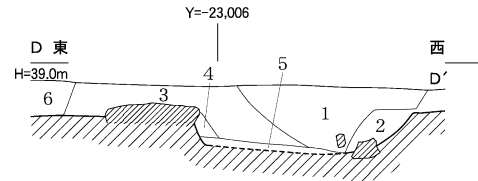


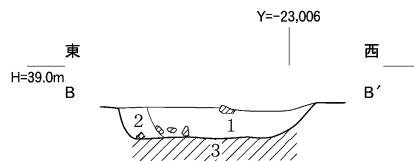
図19 桜の園第3面平面図 (1 : 200)



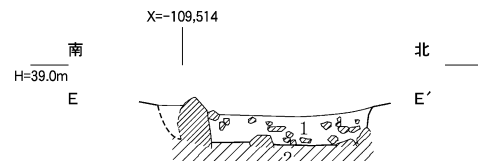
- 1 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘質 φ 1～3 cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 2 10YR4/6褐色砂泥 φ 1～3 の礫を中量含む
- 3 10YR4/4褐色砂泥に10YR6/6明黄褐色極細砂のφ 1～3 cmのブロックが微量混じる



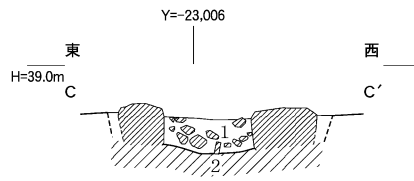
- 1 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ 1～5 cmの礫を多量含む
- 2 10YR4/6褐色砂泥に10YR5/6黄褐色粘質土のφ 1～3 cmのブロックが微量混じる φ 1～5 cmの礫を少量含む (石材抜き取り痕か)
- 3 10YR4/6褐色砂泥 φ 1～5 cmの礫を少量含む
- 4 7.5YR4/4褐色砂泥
- 5 10YR5/6黄褐色砂泥 粘質・やや締まる (粘土か)
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ 1～3 cmの礫を少量含む



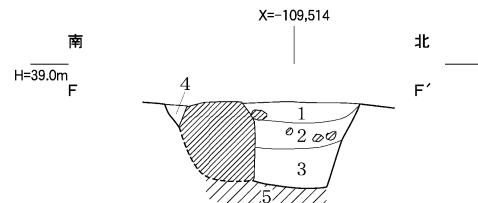
- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 砂質・締まりが悪い φ 1～3 cmの礫を少量含む
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥に10YR5/6黄褐色粘質土のφ 1～3 cmのブロックが少量混じる (石材抜き取り痕か)
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ 1～5 cmの礫を中量含む



- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 砂質・締まりが悪い φ 1～3 cmの礫を中量含む
- 2 10YR5/6黄褐色砂泥 粘質・やや締まる φ 5～8 cmの礫を少量含む



- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 砂質・締まりが悪い φ 1～5 cmの礫を多量含む
- 2 10YR4/6褐色砂泥 粘質・やや締まる φ 5 cmの礫を微量含む (粘土か)



- 1 7.5YR4/4褐色砂泥 砂質・締まりが悪い φ 1～3 cmの礫を微量含む
- 2 10YR5/6黄褐色砂泥 粘質・やや締まる φ 1～5 cmの礫を少量含む (粘土か)
- 3 10YR4/4褐色砂泥
- 4 10YR5/6黄褐色砂泥粘質 やや締まる (3層と対応)
- 5 7.5YR4/3褐色砂泥



図 20 桜の園溝 130 セクション断面図 (1 : 40)

幅約 1.2 m、深さ約 0.2 mである。南部東西方向部分は、断面形は浅いU字形で、長さ 9.0 m以上、幅約 1.0～1.2 m、深さ約 0.2 mである。底面は南北方向部分は南、南部東西方向部分は西に向けてわずかに傾斜する。大部分が抜き取られてはいるが、両側に大きさ約 40～80 cmの石を平坦な面を内側に向けて並べる構造で、石材の種類は砂岩・チャートが多い。底面は素掘りで、粘質の土を入れて整えている。埋土は褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥などで、江戸時代前期の遺物が出土した。溝 130 は後述する建物礎石・柱穴列の西側を囲んでおり、溝 130 より西側にはこの時期の遺構がほとんどない。また、底面の勾配から南西に向けて排水を意図していたことがわかるので、調査区外の南西側屈曲部分はT字形に交叉し、さらに南に延びていたことも考えられる。

溝 164 北部で検出した南北方向の溝である。南側は調査区内で途切れ、北側は調査区外となる。

北側でわずかに東に振る方位をとる。長さ 5.7 m 以上、幅約 0.4 m で、完掘していないため断面形・深さ・底面の傾斜は不明である。埋土は黄褐色粘質土のブロックが混じるにぶい黄褐色砂泥で、出土遺物はない。

溝 165 北部で検出した南北方向の溝である。南側は調査区内で途切れ、北側は調査区外となる。北側でわずかに東に振る方位をとる。長さ 5.1 m 以上、幅約 0.3 m で、完掘していないため断面形・深さ・底面の傾斜は不明である。埋土は明黄褐色粘質土のブロックが混じるにぶい黄褐色砂泥で、出土遺物はない。溝 164 とは約 2.7 m の間隔で平行し、溝 164 寄りには直径約 0.15 ～ 0.25 m の柱穴がやや不揃いに南北方向に並ぶ。

溝 175 北東部で検出した南北方向の溝である。北側を旧 9 区に攪乱され、南側は調査区内で途切れる。北側でわずかに東に振る方位をとる。断面形は逆台形で、長さ 4.0 m 以上、幅約 0.8 m、深さ約 0.3 ～ 0.4 m である。底面は平坦で、大きさ約 5 ～ 15 cm の礫を多く含む。埋土は褐色砂泥で、江戸時代前期の遺物が出土した。

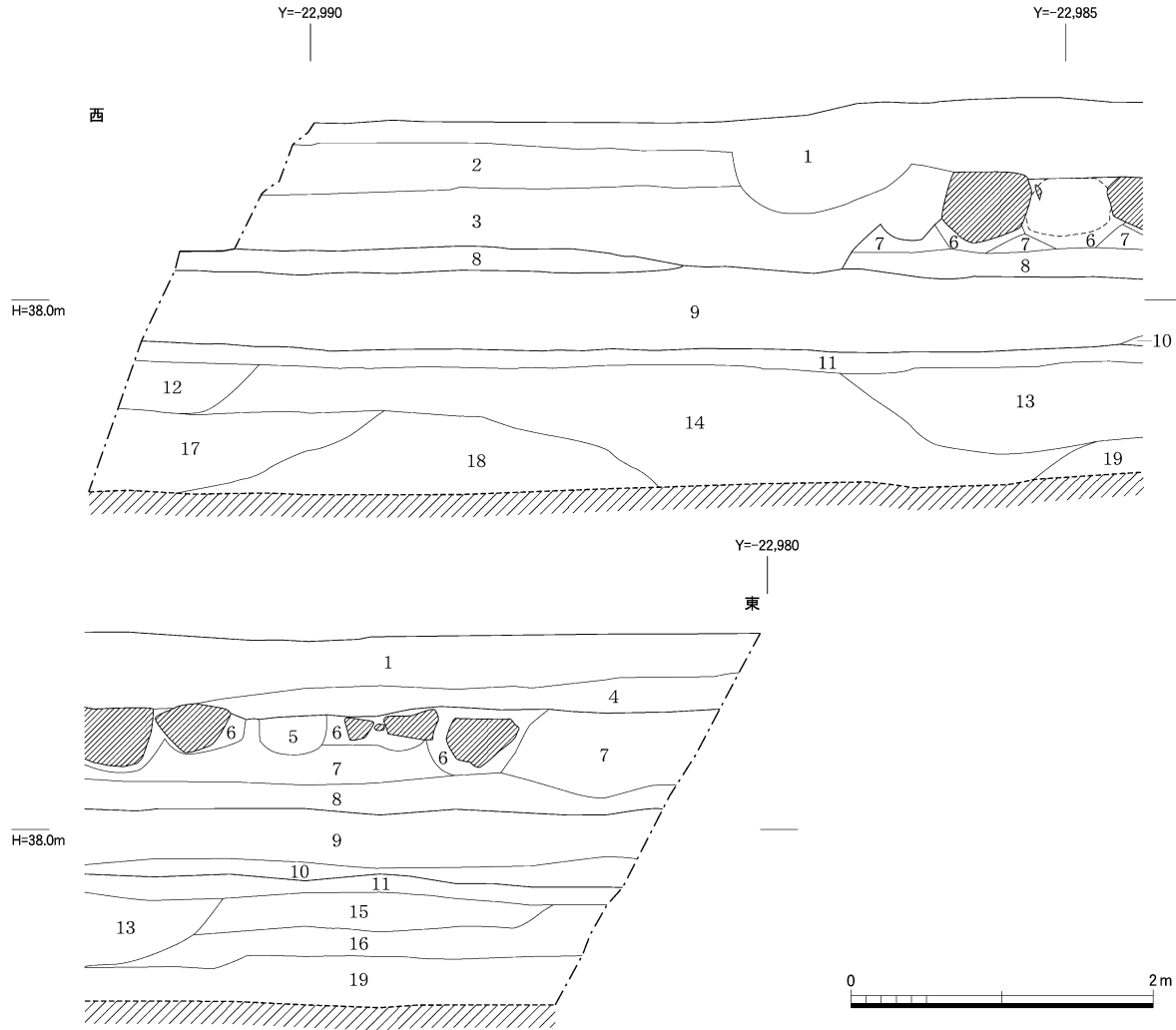
中央部礎石・柱穴列（図版 8 - 2・9 - 4 ～ 7） 溝 130 に囲まれた中央部に分布する。礎石・柱穴が南北方向に 4 列、東西方向に 5 列以上並ぶ。礎石は大きさ約 40 ～ 80 cm の石を平坦な面を上にして据える。石材は砂岩・チャートが多い。掘形は直径約 0.5 ～ 0.7 m で、いずれも完掘していないため深さは不明であるが、根石は確認していない。掘形を確認できないものが多いことから、整地と同時に礎石を据え付けている可能性があり、礎石の間に並ぶ柱穴は抜き取り痕の場合も考えられる。柱穴は直径約 0.5 ～ 0.6 m の円形で、いずれも完掘していないため深さは不明である。これらも礎石掘形あるいは礎石抜き取り痕の可能性がある。礎石・柱穴列の間隔は南北方向が西から約 1.2 m ・約 1.4 m ・約 2.0 m、東西方向が北から約 1.8 m ・約 1.8 m ・約 1.8 m ・約 1.8 m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥・褐色砂泥などで、出土遺物はない。

柱穴 29（図版 9 - 4） 中央部で検出した礎石を据える柱穴である。礎石の大きさは長軸方向約 70 cm ・短軸方向約 50 cm である。掘形は直径約 0.7 m の円形で、完掘していないため深さは不明である。礎石は第 2 面で検出したが、掘形は第 3 面で認めた。周囲から硯などが出土した。

柱穴 159 北東部で検出した。掘形は直径約 0.6 m の円形で、完掘していないため深さは不明である。大きさ約 8 ～ 20 cm の礫を含んでおり、礎石を据えるための根石の可能性はある。埋土は褐色砂泥で、江戸時代前期の遺物が出土した。奈良時代の瓦が混入する。

南東部根石群（図版 10 - 1） 南東部で L 字形に 3 基を検出した。一辺約 0.6 ～ 1.0 m の不整形な方形で、完掘していないため深さは不明である。大きさ約 5 ～ 15 cm の礫を多量に含んでおり、礎石を据え付けるための根石と考えている。間隔は南北約 1.9 m、東西約 1.8 m である。埋土は暗褐色砂泥・黄褐色砂泥で、出土遺物はない。

石列 211（図版 10 - 2、図 21） 東側拡張部北壁で検出した東西方向の石列である。西側は攪乱され、東側が調査区外に延びるかは不明である。江戸時代前期の整地層を掘りくぼめ、大きさ約 30 ～ 70 cm の石を並べる。側面は凹凸があり不揃いで、上面の高さはほぼ一致しているが、東側では掘形埋土と同じ土で上面を覆っている部分がある。掘形埋土はにぶい黄褐色砂泥で、出土



- 1 表土
- 2 10YR4/6褐色砂泥 瓦片を少量含む（江戸時代中期の土坑か）
- 3 10YR4/4褐色砂泥 φ1～4cmの礫を中量含む 炭片・焼土を含む（江戸時代中期の土坑か）
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む（江戸時代中期か）
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥（石材抜き取り痕）
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 炭微量含む（石列211堀形）
- 7 10YR5/8黄褐色シルト 堅く締まる 10YR5/6明黄褐色極細砂が縞状になる（江戸時代前期整地層）
- 8 10YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～5cmの礫を少量含む（江戸時代前期整地層）
- 9 10YR5/6黄褐色泥砂 堅く締まる φ1～10cmの礫を多量含む（江戸時代前期盛土）
- 10 10YR4/6褐色シルト 極粗砂を多量含む φ1～8cmの礫を多量含む（江戸時代前期盛土）
- 11 10YR4/4褐色粘質シルト φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む（江戸時代初期整地層か）
- 12 10YR2/3黒褐色粘質シルト～細砂 φ1～3cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を微量含む
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックが混じる 炭片を少量含む 土器片を少量含む
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 堅く締まる φ1～5cmの礫を多量含む
- 15 10YR3/4暗褐色粘質シルト やや締まる φ1～5cmの礫を微量含む 土器片を微量・瓦片を多量含む
- 16 10YR3/1黒褐色粘質シルト粗砂～極粗砂 φ1～3cmの礫を微量含む 炭片を少量含む 瓦片を少量含む
- 17 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1～5cmの礫を少量含む 土器片を微量含む
- 18 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR5/6黄褐色極細砂のブロックが混じる やや締まる φ1～5cmの礫を少量含む 土器片を微量含む
- 19 2.5Y4/1黄灰色シルト 締まりが悪い 粗砂～φ2～3cmの礫を多量含む 炭を少量含む

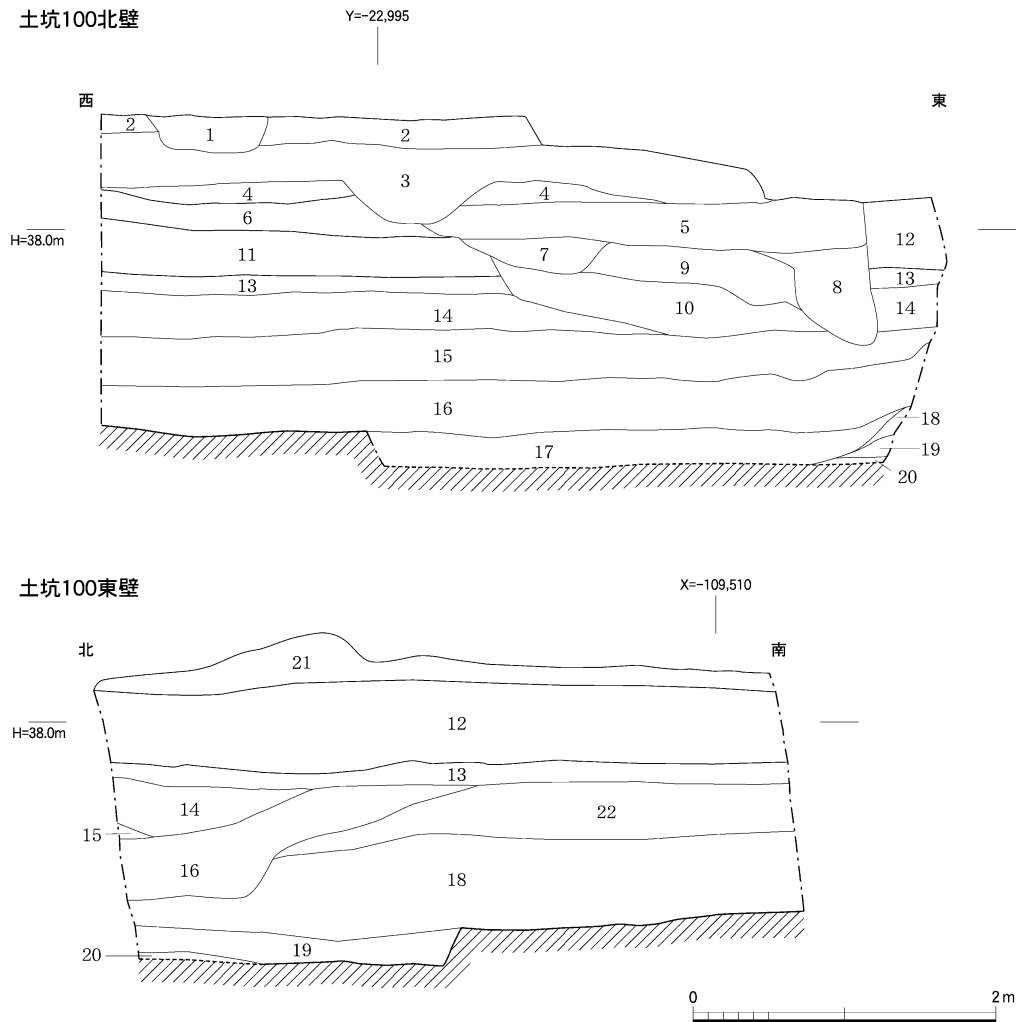
図 21 桜の園東側拡張部北壁断面図（1：50）

遺物はない。

整地層 江戸時代前期の整地層である褐色粘質土・黄褐色砂泥などが調査区のほぼ全域に広がる。整地層は東に向かって厚くなり、調査区東部では褐色粘質土の上に、ほぼ方形の平面形で暗褐色砂泥を積み上げている。中央部礎石・柱穴列と南東部根石群に対比できる建物の礎石・柱穴の構造の違いは、整地層が変化する部分と対応している。

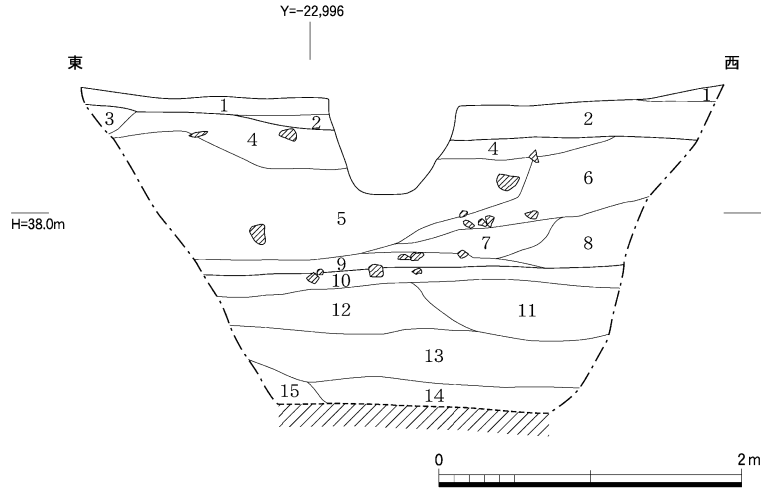
(6) 下層の層序・遺構 (図版 11 ~ 13、図 6 ~ 8・21 ~ 26)

第3面の調査は江戸時代前期の整地層上面での遺構検出にとどめたが、東側拡張部・土坑100壁面・旧9区北拡張部・旧8区南拡張部・旧8区中央拡張部・旧8区北拡張部ではさらに下層の



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を多量含む 土器片・瓦片を含む
- 2 10YR2/4暗褐色砂泥 炭を中量含む 土器片を中量含む
- 3 10YR5/6黄灰色極細砂と10YR5/3にぶい黄褐色砂泥が混じる 堅く締まる 10YR5/2灰黄褐色シルトのブロックを含む
- 4 7.5YR4/3褐色泥砂 φ1~5cmの礫を少量含む 10YR5/6黄灰色極細砂のブロックを含む
- 5 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 堅く締まる φ1~10cmの礫を多量含む (土坑)
- 6 7.5YR4/6褐色泥砂 φ1~8cmの礫を多量含む 堅く締まる (江戸時代前期整地層か)
- 7 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を中量含む 土器片・瓦片を少量含む (土坑)
- 8 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥に10YR6/6明黄褐色極細砂のブロックが混じる 炭を中量含む 土器片・瓦片を少量含む (土坑)
- 9 10YR5/6黄灰色極細砂と10YR4/6褐色砂泥が混じる 堅く締まる 炭を少量含む 瓦を少量含む (土坑)
- 10 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 堅く締まる φ1~10cmの礫を少量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む (土坑)
- 11 10YR2/3黒褐色泥砂 φ1~3cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 12 10YR5/6黄褐色泥砂 堅く締まる φ1~10cmの礫を多量含む (江戸時代前期盛土)
- 13 10YR4/4褐色粘質シルト φ1~3cmの礫を微量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む (江戸時代初期整地層か)
- 14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 砂質 φ1~5cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 15 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫を微量含む 炭片を多量含む 土器片を中量含む
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR5/4にぶい黄褐色シルトのφ1~5cmのブロックが微量混じる φ1~5cmの礫を微量含む 炭を少量含む 瓦片を少量含む
- 17 10YR5/6黄褐色砂泥と10YR4/3にぶい黄褐色砂泥が縞状に混じる φ1~3cmの礫を微量含む 土器片を微量含む
- 18 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫を少量含む 土器片を微量含む
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト φ1~3cmの礫を少量含む 炭少量含む
- 20 10YR4/4褐色粘質シルト φ1~5cmの礫を中量含む 瓦片を少量含む (桃山時代以前か)
- 21 10YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1~5cmの礫を少量含む (江戸時代前期整地層)
- 22 10YR2/3黒褐色粘質シルト~細砂 φ1~3cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を微量含む

図 22 桜の園土坑 100 北壁・東壁断面図 (1 : 50)



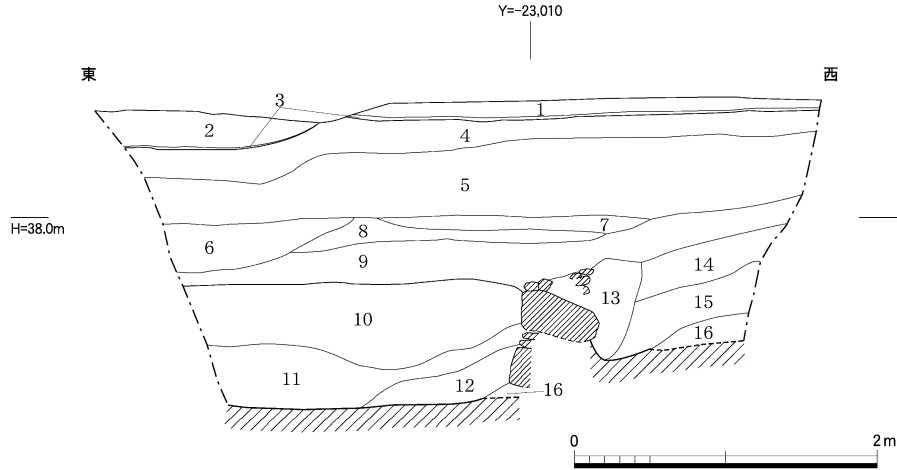
- 1 10YR4/4褐色砂泥10YR6/4ににぶい黄褐色極細砂のφ1～3cmのブロックが少量混じる φ3～8cmの礫を微量含む(江戸時代前期整地層)
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を中量含む 土器片を少量含む(江戸時代前期整地層か)
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥に10YR5/8黄褐色極細砂のφ1～3cmのブロックが中量混じる φ1～3cmの礫を少量含む(江戸時代前期盛土)
- 4 7.5YR4/4褐色砂泥 やや締まる φ1～10cmの礫を中量含む(江戸時代前期盛土)
- 5 10YR5/8黄褐色砂泥 極粗砂～φ10cmの礫を少量含む 10YR5/8黄褐色極細砂・10YR6/2灰黄褐色シルトのφ5～20cmのブロックが多量に混じる(江戸時代前期盛土 旧8区北拡張部2層に対応か)
- 6 7.5YR4/4褐色泥砂 φ1～8cmの礫を中量含む(江戸時代前期盛土)
- 7 10YR5/8黄褐色砂泥 やや締まる φ1～5cmの礫を中量含む(江戸時代前期盛土)
- 8 10YR5/6黄褐色シルト よく締まる φ3～8cmの礫を微量含む 10YR6/2灰黄褐色シルト・7.5YR3/2黒褐色極細砂のφ10～15cmのブロックを少量含む(江戸時代前期盛土)
- 9 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト φ1～8cmの礫を微量含む
- 10 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～10cmの礫を微量含む 炭を少量含む(土坑100東壁13層に対応か)
- 11 7.5YR3/4暗褐色砂泥 泥質・締まりが悪い φ1～8cmの礫中量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 12 10YR4/4褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 13 7.5YR3/3暗褐色砂泥 締まりが悪い φ1～5cmの礫を微量含む 炭を微量含む
- 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 粘質 φ1～5cmの礫を少量含む
- 15 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 φ3～5cmの礫を微量含む

図23 桜の園旧9区北拡張部南壁断面図(1:50)

状況を観察することができた。また、旧8区南拡張部・旧8区北拡張部では江戸時代初期の石垣を再検出した。ただし、いずれの箇所でも桃山時代以前の確実な土層は確認していない。

東側拡張部(図版11-1、図21) 石列211の下層は約10～20cmの厚さの江戸時代前期の整地層である暗褐色砂泥である。この下層は約50cmの厚さの江戸時代前期の盛土である礫を多量に含む黄褐色泥砂などである。この下層は約10cmの厚さの褐色粘質シルトが水平に拡がる。この層からは瓦器火鉢・施釉陶器鉢などの小破片が出土した。施釉陶器鉢は「織部」の特徴をもつので、江戸時代初期から前期に属することがわかる。ただし、この施釉陶器鉢は断面精査中に出土したので、次の13層に伴う可能性がある。褐色粘質シルトの下層は90cm以上の厚さで、にぶい黄褐色シルトブロックが混じるにぶい黄褐色砂泥・暗褐色シルトなどを積み上げる。13層は土坑状の堆積である。これらの層からは土師器皿・焼締陶器挿鉢・瓦などの小破片が出土した。土師器皿は室町時代、焼締陶器挿鉢は信楽産で室町時代後期から江戸時代前期、瓦は平安時代に属する。また、瓦には時期が特定できない薄い熨斗瓦がある。

土坑100北壁・東壁(図版11-2、図22) 土坑100東壁は東側拡張部北壁に連続する。約10～30cmの厚さの江戸時代前期の整地層である暗褐色砂泥の下層は、約30～50cmの厚さの江戸時代前期の盛土である黄褐色泥砂・黒褐色泥砂である。この下層は北壁の一部で土坑に攪乱されるが、約10cmの厚さの褐色粘質シルトが東側拡張部から連続して水平に拡がる。この下層は



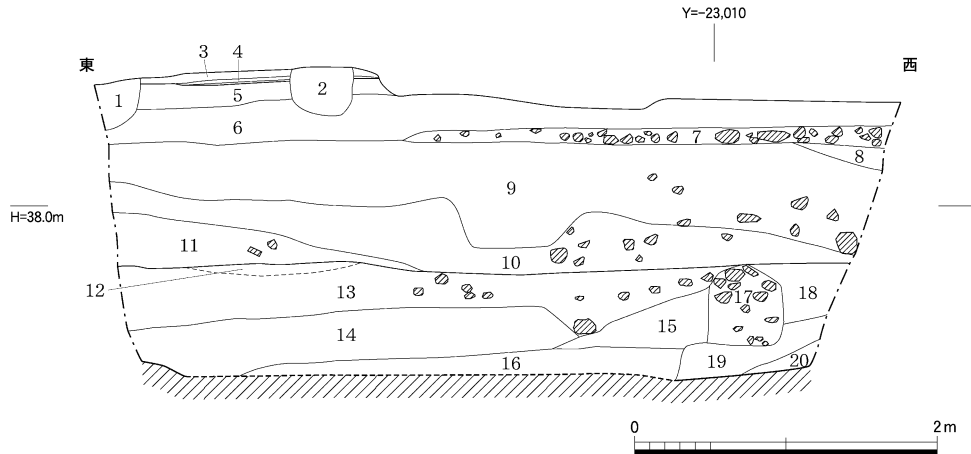
- 1 10YR4/6褐色砂泥 φ0.5～3cmの礫を微量含む 10YR6/8明黄褐色極細砂のφ1cm位のブロックを少量含む 炭を微量含む (江戸時代前期整地層 中央拡張部3層・北拡張部1層に対応)
- 2 10YR4/4褐色砂泥
- 3 10YR2/3黒褐色砂泥 φ10cmの礫を微量含む (中央拡張部4層に対応)
- 4 10YR6/8明黄褐色極細砂・10YR4/4褐色シルト・10YR4/2灰黄褐色シルトがブロックで混じる φ1～10cmの礫を微量含む 土器片・瓦片を微量含む (江戸時代前期盛土 中央拡張部5層に対応か)
- 5 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1～8cmの礫を中量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 6 10YR4/4褐色砂泥 締まりが悪い φ1～5cmの礫を中量含む 炭を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 7 10YR5/8黄褐色砂泥 粘質 φ1～10cmの礫を少量含む (江戸時代前期盛土)
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 φ1～5cmの礫を多量に含む 炭を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 9 10YR3/3暗褐色砂泥 締まりが悪い φ1～3cmの礫を中量含む 炭を微量含む 瓦片を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 10 7.5YR3/4暗褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む やや締まる 炭を微量含む 土器片・瓦片を少量含む (中央拡張部13層と対応か)
- 11 10YR2/3黒褐色砂泥 φ1～3cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 12 10YR4/2にぶい黄褐色粘質シルト φ1～5cmの礫を中量含む
- 13 7.5YR4/2灰褐色泥砂 締まりが悪い φ3～10cmの礫を多量含む (石垣裏込め)
- 14 10YR3/4暗褐色砂泥 強く締まる φ1～10cmの礫を少量含む 土器片を少量含む
- 15 7.5YR3/2黒褐色砂泥 φ1～5cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 16 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 強く締まる 粗砂～φ10cmの礫を多量に含む (地山か)

図24 桜の園旧8区南拡張部南壁断面図(1:50)

120 cm以上の厚さで、にぶい黄褐色砂泥暗褐色砂泥などを積み上げる。東壁では16層が22層・18層を切り込む形状で堆積する。

旧9区北拡張部(図版12-1、図23) 約10 cmの厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥の下層は、約110 cmの厚さで黄褐色極細砂・灰黄褐色シルトブロックを含む黄褐色砂泥・褐色泥砂などを積み上げる。これらは江戸時代前期の盛土と考えている。この下層は約10 cmの厚さの暗褐色砂泥が水平に広がる。土坑100壁面の13層に対応すると考えている。この下層は80 cm以上の厚さで暗褐色砂泥・褐色砂泥などを積み上げる。

旧8区南拡張部(図版12-2、図24) 約10 cmの厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥の下層は、石垣検出面まで約80～100 cmの厚さで褐色シルト・灰黄褐色シルトブロックを含む明黄褐色極細砂・暗褐色砂泥などを積み上げる。これらは江戸時代前期の盛土と考えている。整地層と盛土の間には薄く黒褐色砂泥が堆積することから、盛土のあと整地が行われるまでの間に盛土上面が露出していた期間があったことがわかる。石垣は大きさ約50～80 cmの石を2段に積み上げる。多量の礫を含む裏込めが上面を覆っていることからさらに1段以上石を積み上げていたことになる。裏込めの西側は70 cm以上の厚さで暗褐色砂泥・黒褐色砂泥を東に向けて傾斜する形状で積み上げる。にぶい黄褐色シルトは強く締まっており、地山の可能性がある。また、石垣の東側は80 cm以上の厚さで暗褐色砂泥などが堆積する。

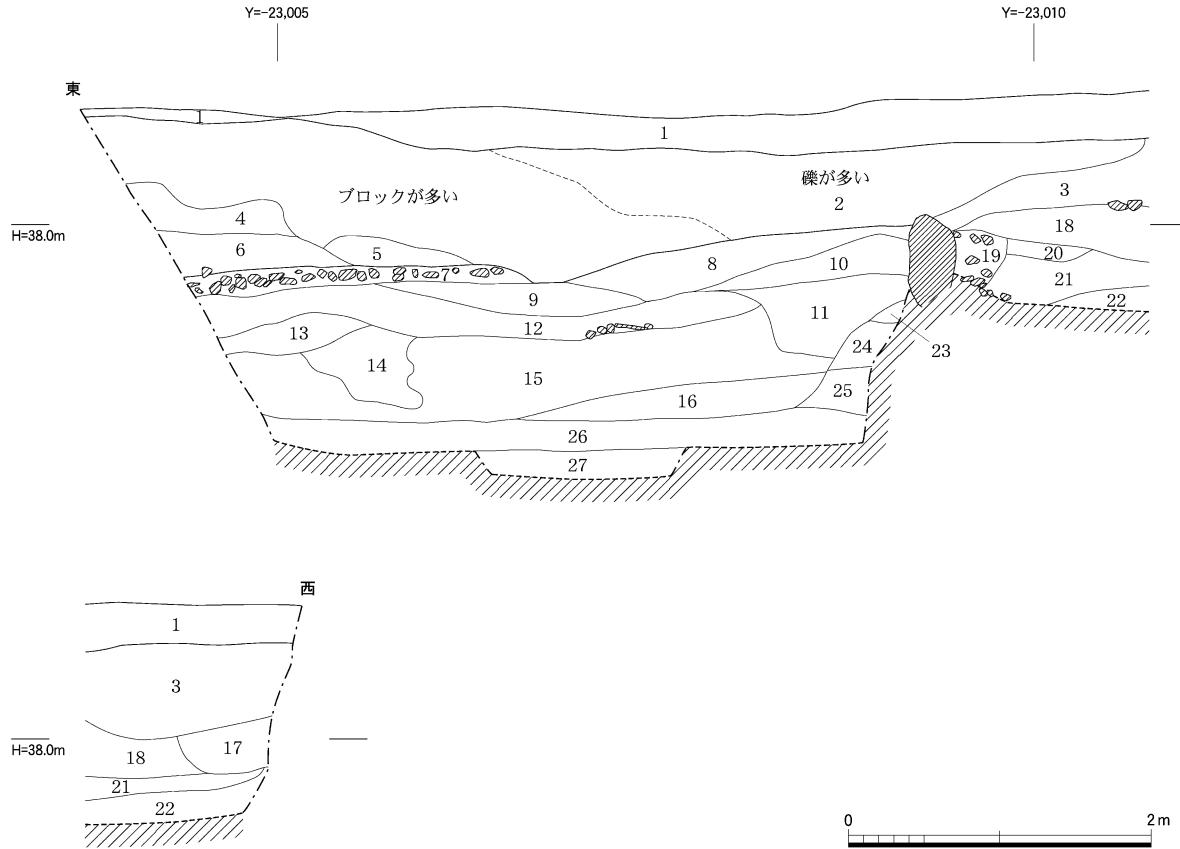


- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫少量含む 炭を微量含む (溝130)
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥 炭少量含む 瓦片を微量含む (柱穴196)
- 3 10YR4/6褐色砂泥 φ0.5～3cmの礫を微量含む 10YR6/8明黄褐色極細砂のφ1cm大のブロックを少量含む (江戸時代前期整地層 南拡張部1層・北拡張部1層に対応)
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 (南拡張部3層に対応)
- 5 10YR6/8明黄褐色極細砂と10YR4/4褐色シルトが斑に混じる φ1～3cmの礫を微量含む 土器片を微量含む (南拡張部4層に対応か)
- 6 10YR4/6褐色泥砂 やや締まる φ1～8cmの礫を中量含む
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ1～10cmの礫を多量含む (礫敷状)
- 8 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1～10cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土)
- 9 7.5YR4/6褐色砂泥 φ1～30cmの礫を多量・φ3～10cmの礫を微量含む 下部ほど礫が大きい 炭を少量含む (江戸時代前期盛土)
- 10 10YR5/8黄褐色極細砂・10YR6/4にぶい黄橙シルト・10YR4/2灰黄褐色シルトのφ0.5～20cmのブロックが混じる φ1～10cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土 北拡張部2層に対応か)
- 11 7.5YR4/4褐色泥砂 φ1～8cmの礫を中量含む 瓦片を微量含む (江戸時代前期盛土)
- 12 花崗岩片・ばいらん土
- 13 10YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む (南拡張部10層と対応か)
- 14 10YR4/4褐色粘質シルト 強く締まる φ1～10cmの礫を微量含む 炭を微量含む
- 15 7.5YR4/3褐色砂泥 やや締まる φ1～8cmの礫を中量含む
- 16 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粗砂～φ3cmの礫を中量含む
- 17 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ1～10cmの礫を多量含む (石垣裏込めか 南拡張部13層と対応か)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや締まる φ1～15cmの礫を中量含む 炭を微量含む
- 19 10YR3/3暗褐色砂泥 極細砂～φ3cmの礫を中量含む
- 20 10YR3/2黒褐色砂泥 やや締まる 炭を少量含む 土器片を少量含む

図 25 桜の園旧 8 区中央拡張部南壁断面図 (1 : 50)

旧 8 区中央拡張部 (図版 13 - 1、図 25) 約 5 cm の厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥の下面には南拡張部と同様に薄く黒褐色砂泥が堆積する。この下層は 40 cm の厚さで明黄褐色極細砂と褐色シルトの斑の層・褐色泥砂がほぼ水平に堆積する。また、西側には約 10 cm の厚さで、礫を多量に含むにぶい黄褐色泥砂が礫敷状に広がる。これらの下層は石垣裏込めの可能性がある 17 層まで約 80 cm の厚さで褐色泥砂・黄褐色極細砂とにぶい黄橙色シルト・灰褐色シルトの斑の層などを積み上げる。これらは江戸時代前期の盛土と考えている。17 層の西側・下層は暗褐色砂泥などを東に向けて傾斜する形状で積み上げる。また、17 層の東側は 70 cm 以上の厚さで暗褐色砂泥などが堆積する。上部には花崗岩が風化したばいらん土の層がある。

旧 8 区北拡張部 (図版 13 - 2、図 26) 約 20 ～ 30 cm の厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥の下層は、石垣検出面まで約 40 ～ 90 cm の厚さで黄褐色極細砂などのブロックを多量に含む黄褐色砂泥・褐色泥砂などを積み上げる。これらは江戸時代前期の盛土と考えている。また、東側には石垣検出面より約 30 cm 低い位置に約 15 cm の厚さで礫を多量に含む褐色砂泥が礫敷状に広がる。石垣は大きさ約 80 cm の石を 1 列並べる。南側では平坦な石を直立させている。裏込めの西側は 40 cm 以上の厚さで灰黄褐色砂泥などを東に向けて傾斜する形状で積み上げる。石垣の下部



- 1 10YR4/6褐色砂泥 φ0.5～5cmの礫を中量・10～15cmの礫を微量含む 炭を微量含む（江戸時代前期整地層 南拡張部1層・中央拡張部3層に対応）
- 2 10YR5/8黄褐色砂泥 極粗砂～φ10cmの礫を少量含む 10YR5/8黄褐色極細砂・10YR6/4にぶい黄橙色シルト・10YR4/2灰黄褐色シルトのφ5～20cmのブロックが多量に混じる（江戸時代前期盛土 中央拡張部10層に対応か）
- 3 7.5YR4/6褐色泥砂 φ1～8cmの礫を多量含む 炭を微量含む（江戸時代前期盛土）
- 4 10YR4/4褐色砂泥 締まりが悪い φ1～5cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む（江戸時代前期盛土）
- 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥に10YR5/6黄褐色極細砂のφ1cm位のブロックが少量混じる やや締まる 炭を微量含む 土器片を微量含む（江戸時代前期盛土）
- 6 7.5Y4/4褐色泥砂 φ1～10cmの礫を中量含む（江戸時代前期盛土 中央拡張部11層に対応か）
- 7 7.5YR4/3褐色砂泥 φ8～10cmの礫を多量含む（礫敷状 下部に鉄分沈着）
- 8 10YR4/4褐色砂泥 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を微量含む 土器片を微量・瓦片を少量含む
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 炭を微量含む 土器片・瓦片を微量含む
- 10 10YR3/4暗褐色砂泥 締まりが悪い φ3～10cmの礫を多量含む 瓦片を中量含む
- 11 7.5YR4/4褐色砂泥 礫をほとんど含まない 炭を少量含む
- 12 7.5YR4/3褐色砂泥 φ1～10cmの礫を微量含む 炭を微量含む
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1～5cmの礫を微量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 14 10YR2/3黒褐色砂泥 粘質 φ1～8cmの礫を微量含む 炭を少量含む
- 15 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 礫をほとんど含まない 10YR5/6黄褐色極細砂のφ1～3cmのブロックを多量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 16 7.5YR3/4暗褐色砂泥 φ1～3cmの礫を少量含む
- 17 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 φ1～10cmの礫を多量含む（礫に隙間が多い）
- 18 7.5YR4/3褐色砂泥に10YR5/8黄褐色シルトのφ1～3cmブロックが微量混じる φ3～5cmの礫を微量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む
- 19 10YR4/4褐色砂泥 締まりが悪い φ5～10cmの礫を多量含む（石垣裏込め）
- 20 10YR5/8黄褐色極細砂 φ5cmの礫を微量含む
- 21 7.5YR3/4暗褐色砂泥 やや締まる φ1～8cmの礫を微量含む
- 22 7.5YR4/3褐色砂泥 φ1～5cmの礫を中量含む
- 23 10YR4/4褐色砂泥
- 24 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を微量含む 土器片を微量含む
- 25 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR4/6褐色シルトのφ2～5cmのブロックが少量混じる 土器片を微量含む
- 26 10YR4/2灰黄褐色砂泥 粘質 極細砂～φ3cmの礫を中量含む
- 27 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 固く締まる φ1～10cmの礫を多量含む（地山か）

図 26 桜の園田 8 区北拡張部南壁断面図（1：50）

は土層が露出しており約 80 cmの厚さで褐色砂泥などをほぼ水平に積み上げているようである。また、石垣の東側は 110 cm以上の厚さで褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥などが堆積する。最下層のにぶい黄褐色砂礫は堅く締まっており、地山の可能性がある。

4. 緑の園の調査

(1) 概要

調査地では2000年から2002年にかけて試掘確認調査が実施されている。調査では弥生時代中期の竪穴住居と考えられる遺構、平安時代の庭園、室町時代後期の土坑・柱穴、江戸時代前期（寛永期）の整地層・礎石据付穴・雨落溝、江戸時代中期から後期の溝・井戸・石組遺構・瓦敷の土間・土坑・柱穴などを検出した。出土遺物には弥生土器、平安時代・江戸時代の土器・陶磁器類、平安時代・江戸時代の瓦などがある¹⁸⁾。

調査区は緑の園西部（1区）と北大手門からの城内通路東端（2区）の2箇所を設定した。1区は南北約24m・東西約8mの方形、2区は南北約7m・東西約3mの方形で、全体の調査面積は約210㎡である（図27・28）。

調査は1区・2区とも1面のみで、江戸時代後期から近代の遺構を検出した。検出した遺構数は25基である。

(2) 基本層序（図29・30）

1区では約5～15cmの厚さの芝生造成土・盛土の下層は、江戸時代後期の整地層である灰黄褐色シルト～粗砂である。東部ではこの上面に暗灰黄色シルト～細砂がうすく貼られる。

2区では約10～15cmの厚さの路面砂利・盛土の下層は、約5cmの厚さの江戸時代末期の整地層である黒褐色シルト～極細砂である。これより下層は既設管掘形断面での観察に基づくもので、約15～20cmの厚さの黒褐色シルト～細砂の下層は、江戸時代後期の整地層である約10～15cmの厚さの焼土を含む黒褐色シルト～細砂である。この下層は江戸時代前期の整地層である黒褐色シルト～細砂で、上面は堅く締る。

調査では、1区・2区とも重機で盛土までを除去し、盛土下面を第1面として遺構検出を行った。

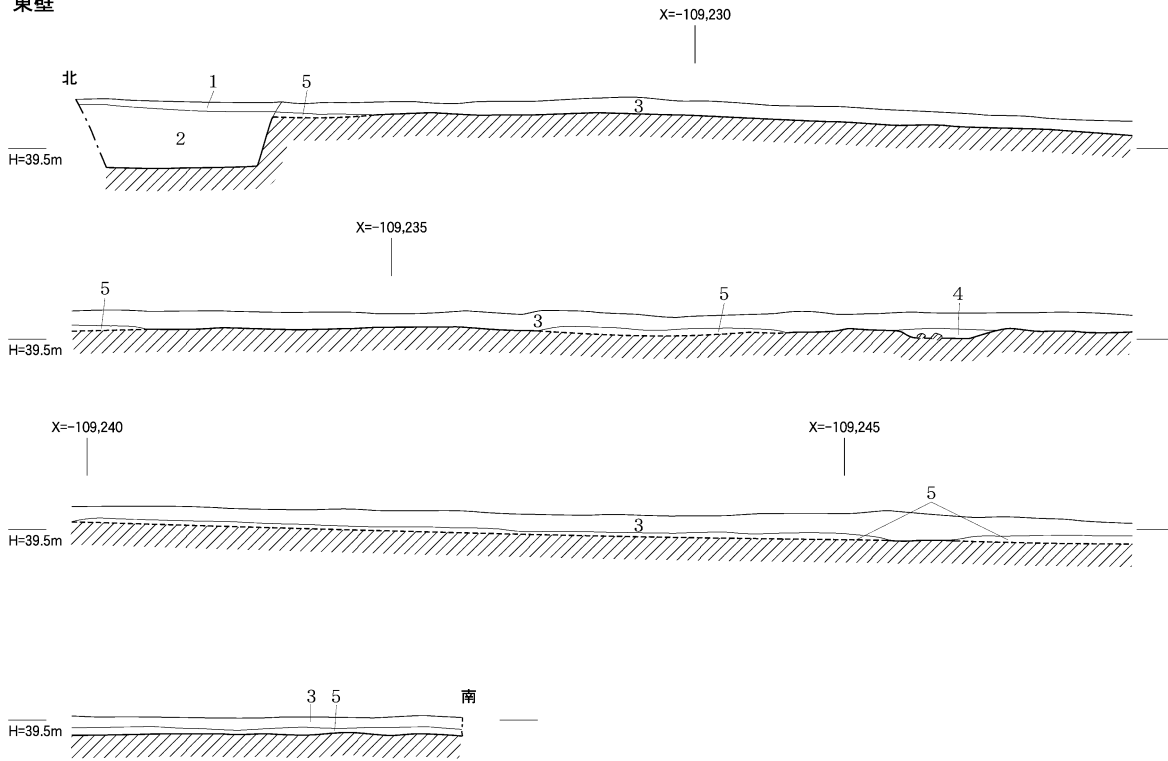


図27 緑の園1区調査前状況

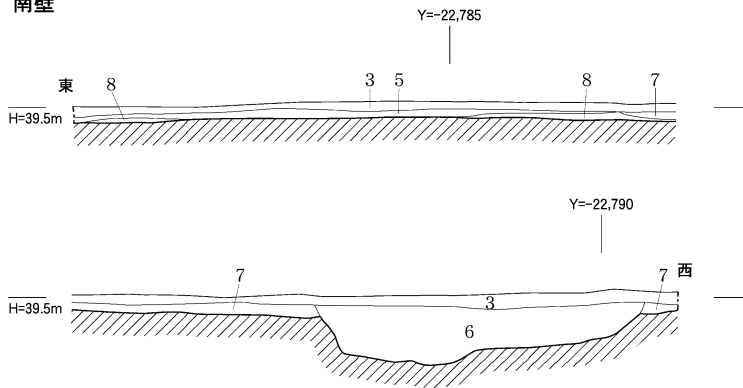


図28 緑の園2区調査前状況

東壁



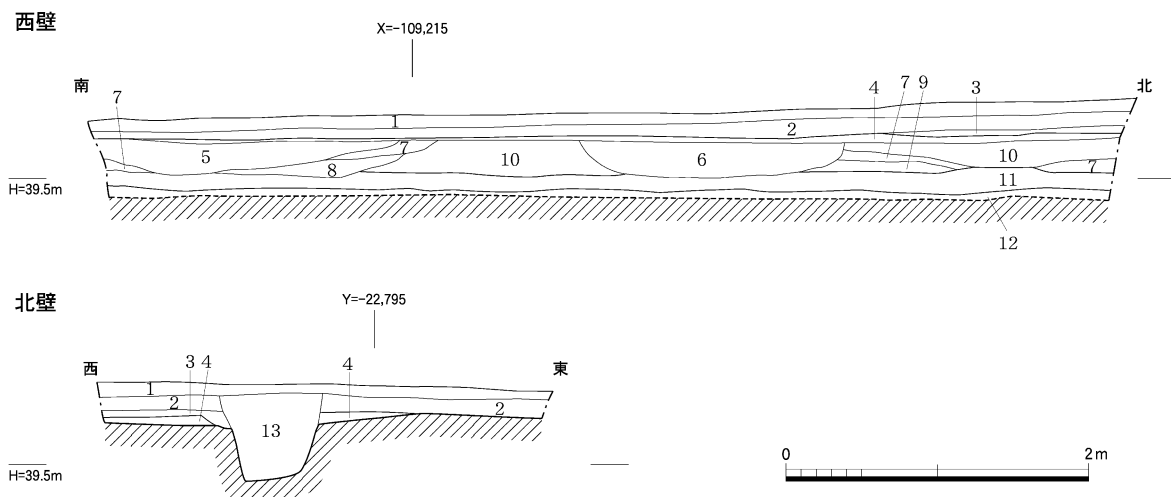
南壁



- 1 10YR5/2 灰黄褐色小礫混シルト～粗砂 (現代盛土)
- 2 旧 8 区埋土
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色小礫混シルト～粗砂 (現代盛土 最上層は腐植土)
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト～粗砂 炭を少量含む (溝17)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～細砂に2.5Y8/3 淡黄色粘土ブロックを多量含む (土間)
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト～粗砂 φ 5～20cmの礫を多量含む 炭を多量含む (根の攪乱)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト～粗砂 小礫を含む 瓦片を含む (近代盛土か)
- 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト～粗砂 φ 1～10cmの礫を含む (江戸時代後期整地層)



図 29 緑の園 1 区断面図 (1 : 50)



- 1 表土 (碎石)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色中砂～粗砂 間に2.5Y3/1黒褐色粘質シルト (厚さ1～2cm) を挟む (現代盛土)
- 3 2.5Y6/4にぶい黄色中砂～粗砂
- 4 10YR2/2黒褐色シルト～極細砂 堅く締まる φ 3～15cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む (江戸時代末期整地層)
- 5 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 φ 1～10cmの礫を多量含む
- 6 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ 5～15cmの礫を多量含む 焼土を含む 瓦を多量含む
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色中～粗砂 砂質
- 8 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ 1～10cmの礫を多量含む
- 9 2.5Y4/4オリーブ褐色中砂～極粗砂 φ 2～7cmの礫を少量含む
- 10 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ 1～2cmの礫を多量含む 10YR4/4褐色粘質シルトのブロックを少量含む
- 11 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ 1～5cmの礫を少量含む 焼土を含む (江戸時代後期か)
- 12 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 堅く締まる φ 1～3cmの礫を少量含む 炭を含む (江戸時代前期整地層)
- 13 攪乱

図 30 緑の園 2 区断面図 (1 : 50)

(3) 1 区の遺構 (図版 14、図 31)

溝・土坑・土間・柱穴などを検出した。北壁際の方形の攪乱は 2000 年から 2001 年にかけての調査の旧 3 区である。

溝 17 (図版 14 - 2) 中央部で検出した。東側・西側とも調査区外に延びる。調査区内で大きく蛇行しており、大きさ数 cm から 10 cm の礫を敷き詰める。断面形は皿形で、検出長は西半部約 7.5 m・東半部約 3.5 m、幅は約 1.0～1.9 m、深さは東壁際で約 0.1 m である。埋土は黒褐色砂泥で、礫の隙間からガラス瓶などが出土していることから、近代の遺構と考えている。

土間 東部で検出した。不整形な平面形で、江戸時代後期の整地層上面に暗灰黄色シルト～細砂をうすく貼り、堅く叩き締める。土間の三和土と考えている。

柱穴 24 南東部で検出した。直径約 0.3 m で、中央に大きさ約 15 cm の石を平坦な面を上にして据える。出土遺物はない。土間と一連の建物礎石である。

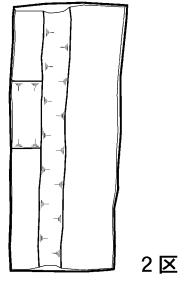
(4) 2 区の遺構 (図版 14、図 31)

2 区では水道管・電線埋設に伴う攪乱を認めたのみである。既設管掘形断面で確認した焼土を含む黒褐色シルト～細砂は、天明の大火後の整地層と考えている。



Y=-22,790

Y=-22,780



X=-109,220

X=-109,230

X=-109,240

X=-109,250

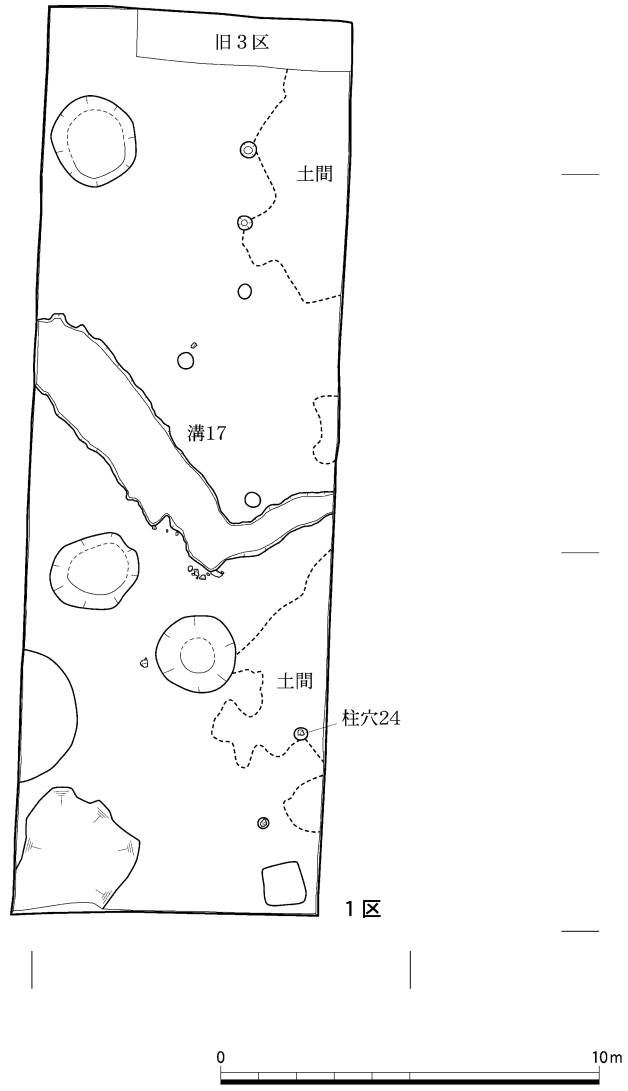


図 31 緑の園 1区・2区平面図 (1 : 200)

5. 桜の園の遺物

(1) 遺物の概要

調査では桜の園から整理用コンテナに129箱、緑の園から2箱、合わせて131箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。出土遺物の大部分は瓦類が占め、その他の種類は少ない。

桜の園では東側拡張部以外は、掘削を江戸時代前期の遺構面でとどめているため、桃山時代以前の遺物は江戸時代以降の遺構・攪乱および包含層からの出土である。そのため時代別の出土量では、江戸時代前期から後期の遺物が大部分を占め、桃山時代以前の遺物は少ない。

(2) 土器類 (図 32～34)

土器類には弥生土器・土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器²⁰⁾・緑釉陶器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器がある。江戸時代のもものが大部分を占める。

平安京造営前 弥生土器壺・甕、須恵器壺が数点のみ出土した。すべて小破片のため図示していない。弥生土器甕は弥生時代後期に属する。

平安時代 (図 34 - 67～70) 微量ずつではあるが、前期から後期の遺物が平均して出土している。土師器皿・杯 (67)・甕、白色土器椀・高杯、黒色土器椀・盤、須恵器杯身・鉢・壺・甕、灰釉陶器椀・皿 (68)・壺、灰釉系陶器椀・壺、緑釉陶器椀 (69・70)、中国製白磁椀などがある。

67は高台の付く杯の底部である。貼り付け高台で、調整は底部外面は貼り付けのヨコナデ、内面はナデ・ヨコナデである。色調は橙色を呈する。遺構検出中に出土した。平安時代前期に属する。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器・須恵器			少量	0箱
奈良時代 ～平安時代	土師器・白色土器・黒色土器 ・須恵器・灰釉陶器・灰釉系 陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器、 瓦		土師器1点、灰釉陶器1点、 緑釉陶器2点、瓦2点	少量	0箱
鎌倉時代 ～桃山時代	土師器・瓦器・焼締陶器・灰 釉系陶器・輸入陶磁器、瓦		瓦11点	3箱	0箱
江戸時代	土師器・瓦器・焼締陶器・施 釉陶器・磁器・輸入陶磁器、 瓦、土製品、石製品、金属製 品、木製品		土師器25点、瓦器1点、焼締 陶器3点、施釉陶器27点、磁 器17点、輸入陶器1点、瓦43 点、土製品3点、石製品4点、 金属製品32点	128箱	0箱
合計		145箱	173点 (14箱)	131箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より14箱多くなっている。

68 は内弯気味の貼り付け高台で、口縁部は屈曲して開き、端部はつまんで輪花を作る。輪花は 3 弁の可能性が高い。調整は底部外面はケズリののち貼り付けのヨコナデ、底部内面・口縁部内外面はヨコナデである。口縁端部内外面の施釉は厚く、溶着痕があるのに対して、体部・底部内面の施釉は薄い。また、底部外面には墨書および朱書が残るが、判読できない。猿投産である。土坑 100 から出土した。平安時代中期に属する。

69・70 はともに底部の破片である。69 は削り出し蛇の目高台で、調整は外面はケズリ、内面はミガキで、内外面に施釉する。色調は淡緑色を呈する。洛北産である。土坑 100 から出土した。平安時代前期に属する。70 は削り出しの輪高台で、調整は底部外面はケズリ、内面は不明で、内外面に施釉する。色調は灰緑色を呈する。洛西産である。遺構検出中に出土した。平安時代中期に属する。これらの他に猿投産の緑釉陶器碗を認めている。

鎌倉時代から桃山時代 出土量は少ないが、細かくみると鎌倉時代から室町時代前半の遺物の割合が高く、室町時代後半から桃山時代の遺物はほとんどない。土師器皿、瓦器碗・鍋・釜・火鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器碗、中国製白磁碗・鉢、青磁碗・皿・鉢、染付碗などがある。

江戸時代 (図 32 ～ 34 - 1 ～ 66・71 ～ 81) 江戸時代初期から前期の土器には、土師器皿・丸碗・焙烙・鍋・釜・火鉢・壺・蓋、瓦器火鉢・灯火具・十能、焼締陶器鉢・播鉢・壺・水指・甕、施釉陶器碗・皿・灯明皿・鉢・茶入・壺・甕、磁器染付碗・皿・鉢・蓋・合子・壺、白磁碗・皿・鉢・蓋・壺、青磁皿・鉢・盤・香炉・壺、色絵碗・鉢、朝鮮半島製陶器碗、中国製染付碗などがある。

また、江戸時代中期から後期の土器には、土師器皿・焙烙・火鉢・壺・蓋・ゴマ煎り、瓦器火鉢・灯火具、焼締陶器壺・甕、施釉陶器碗・皿・灯明皿・灯明台・鉢・播鉢・鍋・土瓶・蓋・火入れ・水滴・壺・水指・甕、磁器染付碗・台付碗・皿・鉢・蓋・合子・壺、白磁碗・皿・壺、青磁鉢・壺、青磁染付碗・皿・鉢、色絵碗・鉢などがある。

以下では、代表して土坑 100・土坑 50 からまとめて出土した土器・陶磁器類とその他の遺構から出土した土器・陶磁器類の一部を紹介する。

土坑 100 からは土師器皿 (1～6)・焙烙 (7)・鍋 (8)・釜 (9)、瓦器火鉢 (10)、焼締陶器播鉢 (11)、施釉陶器碗 (12～15)・鉢 (17～22)、白磁碗 (23～27)・青磁香炉 (28)、染付碗 (29・30)・皿 (31)・鉢 (32)、朝鮮半島製陶器碗 (16)、土製品の焼塩壺 (33) などが出土した。

1～4 は平底で底部内面には明瞭な圏線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。3 の口縁端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。5 は丸底気味で、底部内面の圏線はない。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。胎土は白色を呈する。6 は大型のもので、器壁も厚い。内面口縁部寄りにあまい圏線がめぐる。調整は底部外面は丁寧なナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。

7 は半球形の深い体部から口縁部が屈曲して開き、端部は下方につまみ出す。調整は底部・体部外面はナデ、内面・口縁部内外面はヨコナデである。体部上半部・口縁部外面にうすく煤が付

土坑100

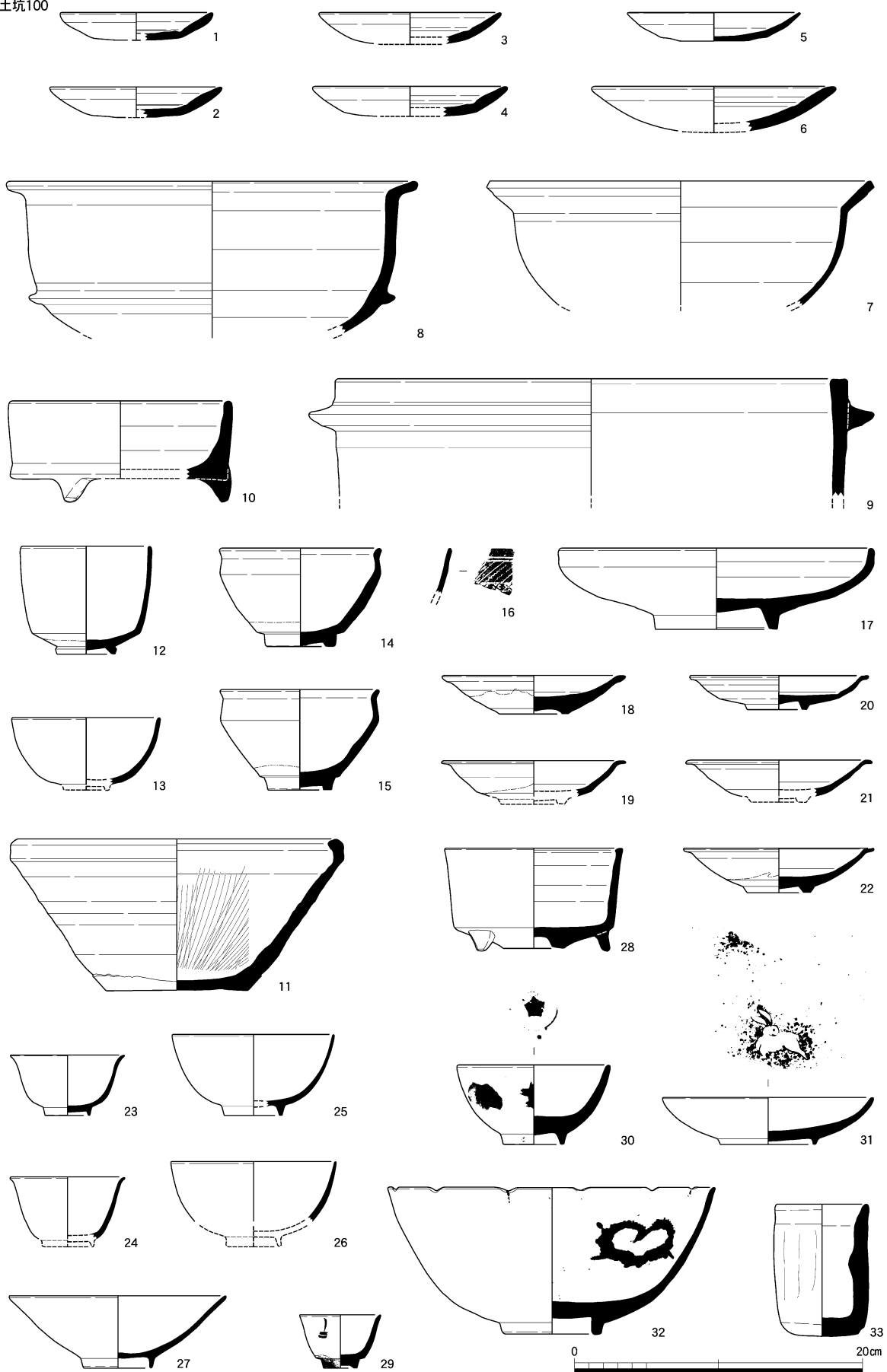


图 32 土器類実測图 1 (1 : 4)

着し、また、底部内面にうすくコゲが付着する。

8は半球形の深い体部から口縁部が屈曲して開く。底部近くの外面に突帯が一条めぐる。調整は底部・体部・口縁部内外面ともヨコナデである。

9は体部は直立し、口縁端部は平坦に仕上げる。口縁部外面に突帯が一条めぐる。調整は体部外面はナデ、内面・口縁部内外面はヨコナデである。

10は平底で口縁部は内弯気味に直立して端部は丸くおさめる。底部外面には太く短い脚部を付ける。調整は底部・口縁部内外面ともヨコナデで、脚部の接合はナデである。

11は平底で体部が直線的に開き、口縁端部は内弯して折れ曲がり、端部は少し肥厚して丸くおさめる。調整は底部外面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデで、内面に7条1組の粗い播目を施す。

12は削り出し高台で、口縁部は底部から屈曲して内弯気味に直立し、端部は丸くおさめる。13は削り出し高台で、口縁部は内弯して開く丸椀である。ともに白色のきめの細かい胎土で、うすく透明釉をかけるので、色調は淡黄色を呈する。いわゆる京焼系の製品である。14・15は削り出し高台で、体部は内弯気味に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。内外面に茶色の鉄釉を施す。美濃産である。

16は小破片であるが、丸椀口縁部の破片である。外面に直線・波線・花文を刻み、白土を象嵌する。色調は内外面とも暗灰色を呈する。朝鮮半島産と考えている。

17は浅い大型の鉢である。高い削り出し高台で、体部は皿状に開き、口縁部は内弯して直立する。調整は底部・体部外面はケズリ、それ以外は回転ナデである。内外面に灰釉を施す。唐津産である。

18は器壁が厚く、削り出し高台で、体部は浅く開き、口縁部は短くつまみ出す。19～22は器壁が薄く、削り出し高台で、体部は浅く開き、口縁部は鋭く外反する。いずれも内外面に灰釉を施す。唐津産である。

23・24は口縁部が外反、25・26は口縁部が内弯、27はやや大型で、口縁部が直線的に開く。いずれも器壁が非常に薄く、調整が丁寧で、色調は澄んだ白色を呈する。

28は円筒形で、体部外面の3方に短い脚部を付ける。高台接地面以外に厚く施釉し、色調は明緑灰色を呈する。

29は小型で、口縁端部はわずかに外反する。口縁部外面の4方に縦方向に4条1組のケズリを施し、平坦な箇所に簡素な幾何学模様を描く。底部外面は施釉が及ばない部分がある。

30は器壁が厚く、口縁部は内弯して開く。外面には直線・井桁状の施文および桐文の印判、内面に同心円および5弁の花文の印判を施文する。

31は器壁はやや厚く、口縁部は内弯して開く。内面に吹きつけで兔を描く。欠損部分には月が描かれていたと推測できる。

32は大型で、口縁端部に切り込みを入れ、13弁の花弁を作る。内外面に切り込みに合わせて縦線を引き、花弁を強調する。内面は3方に葉状の模様を描くが、意匠は不明である。発色はやや悪く、内面には焼成中に付着した灰が残る。

土坑50

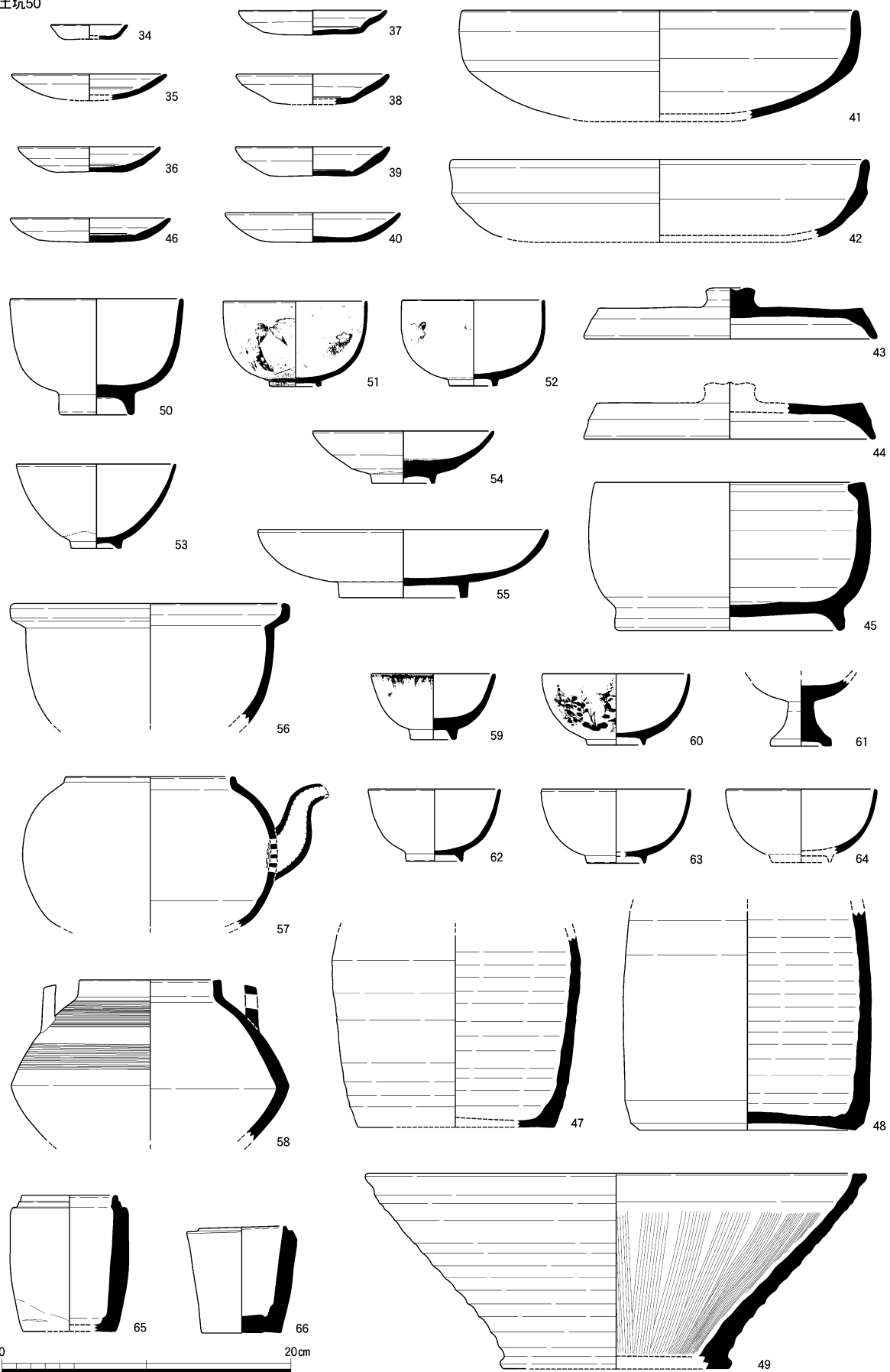


图 33 土器類実測图 2 (1 : 4)

土坑 100 は大型の遺構であったことから、第 1 層から第 6 層に分けて出土遺物を採集したが、顕著な時期差を看取できなかつた。30 のように新しい特徴をもつものがあることから、遺構の埋没時期は江戸時代中期にまで下がるが、出土遺物の大部分は江戸時代前期に属すると考えている。

土坑 50 からは土師器皿 (34～40)・焙烙 (41・42)・蓋 (43・44)・火鉢 (45)、施釉陶器碗 (50～53)・皿 (46)・鉢 (54・55)・播鉢 (49)・鍋 (56)・土瓶 (57・58)・壺 (47・48)、染付碗 (59・60)・台付碗 (61)、白磁碗 (62～64) などが出土した。

34 は小型の皿で、全体的に歪む。調整はオサエ・ナデである。35 は丸底で底部内面には明瞭な圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。36 は平底で底部内面には明瞭な圈線がめぐる。調整は底部外面には糸切り痕が残り、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。37～39 は平底で底部内面には明瞭な圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。40 は底部内面の圈線はない。調整は底部内外面は丁寧なナデ、口縁部内外面はヨコナデである。35～40 の口縁端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。

41 は扁平な半球形、42 は平底の底部から、口縁部が内弯して立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は底部外面はナデ、内面・口縁部内外面はヨコナデで、体部外面に幅の狭いケズリがめぐる。41 の底部内面は使用痕により摩耗する。

43・44 は壺の蓋である。平坦な天井部から端部が斜め下方に垂下し、外面中央には低いつまみが付く。調整は天井部外面はナデ、内面・端部内外面はヨコナデで、つまみもヨコナデである。

45 は貼り付け高台で、体部は内弯気味に直立し、口縁端部は内側に屈曲して平坦な面をつくる。調整は底部外面はナデ、体部・口縁部外面は丁寧なナデ、内面はヨコナデで、高台はヨコナデである。

46 は土師器皿と同じく、平底で底部内面には明瞭な圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで、うすく釉薬を施す。

47 は平底で、体部は屈曲して内弯気味に立ち上がる。調整は底部外面はナデ、内面・体部内外面は回転ナデで、内外面に焦げ茶色の鉄釉を施す。48 は平底で、体部は屈曲して内弯気味に立ち上がる。調整は内面・体部内外面は回転ナデで、体部外面にうすく鉄釉を施す。体部は外面からのオサエにより、横断面がわずかに三角形に歪む。水指として使用されたものか。備前産である。

49 は体部が直線的に開き、口縁端部は外上方に小さくつまみ出す。調整は内外面とも回転ナデで、内面に 9 条 1 組の細かい播目を施す。また、内外面に鉄釉を施す。内面下半は使用痕により摩耗する。信楽産である。

50 はやや大型で、体部は底部から内弯して開き、口縁部は直立する。内外面に灰釉を施す。51・52 は径の小さい削り出し高台で、器壁が薄く、口縁部は内弯する。黄白色のきめの細かい胎土で、底部外面以外の全面に透明釉を施し、上絵付けで 52 は外面のみに青色で散らし梅、51 は内面に青色で散らし梅、外面に青色・緑色で竹を描く。50～52 はいわゆる京焼系の製品である。53 は径の小さい削り出し高台で、器壁が薄く、体部は底部から内弯気味に外上方に開く。施釉は極めて薄い。

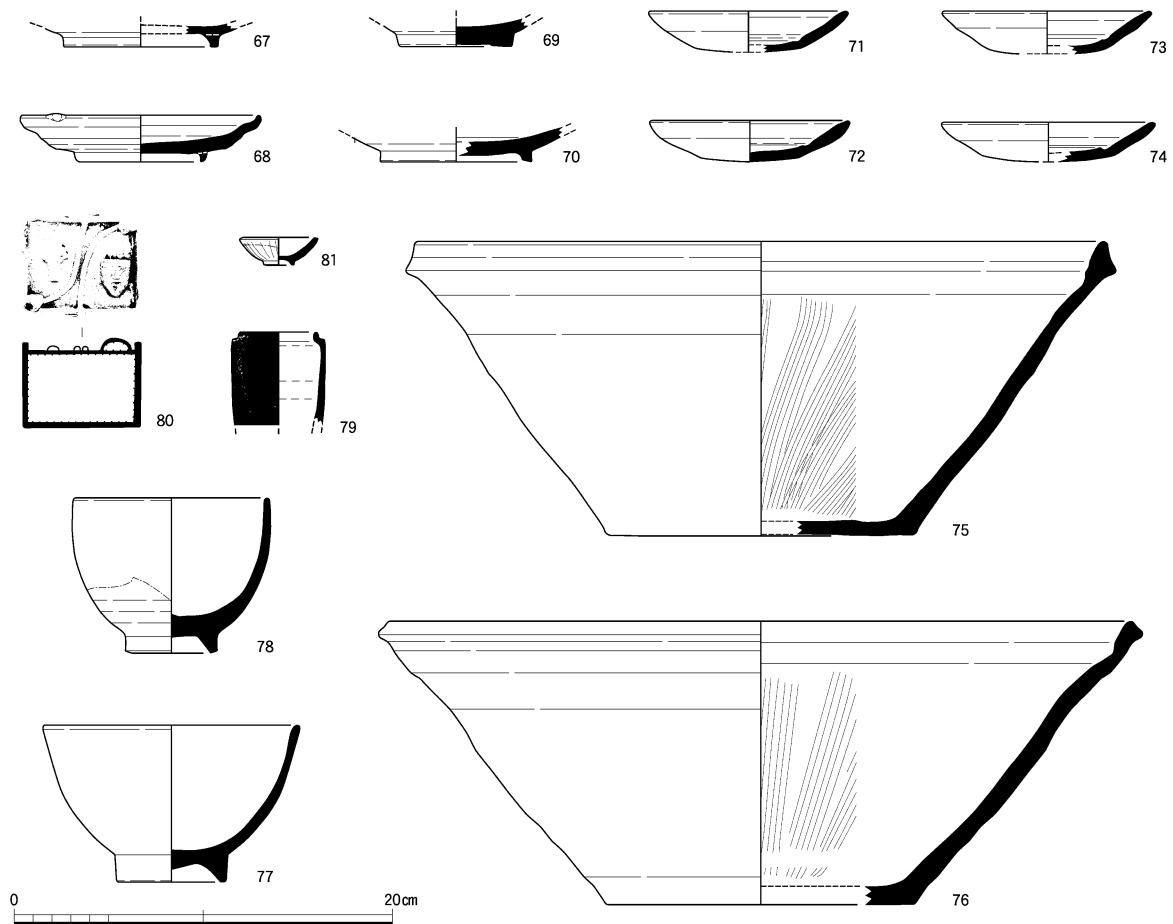


図 34 土器類実測図 3 (1 : 4)

54 は体部は浅く開き、口縁部は内弯気味で外上方に開く。内外面に厚く青緑色の銅釉を施す。
 55 は浅い大型の鉢である。高い削り出し高台で、体部は皿状に開き、口縁部は内弯して外上方に開く。白色のきめの細かい胎土で、呉須で山水の柄を描いたのち、うすく透明釉をかける。いわゆる京焼系の製品である。

56 は球形の体部から口縁部が屈曲して開き、受口をつくる。内外面に茶色の鉄釉を施す。

57 はやや扁平な球形で、端部が短く直立する。注口は屈曲する円筒形で、漉し孔は 14 孔を六角形に配置する。内外面に茶色の鉄釉を施す。58 は体部が屈曲して角をもち、端部は直立する。注口は欠損しており不明である。把手を付ける突起には円孔をつくる。体部外面上部には細かい沈線がめぐる。内外面に焦げ茶色の鉄釉を施す。

59 は小型で、器壁が厚く、口縁部は内弯して開く。胎土は灰色で、口縁端部外面に筆先で不揃いな三角形を描くが発色は悪い。60 は器壁が極めて薄く、口縁部は内弯して開く。澄んだ白色で、外面に菊・萩・女郎花などの秋草を繊細に描く。

61 は椀部を欠損する。脚部は裾拡がり、中実である。脚部外面は施釉が及ばない部分がある。

62 ~ 64 は口縁部は内弯して開く。いずれも器壁が非常に薄く、調整が丁寧で、色調は澄んだ白色を呈する。64 は浮き彫り状に菊・葉の模様を描く。型成形によると考えている。

土坑 50 遺物の中には 62 ~ 64 のように江戸時代前期の特徴をもつものが含まれているが、大

部分は江戸時代中期に属すると考えている。

71～74は土師器皿である。平底で底部内面には明瞭な圏線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。71・72は土坑103、73・74は第2層から出土した。いずれも江戸時代前期に属する。

75・76は焼締陶器播鉢である。平底で体部は直線的に開き、口縁端部は肥厚してつまみ出す。調整は内外面とも回転ナデで、75は7条1組、76は6条1組の播目を施す。75の播目は乱れる。また、76の内面下半は使用痕により摩耗する。丹波産である。ともに第2層から出土した。江戸時代前期に属する。

77・78は施釉陶器碗である。口縁部は内弯して開く。77は白色のきめの細かい胎土で、うすく透明釉を施す。いわゆる京焼系の製品である。第2層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。78は褐色の胎土で、内外面に灰釉を施す。唐津産と考えている。第1層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

79は茶入れである。器壁は薄く、体部はほぼ円筒形で、口縁部は屈曲して段をつくる。内外面に焦げ茶色の鉄釉を施し、外面に1条の釉垂れがある。美濃産と考えている。土坑103から出土した。江戸時代前期に属する。

80は施釉陶器水滴である。薄い陶板を方形に組み合わせて箱状に成形する。上面の縁は少し高くなる。上面に翁面・神楽鈴・ほどいた状態の紐、両長側面には紐と紐金具を立体的に表現する。水口は翁面裏側、注口は紐の一端に加工する。調整は底部外面は丁寧なケズリである。底面と上面の翁面部以外は透明釉を施す。北壁から出土した。

81は白磁碗である。きわめて小型で、外面には放射状に沈線を施す。外面は施釉が及ばない部分がある。土坑20から出土した。江戸時代中期から後期に属する。

(3) 瓦類

瓦類には軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦・平瓦・丸瓦・棧瓦・鬼瓦・菊丸瓦・輪違瓦・熨斗瓦・面戸瓦・その他の道具瓦・塙などがある。ほとんどを江戸時代のものが占める。

平安京造営前の瓦には奈良時代の軒丸瓦が1点ある。

平安時代の瓦には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦のほか1点のみであるが緑釉を施した熨斗瓦がある。緑釉瓦は土坑100から出土した。

江戸時代初期から前期の瓦には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鳥衾瓦・鬼瓦・菊丸瓦・輪違瓦・熨斗瓦・雁振瓦・面戸瓦やその他の道具瓦が多数出土している。江戸時代中期から後期にはそれらに軒棧瓦・棧瓦が加わるが出土量は少ない。江戸時代の瓦は焼成段階で燻すため、表面は黒灰色を呈する。なお、鎌倉時代から桃山時代の瓦は、形態や調整技法から江戸時代の瓦と明瞭に区別できないため、混在している可能性がある。ただし、表面の一部に金箔を貼り付けた、いわゆる金箔瓦は類例からみて桃山時代に属する可能性が高い。また、江戸時代の瓦は、新しい時期の遺構・包含層により古い時期のものが混入しており、形態や調整技法からも厳密に区別すること

はできなかつた。

軒平瓦（図 35 - 82 ~ 87）軒平瓦の瓦当文様は 82 を除き、すべて唐草文である。

82 は剣巴文である。瓦当部分の成形は半折り曲げ技法の可能性が高い²¹⁾。調整は瓦当裏面・外周とも横方向のナデで、凸面は横方向のナデである。瓦当裏面のナデは強い。第 1 層から出土した。平安時代後期に属する。

83 は簡略化した唐草文で、中心に三つ葉を飾る。両側の唐草の巻き込みは強い。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当裏面・外周とも横方向のナデで、凸面は横方向のナデ、凹面はナデである。瓦当裏面のナデは強い。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

84 は簡略化した唐草文で、中心に分厚い三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面は横方向のケズリ、裏面・外周は横方向のナデで、凸面は横方向のナデ、凹面は丁寧なナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

85 は中心飾りが上下 2 段の花文状となる唐草文で、唐草の巻き込みは強い。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面は横方向のケズリかナデ、裏面・外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は丁寧なナデで平滑に仕上げる。焼成後に一端を斜め方向に折り割っていることから隅切瓦と推定できる。第 2 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

86 は文様の詳細は不明で、唐草の巻き込みは強い。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当裏面・外周は横方向のナデで、凹面はナデである。唐草凸部と周囲の凹部の一部には金箔が残る。土坑 100 第 6 層から出土した。桃山時代に属するものか。

87 はやや大型の軒平瓦である。文様の詳細は不明であるが、中心に三つ葉を飾るようである。接合技法は不明で、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデで、凸面はオサエナデ、凹面は縦方向のナデ・ナデである。唐草凸部と周囲の凹部および周縁それぞれの一部には金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

軒丸瓦（図版 15、図 35 88 ~ 91）軒丸瓦の瓦当文様は 88 を除き、すべて巴文である。

88 は三重の圏線がめぐる重圏文軒丸瓦である。重厚な作りで、周縁は幅の狭い突帯状である。調整は瓦当裏面はナデ、外周は横方向のナデである。やや軟質で、圏線は摩耗する。柱穴 159 から出土した。形態・文様の特徵から奈良時代に属するものである。なお、二条城造営以前の軒丸瓦には、図示していないが、この他に平安時代後期の巴文軒丸瓦がある。

89 は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を密に配する。珠文の間に範傷が 1 箇所ある。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。文様凸部と周囲の凹部および周縁それぞれの一部には金箔が残る。南壁から出土した。桃山時代に属するものか。

90 は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。珠文の内側に範傷が 1 箇所ある。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

91 は大型の軒丸瓦である。右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。珠文の外縁部側に範傷が 1 箇所ある。調整は瓦当裏面は丁寧なナデ・円周方向の強いナデ、外周は横方向のナデで、凸

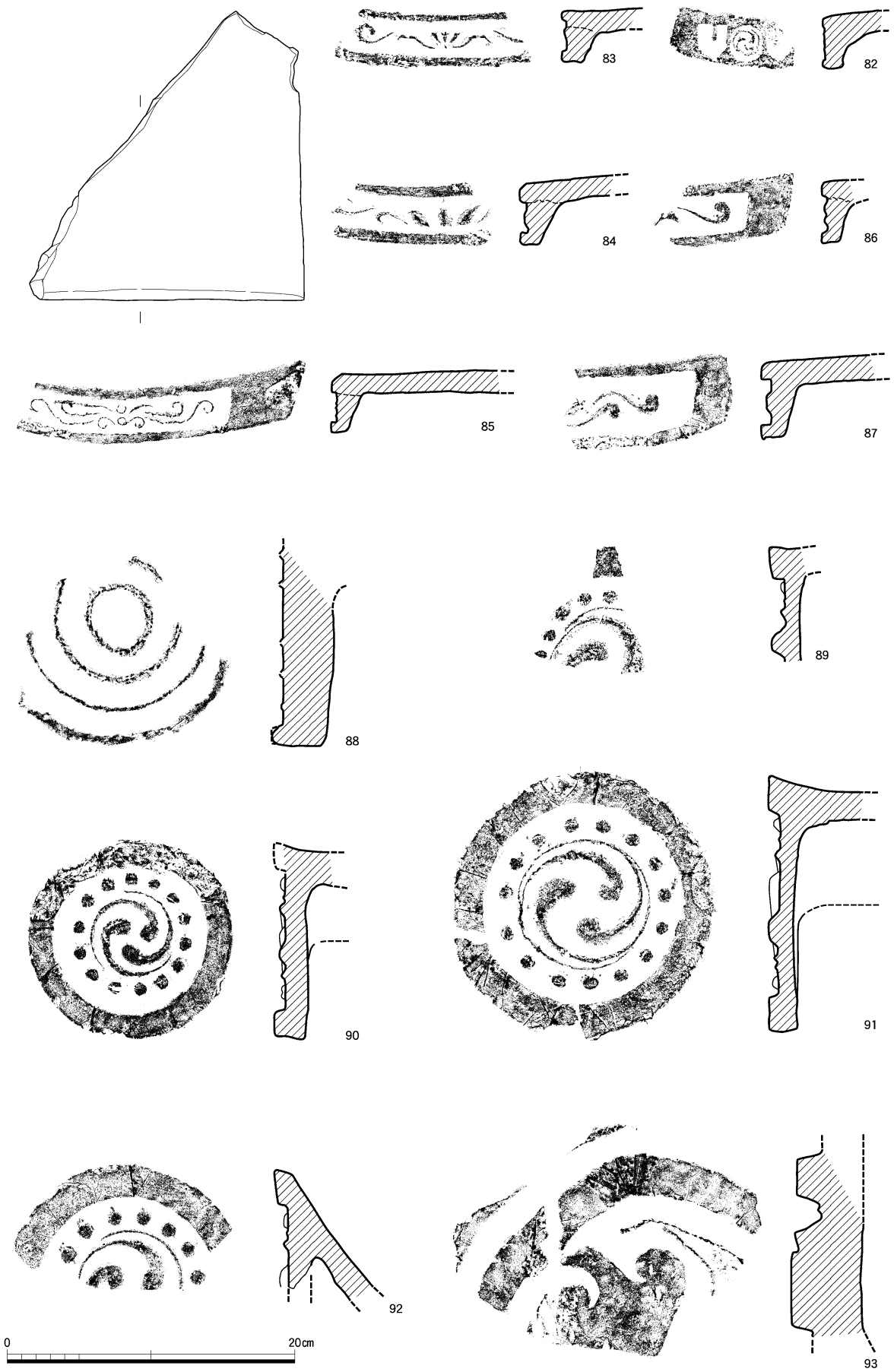


图 35 軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦拓影・実測図（1：4）

面は縦方向のヘラナデ、凹面は鉄線による切り離し²²⁾痕と布目が残る。溝 175 から出土した。江戸時代前期に属する。

烏衾瓦（図 35 92） 1 点のみ確認した。瓦当と体部を鋭角に接合する。右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。多くの珠文の外縁部側に範傷がある。調整は瓦当外周は横方向のナデで、体部凸面は縦方向の丁寧なナデ、内面はオサエ・ナデである。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鬼瓦（図版 15、図 35 93） すべて破片で全容がわかるものはない。

93 は大型の鬼瓦の破片で、葵葉を表現する。三葉葵文であったと考えられ、そうすると文様部分だけで直径約 25 cm に復元できる。分厚い粘土板の上面を彫り込んで、立体的に文様を描いており、鋭い工具の切先の痕跡が縁取り状に残る。なお、下書きの線は確認できない。調整は瓦当裏面は丁寧なナデ・ヨコナデで、裏面はナデである。裏面には指の痕が強く残る。溝 175 から出土した。江戸時代前期に属する。

菊丸瓦（図版 15・16、図 36 94～117） 菊丸瓦は軒平瓦・軒丸瓦よりも格段に多数出土した。小型円形の瓦当上部に細長い体部を接合する。小型のもの（94～107・114）・大型のもの（108～113・115～117）がある。また、体部に釘孔を 1 箇所穿孔するものがわずかにある。

94 は間弁を配する八弁花文で、間弁は中実である。接合面はヘラで沈線を施す。調整は瓦当裏面は縦方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

95 は間弁を配する八弁花文で、弁端が太くなるのに対して、間弁は細い線状である。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

96 は間弁を配する八弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は糸切り痕が残る。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

97 は間弁を配する十弁花文である。体部は幅広く、端部は反り気味で、平坦になる。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。また、側面は縦方向のナデ、体部端面は横方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

98 は単弁十二弁花文で、花弁は接する。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

99 は凹凸のある単弁十二弁花文で、花弁は接する。体部は幅狭い。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

100 は単弁十二弁花文で、中心に小さな突起を作り、花弁は接する。接合面はヘラで縦方向に

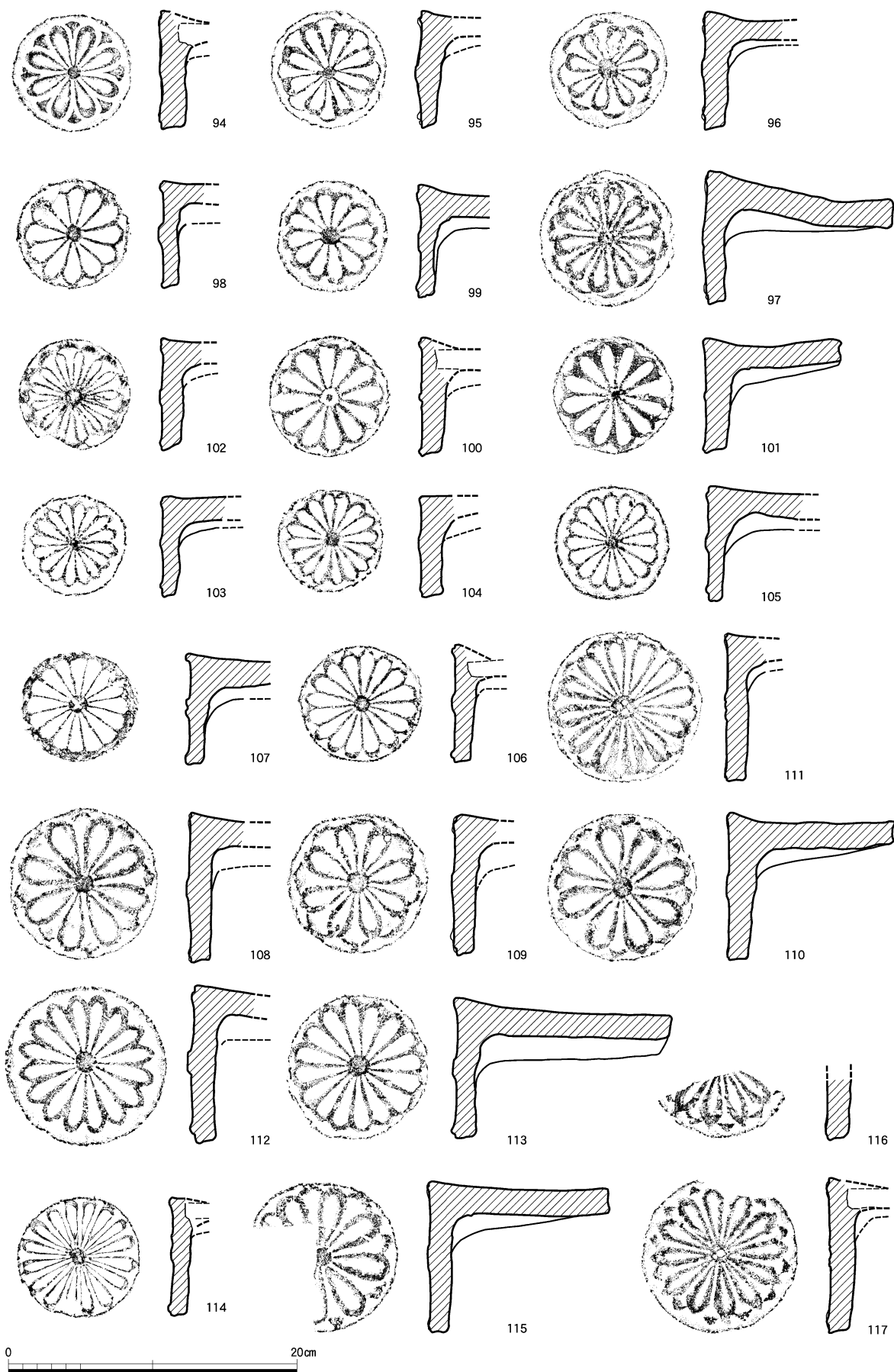


图 36 菊丸瓦拓影·实测图 (1 : 4)

沈線を施す。調整は瓦当裏面は横方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

101 は単弁十二弁で、中心に小さな突起を作り、花卉は接する。体部は短く、端部は細くなる。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は縦方向の圧痕が残る。また、側面はナデ、体部端面は横方向のナデである。花卉凸部には、わずかに金箔が残る。土坑 100 第 3 層から出土した。桃山時代に属するものか。

102 は間弁を配する十三弁花文で、細い花卉に対して間弁は幅広い。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

103 は単弁十六弁花文で、弁端は尖り気味である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面・側面は縦方向のナデ、凹面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

104 は単弁十六弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

105 は単弁十六弁花文で、花卉は接する。体部は幅広い。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は接合部分はオサエで、縦方向の圧痕が残る。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

106 は単弁十六弁花文である。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面は横方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

107 は陰刻の十六弁花文で、中心に十字形の刻線を飾る。体部は幅広い。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面・側面は縦方向のナデ、凹面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

108 ～ 110 は間弁を配する八弁花文である。同文であるが、109 は瓦当径がやや小さく、間弁の幅が広い。108 と 110 は同範の可能性もある。108 の調整は瓦当裏面は斜め方向の丁寧なナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

109 の調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

110 は体部は端部が細くなる。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はオサエナデである。また、側面は縦方向のナデ、体部端面は横方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

111 は間弁を配する十二弁花文で、中心に十字形の刻線を飾る。調整は瓦当裏面は横方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

112 は単弁十六弁花文で、弁端は尖り気味である。調整は瓦当裏面はオサエなど・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。瓦当裏面はオサエの凹凸が残る。

113 は単弁十六弁花文である。体部は長く、幅広い。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面・凹面は縦方向のナデである。また、側面は縦方向のナデ、体部端面は横方向のナデである。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

114 は単弁十六弁花文で、花卉は細い。範傷が 2 箇所にある。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。熱を受けて橙色に変色する。遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

115 は 108・110 と同範もしくは同文の間弁を配する八弁花文である。110 と同様に体部は端部が細くなる。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデである。また、側面は縦方向のナデ、体部端面は横方向のナデである。これらの調整も 110 とほぼ共通する。花卉凹部・周囲の凹部にはわずかに金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

116・117 は同範もしくは同文の間弁を配する十二弁花文で、弁端は尖る。117 は中心に格子状に刻線を飾る。116 の調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。花卉凸部にはわずかに金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

117 は接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。第 2 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

輪違瓦 (図版 17、図 37 118～125) 輪違瓦は丸瓦と比較して薄手のものが多く、平面形が台形をとることに大きな特徴がある。やや小型のもの (118)・中型のもの (119～124)・大型のもの (125) がある。

118 の調整は凸面は縦方向のナデののち狭端面側を横方向の強い板ナデで、凹面は布目が残る。凹面周縁部は面取り状の幅の狭いケズリである。広端面・狭端面は横方向のナデである。土坑 50 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

119 の調整は凸面は縦方向のナデののち広端面側・狭端面側を横方向のナデで、凹面には鉄線による切り離し痕と布目残り、上からナデを施す。凹面側面側・広端面側はケズリである。狭端面は横方向のナデで、広端面にはわずかに金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

120 は狭端面側がやや屈曲してすばまる。調整は凸面は縦方向のナデののち狭端面側を横方向のナデで、凹面は布目が残る。凹面側面側・狭端面側は幅の広いケズリ、広端面側は面取り状のケズリである。広端面は横方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

121 の調整は凸面はナデののち広端面側・狭端面側を横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目残り、上からナデを施す。凹面側面側・狭端面側はケズリである。広端面凸面側の一部に面取り状のケズリを施す。広端面の一部には金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時

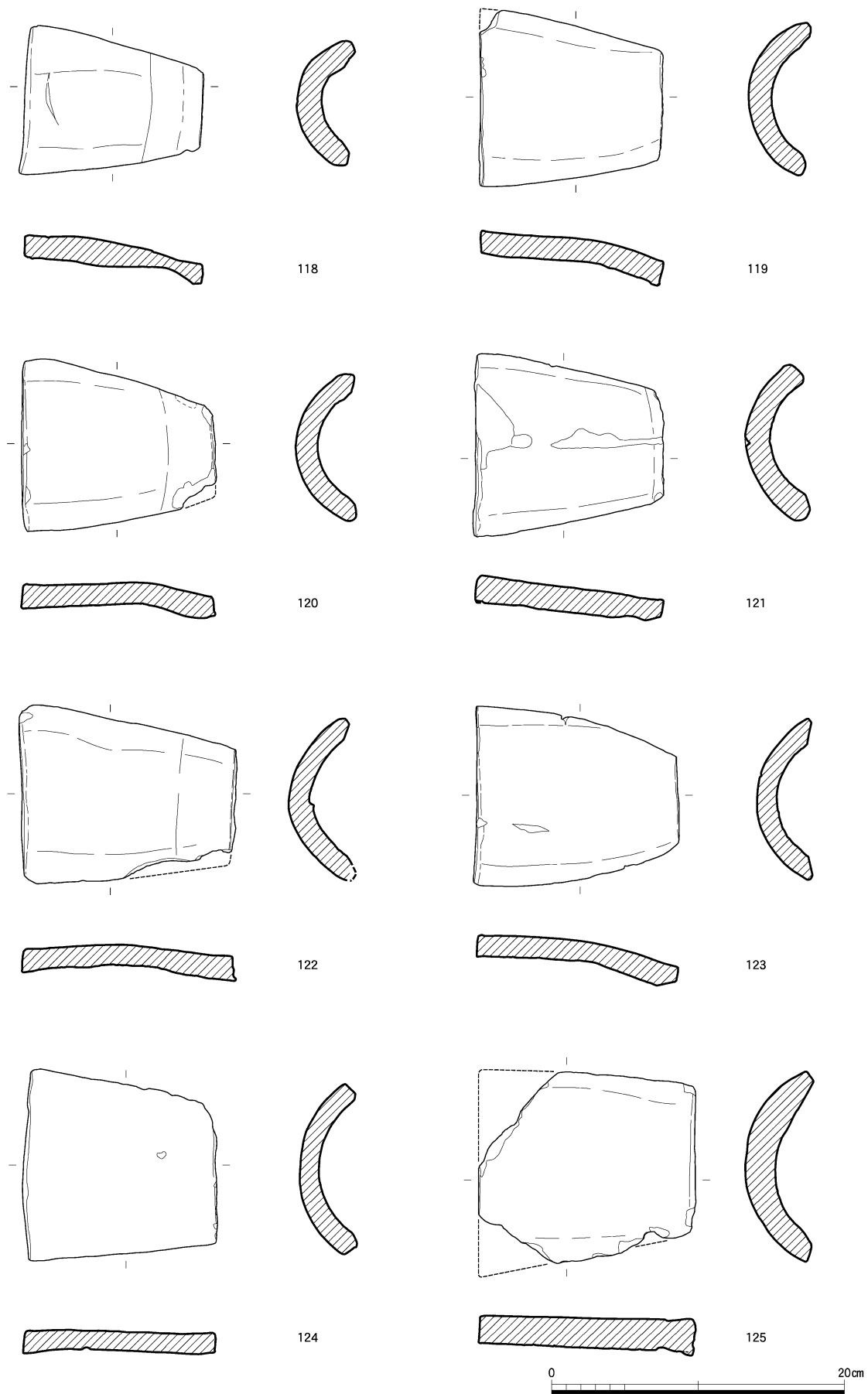


图 37 輪違瓦実測図 (1 : 4)

代に属するものか。

122 は内弯気味の形態で、やや歪む。調整は凸面は横方向のナデ、凹面は鉄線による切り離し痕と布目・抜き縄痕が残る。凹面側面側はケズリである。広端面凸面側に面取り状のケズリを施す。広端面・狭端面は横方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

123 は内弯気味の形態である。調整は凸面はナデののち広端面側・狭端面側を横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面側面側・狭端面側は幅の広いケズリである。広端面凸面側の一部に面取り状のケズリを施す。狭端面は横方向のナデで、広端面にはわずかに金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

124 は平坦気味の形態である。調整は凸面は縦方向のナデののち、狭端面側を横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目残り、上からナデを施す。凹面側面側は面取り状、狭端面側は幅の広いケズリである。広端面は横方向のケズリである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

125 は分厚く、平坦気味の形態である。調整は凸面はナデののち狭端面側を横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目残り、上からナデを施す。凹面側面側は極めて幅の広いケズリである。広端面・狭端面は横方向のナデである。土坑 100 から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

熨斗瓦 (図版 17、図 38 126 ~ 131) 熨斗瓦は平瓦と区別が難しいため確認できた個体は少ない。焼成前に施した沈線に沿って長方形に半裁する、いわゆる切熨斗 (126・127) がある。また、平瓦と区別が付かない形状であるが、長側面に金箔を施すもの (128・129)、平瓦に比べて薄手のもの (130・131) があり、これらも熨斗瓦と判断した。

126 の調整は凸面はナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデ、凹面は縦方向のナデで、側面・端面はナデである。凹面には櫛状工具で波状に沈線を施す。土坑 82 から出土した。江戸時代中期に属する。

127 の調整は凸面は横方向のナデ、凹面はナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、側面・端面はナデである。凹面には櫛状工具で対角方向に沈線を施す。遺構検出中に出土した。

128 の調整は凸面は縦方向のナデののち端面沿いに縁取り状のナデ、凹面は横方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、端面はナデである。側面の一部には金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

129 の調整は凸面・凹面は縦方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、側面・端面はナデである。側面の一部には金箔が残る。第 2 層から出土した。桃山時代に属するものか。

130・131 は厚さ約 1.3 cm で平瓦が 2 cm 以上の厚さであるのに対して、かなり薄い。130 の調整は凸面は縦方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデ、凹面は横方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、側面・端面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

131 の調整は不明瞭であるが、凸面・凹面は縦方向のナデののち、側面沿いに縁取り状のナデで、

側面はナデである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

雁振瓦 図示していないが、形態から雁振瓦とみてよい破片がある。中には端面に金箔が残るものがあり、確実に雁振瓦と判断できる。

面戸瓦 (図版 17、図 38 132) 1 点のみ確認した。

132 は上端部は屈曲し、下半部は舌状で垂下する。調整は凸面は上端部が横方向のナデ、下半部が横方向の細かいナデののち周縁部は縁取り状のナデである。凹面は横方向のナデで、下半部周縁部は縁取り状の幅広いケズリである。土坑 82 から出土した。江戸時代中期に属する。

道具瓦 (図 38 133 ~ 135) さまざまな形態のものがある。

133 は一端を斜め方向に切断・隅切りした瓦で、正面側は扇形に幅広くなるが、文様はない。下棟に接する部分に使用されたものである。調整は正面・隅切り面・切断面はナデ、裏面・外周

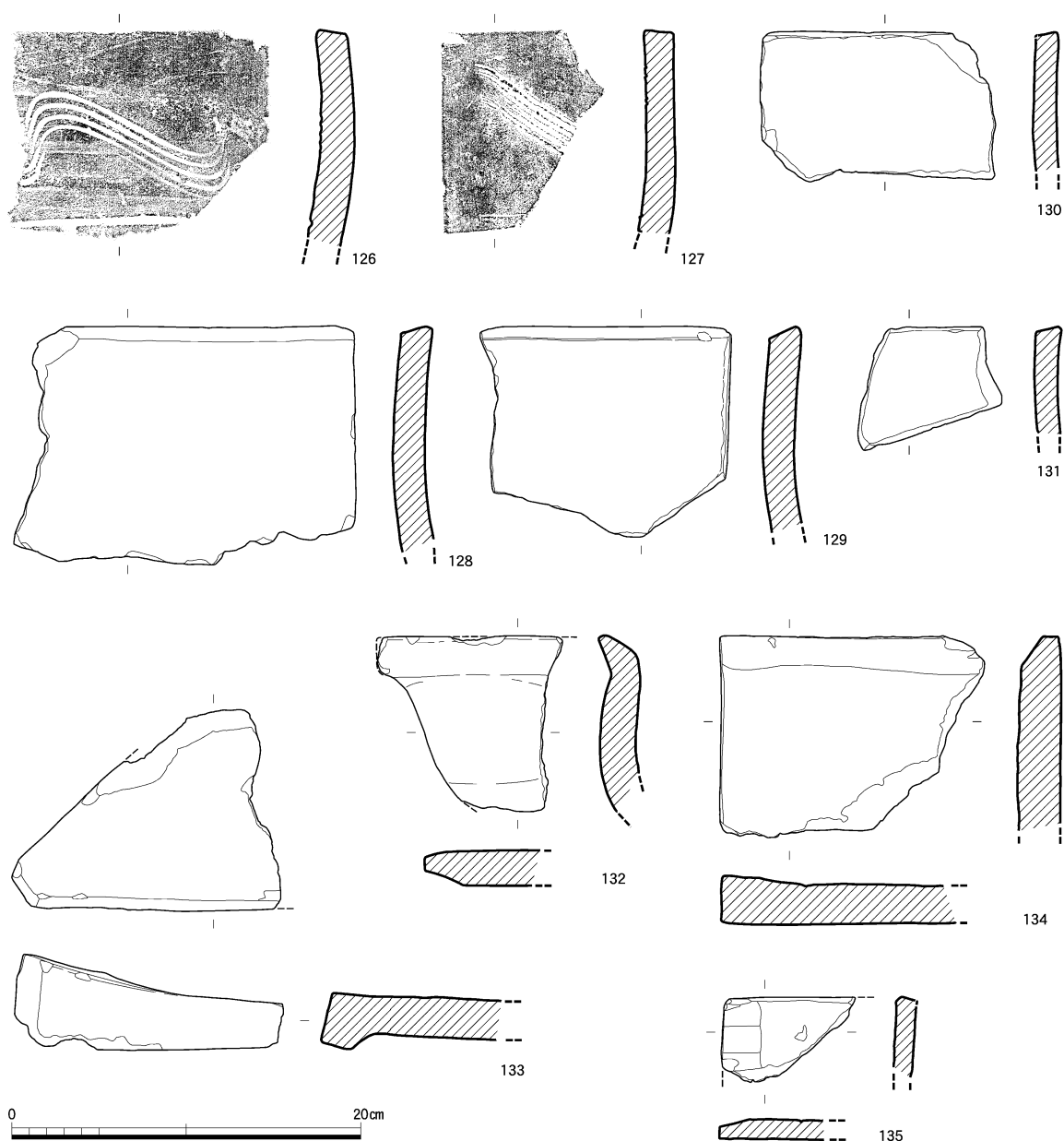


図 38 熨斗瓦・面戸瓦・道具瓦拓影・実測図 (1 : 4)

は横方向のナデで、凸面はナデ、凹面はナデの
のち正面部分を縁取り状のナデである。遺構検
出中に出土した。

134は平坦、厚手で、側面側を幅広く面取
りする。調整は面取り側はオサエ・ナデ、反対
側は縦方向の板ナデで、側面・端面はナデ、面
取りは縦方向のケズリまたは研磨である。土坑
100第3層から出土した。江戸時代前期から中
期に属する。

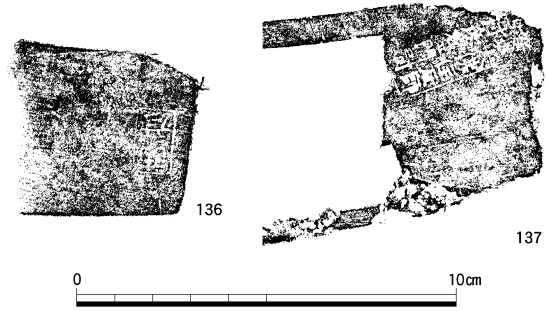


図 39 瓦刻印拓影（1：2）

135は平坦、薄手で、端面側を面取りする。調整は面取り側は鉄線による切り離しが残りに、反
対側は横方向のナデで、側面は縦方向のナデ・幅の狭いケズリ、端面はナデ、面取りは縦方向の
連続するケズリである。土坑 100 第 3 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

金箔瓦（図 35～38 86・87・89・101・115・116・119・121・123・128・129） 図示し
た金箔瓦の個別の形態・調整については紹介したが、改めて金箔瓦の全体的特徴についてまとめ
ておく。金箔瓦は軒平瓦 6 点・軒丸瓦 7 点、菊丸瓦 7 点、輪違瓦 32 点、熨斗瓦 38 点、雁振瓦 1
点の合計 91 点を認めた。軒丸瓦・軒平瓦・菊丸瓦は瓦当面、輪違瓦は小口広端面、熨斗瓦は側面
の片方、雁振瓦は小口面の片方に金箔を貼り付ける。漆を接着剤としているようであるが、明瞭
ではない。全体的に金箔の遺存状況はよくないので、完全に剥落した個体もあると考えられるが、
瓦全体の出土量からみれば、極少量である。南西部第 2 層からまとめて出土しており、次いで
土坑 100 からの出土例が多い。

塼 全容がわかる個体がないため、図示していない。分厚い方形の敷塼と井戸側に使用した弯
曲する塼の破片がある。

刻印（図 39 136・137） 2 点の瓦に刻印を認めた。

136は隅丸方形の枠内に「西彦」の文字で、部位は軒棧瓦瓦当面である。文字を天地逆に刻印する。
南壁から出土した。江戸時代後期以降に属する。

137は方形の枠内に 2 行に分けて「安城大佛住瓦師西村彦右エ門尉」の文字を配する。部位は
軒平瓦または軒棧瓦瓦当面である。文字を横転して刻印する。旧 8 区埋土から出土した。江戸時
代後期以降に属する。

（4）土製品

土製品には焼塩壺・土人形・土製容器・坩堝・ガラス瓶がある。いずれも江戸時代に属する。

焼塩壺（図 32・33 33・65・66） 33は体部が直立する円筒形で、口縁部は丸くおさめる。
調整は底部外面はナデ、体部外面は縦方向のナデ、内面はオサエののち一部をナデ、口縁部内外
面はヨコナデである。土坑 100 第 6 層から出土した。江戸時代前期に属する。

65は体部が内弯気味に直立する円筒形で、口縁端部は段をつくる。調整は底部外面はオサエ、

内面はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は粗い布目が残ри、口縁部内外面はヨコナデである。66は体部がわずかに外上方に開く円筒形で、口縁端部は段をつくる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、体部外面はナデ、内面は布目が残リ、口縁部内外面はヨコナデである。体部外面には「堺湊伊織」の不鮮明な刻印がある。65・66とも土坑50から出土した。江戸時代中期に属する。

土人形 狐を象ったものがある。型成形で、尾の部分の破片が多い。稲荷社との関連が注目できる。江戸時代中期以降に属する。

土製容器 柚の果実を象ったものがある。江戸時代中期以降に属する。

(5) 石製品 (図40・41)

石製品には硯・碁石・砥石・L字形石製品などがある。いずれも江戸時代に属する。

硯 (図40 138・139) 138は一部が欠損する。平面形は隅切りがある長方形で、底面は平坦である。側面はわずかに開いて直立し、立ち上がり部となる。上面は平坦で、海部は凹む。調整は全面をケズリで、上面を研磨する。上面には使用痕、底面には縦方向の平行する溝状の傷が残る。

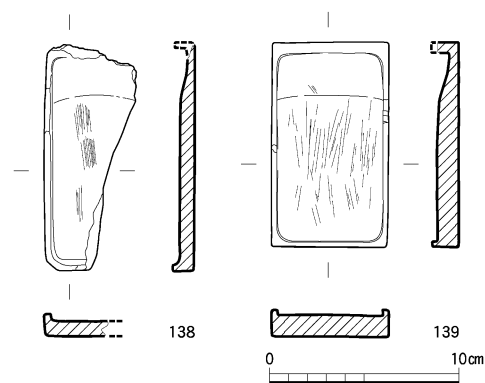


図40 石製品実測図1 (1:4)

石材は粘板岩で、暗灰色を呈する。石29周辺から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

139は立ち上がり部の一部を欠くが、ほぼ完形である。平面形は長方形で、底部は平坦である。側面は直立し、立ち上がり部となる。上面は平坦で、海部は凹む。調整は全面をケズリで、上面を研磨する。石材は粘板岩で、黒色を呈する。土坑100第3層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

砥石 小破片に破損しているものが多い。石材は灰

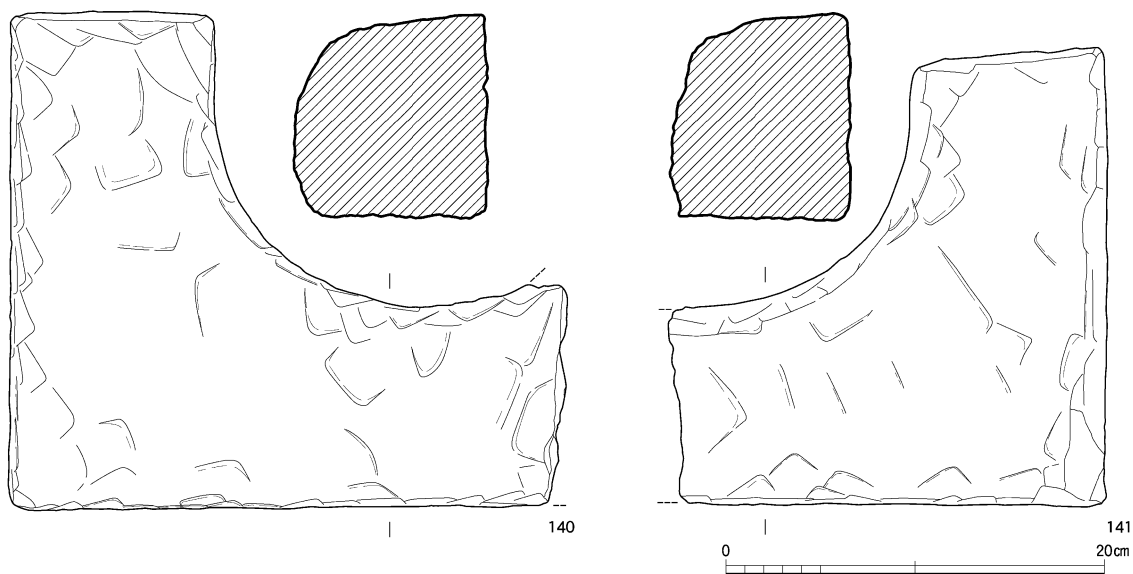


図41 石製品実測図2 (1:4)

色や淡黄色の粘板岩である。

基石 黒石を1点認めた。

L字形石製品（図41 140・141） 140・141とも方形の平面形の角部に円弧状の割り込みがあるが、一端が折損していることから、本来は半円形の割り込みがある「凹」字形であった可能性が高い。割り込みの円弧は正円である。底面は平坦、側面はほぼ直立し、上面・割り込み側の面は緩やかな丸みをつくる。やや140の方が幅広いが、割り込みの円弧はほぼ同径である。粗い敲打により成形・調整する。用途は不明であるが、割り込みの形から鳥居の柱を支える台石の可能性を考えている。東壁から出土した。江戸時代中期から後期に属する。

（6）金属製品（図版18、図42・43）

金属製品には銅製品（図42 142～169）と鉄製品（図43 170～173）がある。銅製品には銅銭・切羽・小柄・鞘尻金具・煙管・火箸・鎖金具・鋷・輪・針金・金具・引手金具・棒状銅製品・板状銅製品などがある。また、鉄製品には鉤・鎌・鋸・鋷・釘・棒状鉄製品・板状鉄製品・鉄滓などがある。

銅銭（図42 142～153） 判読できる銭銘は、すべて寛永通寶で、裏面は無文である。144は強く箔ズレする。南西部第2層から多くが出土しており、143～153は20枚以上が中央の方孔に紐を通した銭縷の状態出土したもの的一部分である。153は銭銘がある面を向かい合わせに2枚が接着している。また、142は少し離れて1点のみで出土した。いずれも江戸時代中期に属する。

切羽（図42 154・155） 154は遺存状態がよくないが、ともに完形である。楕円形の薄板で、中央に二等辺三角形の孔をあける。155は周縁に細かい襷をつくる。154は第2層、155は土坑50から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

小柄（図42 156） 先端部が捲れ上がるが、柄は完形である。鉄製刀身の茎が残る。銅板を折り曲げて成形し、断面は薄い二等辺三角形になる。側面に不明瞭な凹凸があり、文様の可能性がある。土坑100第2層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鞘尻金具（図版18、図42 157） 完形である。端部が隅丸方形となる長円筒形で、一端は斜めに裁断する。両側の部品を合わせて接合するが、技法は不明である。内部には木質が残る。出土後に剥離したが、金具表面には漆を塗る。溝175から出土した。江戸時代前期に属する。

煙管雁首（図42 158・159） とともに完形である。筒部は銅板を断面円形に巻いて成形し、先端を弯曲させ、腕部を溶接する。土坑50から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

煙管吸口（図42 160・161） とともに完形である。円筒形で口部はすぼまる。銅板を断面円形に巻いて成形する。土坑50から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

火箸（図42 162） 先端が曲がるが、完形である。先端は鋭く尖り、基部は括れて小さな球形をつくる。断面は円形である。第2層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鎖金具（図版18、図42 163） 完形である。細い針金を8字形に成形した部品を2個連結する。

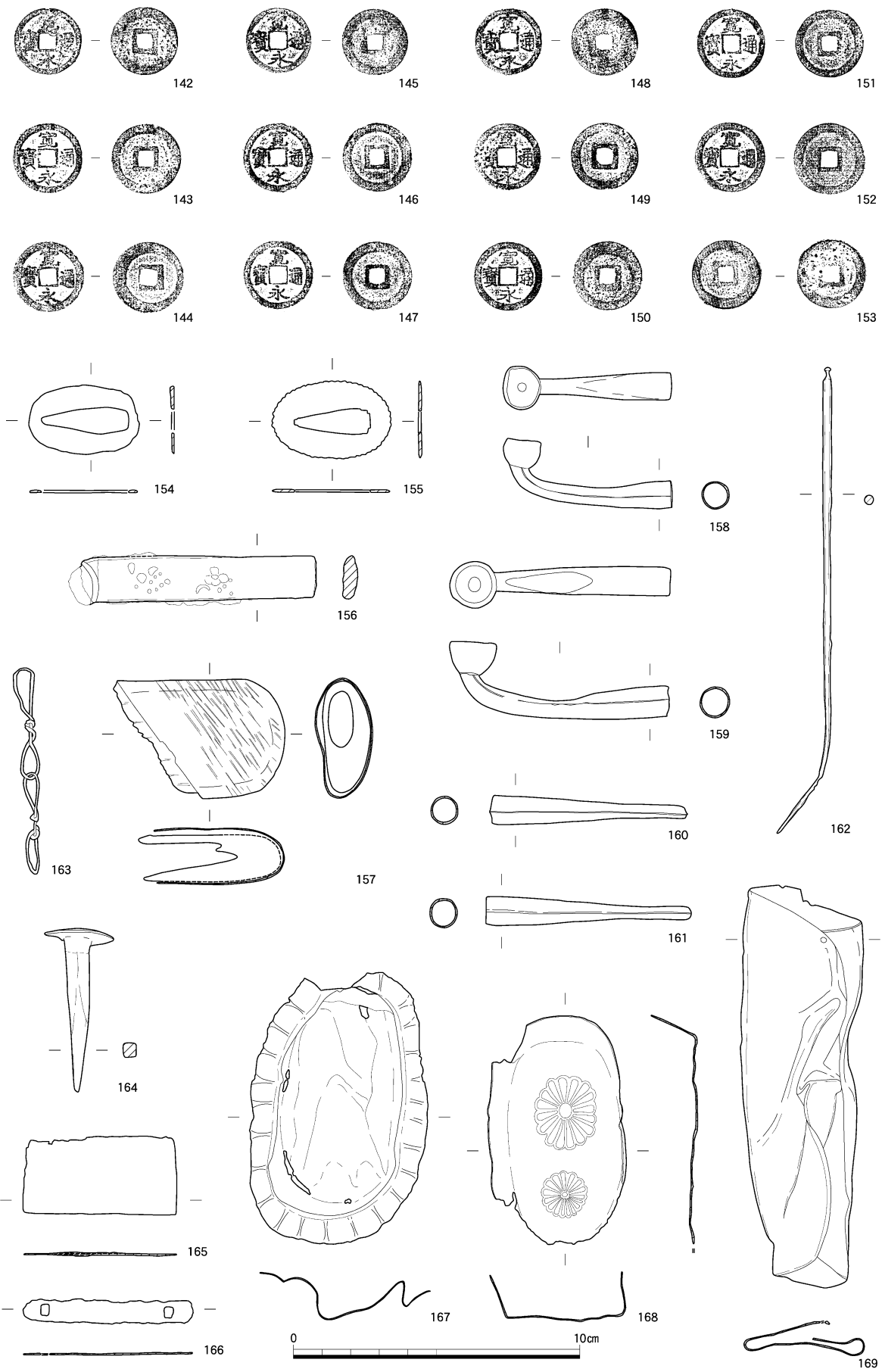


图 42 金属製品拓影・実測図 1 (1 : 2)

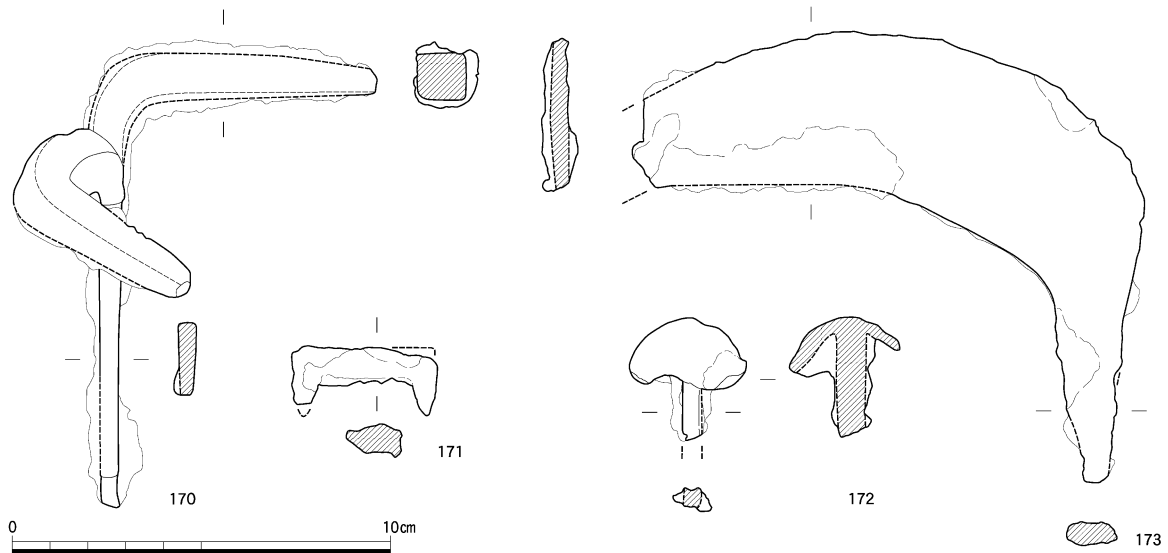


図43 金属製品実測図2 (1:2)

用途は不明である。土坑50から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鋌(図版18、図42 164) 完形である。全体に厚手で、鋭く尖る体部に円形の笠部を作る一体成形の鋳造品である。断面形は体部上半は円形、下半はほぼ正方形である。遺構検出中に出土した。江戸時代前期に属する。

金具(図42 165・166) ともに完形である。165は方形の薄板である。用途は不明である。第2層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。166は細長い薄板で、両端に方形の孔をあける。用途は不明である。遺構検出中に出土した。

引手金具(図版18、図42 167・168) ともに一部を欠損する。建具の引手金具である。小判形の薄い銅板を叩きのぼして成形する。167は縁部に花弁状の凹凸を作る。168は縁部を欠くが、凹部平坦面に大小の十六弁の花文を陽刻し、漆を塗る。167は第2層、168は遺構検出中に出土した。江戸時代前期から中期に属する。

板状銅製品(図42 169) 厚手の銅板を折り曲げて、押しつぶした状態で出土した。端に小さな円孔があるので、金具であった可能性が高い。第2層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鉤(図版18、図43 170) 二股の鉤である。分岐部が断裂し、一端が折れ曲がるが、完形のようなものである。先端部の断面形はほぼ正方形で、先端は尖る。基部は端部は丸みをもってやや幅広くなり、断面形は平坦である。第1層から出土した。江戸時代中期から後期に属する。

鋌(図43 171) 完形である。極小型で、長さ(渡り)に対して幅(爪)は太く短い。断面は方形である。遺構検出中に出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鋌(図43 172) 先端・笠部の一部を欠損する。体部に半球形の笠部をつくる。錆が著しいため接合技法などは不明である。遺構検出中に出土した。江戸時代前期から中期に属する。

鎌(図版18、図43 173) 曲刃鎌で、先端部は欠損する。茎は平坦で、先端は尖る。遺構検出中に出土した。

鉄滓 さまざまな大きさがあり、最大では長辺約 15 cm・短辺約 10 cmのものがある。多くは第 2 層から出土した。江戸時代前期から中期に属する。

(7) 木製品

鞘尻金具（図版 18、図 42 157）に包まれた鞘の破片と漆器がある。

漆器は漆膜のみが遺存するのみで、木質は腐朽しているため器形は不明である。内外面とも赤色である。

(8) その他の出土遺物

獣骨・貝殻・漆喰片・焼土粒・焼土塊・炭片などがある。²³⁾いずれも江戸時代に属する。

獣骨にはイノシシ／ブタ、ニホンジカがある。イノシシ／ブタの骨は後肢の大腿骨（左）・脛骨（右）・距骨（右）である。土坑 105 からまとまって出土した。ニホンジカの骨は大腿骨（右）である。土坑 50 から出土した。

貝殻は土坑 50 から少量出土した。サザエ・テングニシ・アカガイがある。江戸時代中期に属する。また、第 3 面遺構検出中にアカニシ（殻軸のみ）が出土した。

焼土粒・焼土塊は少量出土した。天明の大火に関連すると考えられるが、調査地は類焼範囲から外れていることから、火災の後片づけの際に持ち込まれた可能性が高い。江戸時代後期に属する。

6. 緑の園の遺物

緑の園は調査を江戸時代後期から末期の整地層上面でとどめているため、江戸時代中期以前の遺物は江戸時代後期以降の遺構・攪乱および包含層からの出土である。江戸時代後期の遺物が大部分を占める。

平安京造営前の遺物は出土していない。

平安時代から桃山時代の遺物は、鎌倉時代から室町時代の土器類が多く、土師器皿、瓦器鍋・釜、須恵器甕、焼締陶器甕、中国製白磁碗、青磁碗・鉢などがある。また、瓦は平安時代の平瓦片が数点出土したのみである。

江戸時代前期から中期の遺物は土器類がほとんどで、土師器皿・壺・火鉢、瓦器火鉢、焼締陶器插鉢、施釉陶器碗・壺、磁器染付碗、中国製染付碗などがある。瓦は細片なので江戸時代後期と区別が難しいが、菊丸瓦など確実にこの時期に含まれるものがある。

江戸時代後期の遺物は土器類と瓦類がほぼ同量である。土器類には土師器壺、施釉陶器碗・皿・灯明皿・插鉢・鍋・土瓶・蓋・壺・甕、磁器染付碗・皿・鉢・蓋・壺、色絵碗・鉢、白磁碗・皿、青磁碗、青磁染付碗などがあり、施釉陶器・磁器が大部分を占める。瓦には丸瓦・平瓦のほか鬼瓦・道具瓦・棧瓦がある。熱を受けて淡黄色から淡橙色に変色しているものも多い。金属製品には鉄釘・銅銭（寛永通寶）・煙管などがある。

7. ま と め

(1) 遺構の変遷

今回の調査では、桜の園・緑の園の調査地で江戸時代を中心とする遺構を検出した。それぞれの調査地は城内南部・北東部で離れており、また、緑の園の調査は江戸時代後期から末期の遺構面とどめていることから、ここでは桜の園の調査で明らかになった遺構の変遷を中心に検討を行うこととする²⁴⁾。

二条城造営前 今回の桜の園の調査で出土した最も古い遺物は、弥生時代の土器の破片である。調査地南側の押小路通沿いの調査では、弥生時代の溝を検出しており堀川御池遺跡との関連が注目できる²⁵⁾。

桃山時代以前の遺物は遺構に伴うものではない。調査地は平安京左京三条一坊十六町にあたっていることから、平安時代以前の遺物は神泉苑に関わるものである可能性が考えられる。緑釉を施した熨斗瓦は神泉苑の主要建物に使用されていたものであろう。また、柱穴 159 から出土した重圈文軒丸瓦は奈良時代に属するものであるが、建物の移建などに伴い平安京に搬入され、最終的には江戸時代前期の柱穴の根石代わりに使用された経過が考えられる。神泉苑は平安時代以降も規模を縮小しながら存続していたことが知られており、少量ながらも鎌倉時代から桃山時代の遺物が出土したことから、二条城造営に伴う整地層の下層には神泉苑をはじめとする当該時期の遺構が広がっていることが推定できる。

さらに注意しておきたいことは遺構検出面の標高である。調査では土坑 100 底部や旧 8 区北拡張部の再掘削で標高約 36.5 m まで掘り下げたが、桃山時代以前の確実な土層は確認していない。このことは二条城造営前の調査地周辺の旧地形の標高が低かったことを示唆している。二条城周辺の現地表面の詳細な測量成果では調査地周辺から南西方向に延びる谷地形の痕跡が確認されている²⁶⁾。また、調査地南側の地下鉄東西線建設に伴う発掘調査では、平安時代の遺構面が 1 m 以上の高低差で大宮大路東側付近から西側に落ち込んでいること、そして、この高低差は江戸時代初頭まで残っており、二条城造営に伴い西側に 1 m 以上の盛土を行った上面に押小路通を整備したことが明らかとなっている²⁷⁾。旧地形の状況が二条城の造営に影響を与えており、これは次の盛土と整地に関わる大きな要因となる。

造営の盛土と整地 (図 44) 東側拡張部・土坑 100 壁面・旧 9 区北拡張部・旧 8 区南拡張部・旧 8 区中央拡張部・旧 8 区北拡張部の 6 箇所では、さらに下層の状況を観察することができた。これをもとに江戸時代初期から前期にかけての造営経過について検討する。観察できた土層は、おおまかに上層から江戸時代前期の整地層、江戸時代前期の盛土、標高 37.6 ~ 37.7 m 付近に水平に堆積する土層 (以下では「A層」とする)、A層の下部に積み上げられた土層 (以下では「B層」とする) に分けることができる。

江戸時代前期の盛土・整地層は二条城行幸に備えて行われた寛永期の大規模な増改築に伴うも

のである。盛土は約 50 ～ 110 cmの厚さがあり、極細砂・シルトのブロックや礫を多く含む砂泥などで、これらの土層は堀の掘削などにより出た調査地の基盤となる土砂を積み上げたものである。整地層は約 10 ～ 30 cmの厚さがあり、旧 8 区南拡張部・旧 8 区中央拡張部で盛土との間に黒褐色砂泥層が薄く堆積することから、盛土のあと整地が行われるまでの間に盛土上面が露出していた期間があったことがわかる。

A層は東側拡張部・土坑 100 壁面の褐色粘質シルト、旧 9 区北拡張部の暗褐色砂泥、旧 8 区北拡張部の礫敷状の褐色砂泥が相当し、また、旧 8 区南拡張部・旧 8 区中央拡張部でも同じ標高付近で江戸時代前期の盛土の下面となり、下層の B層との境目がほぼ水平となることから、この部分に造営過程における何らかの段階があったことは確実である。一方、B層は江戸時代前期の盛土と同様に砂泥・砂礫を積み上げている。A層検出面の標高は東側拡張部・土坑 100 壁面・旧 9 区北拡張部・旧 8 区北拡張部の 4 箇所いずれも約 37.7 mで、B層検出面の標高は 6 箇所それぞれで約 37.5 ～ 37.6 mである。

A層・B層を確認できた箇所のうち、土坑 100 は江戸時代中期の遺構であり、旧調査区は埋土を再掘削したのみであることから、出土遺物から層序の年代を推定できるのは東側拡張部のみである。ところが、織部の特徴をもつ施釉陶器鉢がA層あるいは直下のB層から出土したことから、A層が江戸時代初期から前期に属することは明らかとなったが、厳密な時期は出土遺物からは確定できていない。

さて、江戸時代初期から前期の造営過程を考察するにあたって、再検出した石垣について改めて検討を加えておく。2000 年から 2001 年にかけての確認調査では、旧 8 区南拡張部・旧 8 区北拡張部の石垣は、慶長期の二条城の西堀西面の石垣と判断された。また、今回の調査では再検出することができていないが、旧 9 区北拡張部の堆積層が乱れる部分を石垣抜き取り痕として西堀東面の位置を確定し、西堀の幅が約 20 m²⁸⁾として報告がなされた。

この見解に基づけば今回の調査区の大部分は西堀内部になることから、A層・B層は慶長期の西堀埋土になる。しかしながら、今回の調査ではこの見解とは反する所見が得られた。以下に列挙すると、堀の埋土に相当する部分に水をたたえた状況を示す堆積土が存在しない、石垣の下部に胴木がない、旧 8 区北拡張部の石垣下部は土層が露出する、旧 8 区北拡張部の石垣は平坦な石を立てて使用している、裏込めが貧弱で石垣を高く積み上げることはできない、などである。これらの状況からみて再検出した石垣は水をたたえた西堀の石垣とは考え難く、むしろ、西堀内側に接して積み上げられた土塁内側（東側）裾部に巡らされたものと考えべきである。そうすれば上記の所見に大きな矛盾は生じない。やはり慶長期の二条城の西堀は、現在の外堀が折れ曲がっている部分に構築されていたのであろう。

そこで改めて造営経過について 3つの案を想定して、検出遺構の関係を整理することとしたい。

a 案はA層検出面付近に慶長期の二条城造営時の地表面があり、少なくとも石垣下部の標高約 36.5 mまで空堀状に掘り下げて石垣を構築する場合である。空堀東肩は旧 9 区北拡張部や土坑 100 壁面で確認した堆積層が乱れる部分が相当し、幅は約 20 mとなる。空堀なので東肩の石垣

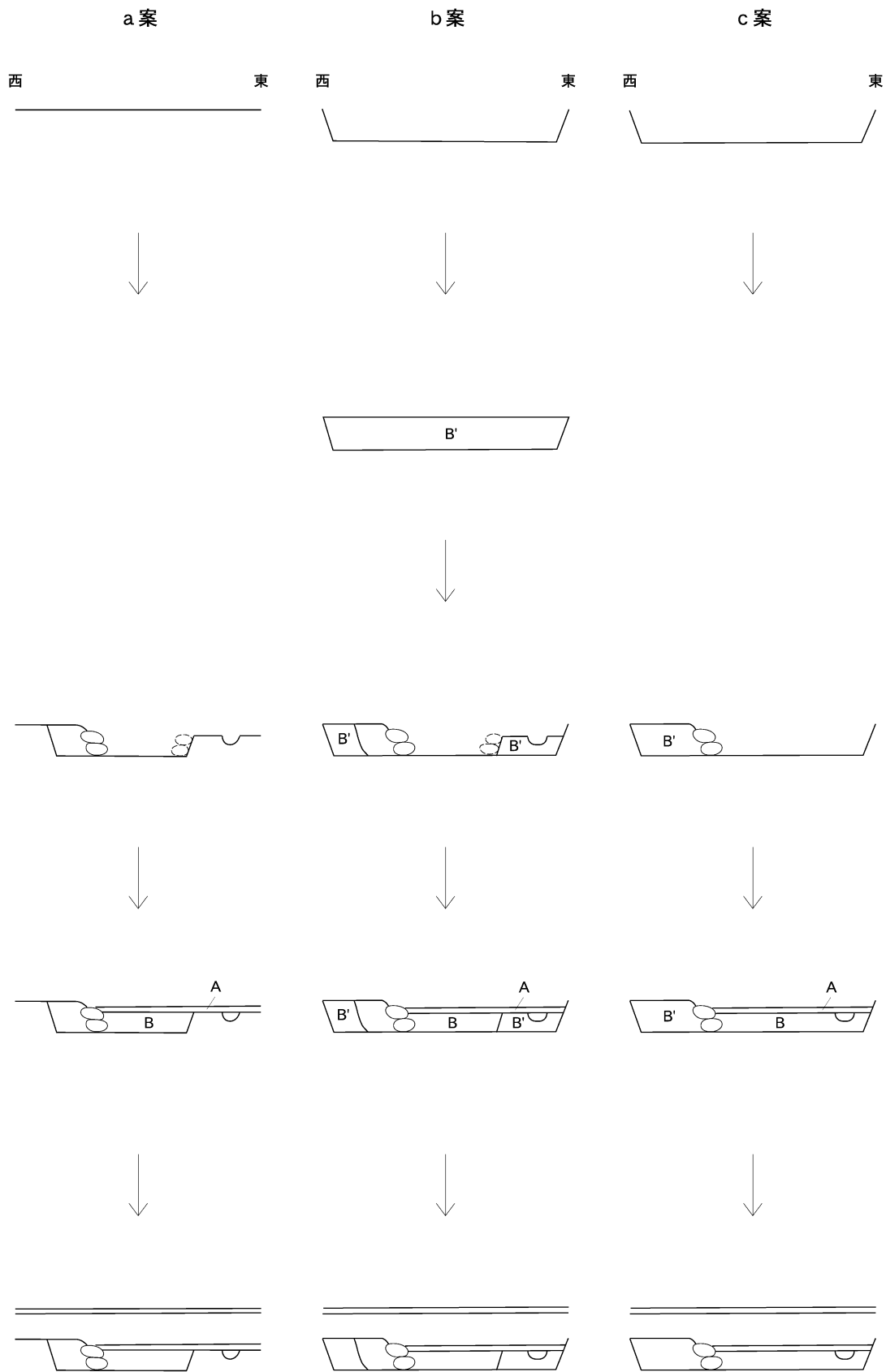


図 44 桜の園周辺造営経過模式図

の有無は問題としない。B層およびA層は寛永期に空堀を埋めた堆積層となる。

調査で得られた所見とa案との問題点は次のものを挙げることができる。堀の内側に幅約20mの空堀を造る必然性がない、慶長期の整地層検出面の標高は二の丸付近で約38.1～38.3mなので城内の水がここに溜まることになる、東肩推定位置よりも東側のB層が盛土状の堆積を示す、空堀とはいえ旧8区北拡張部の石垣下部の土層が露出する、寛永期の埋立にあたって水平にA層を上げる必然性がない²⁹⁾、などである。

b案は慶長期の二条城造営時の地表面が谷状に落ち込んでおり、その部分をいったん埋め立てたのち空堀状に掘り下げて石垣を構築する場合である。旧地形の落ち込みは押小路通沿いの調査成果から想定できる状況である。

b案ではa案の問題点の一つである東肩推定位置よりも東側のB層が盛土状の堆積を示すことについては説明できるが、他の問題点はそのままであり、さらにいったん埋め立てた部分をすぐに掘り直す無駄な行為に大きな矛盾がある。

c案はb案と同じく二条城造営時の地表面が谷状に落ち込んでおり、その部分に石垣を構築し、同時に東側を埋め立てて整地する場合である。B層およびA層は慶長期の盛土・整地層で、A層状面が慶長期の地表面となる。

c案ではa案・b案の問題点の多くが説明できる。整地層の標高は二の丸付近に比べると約0.4～0.6m低くなるが、北大手門付近と二の丸付近の標高差が1.0m以上あることからすれば旧地形の影響を受けた傾斜が残ったと考えることが可能である³⁰⁾。また、旧8区北拡張部の石垣下部の土層が露出することは、石垣構築後に前面を埋めることになるから問題ない³¹⁾。

逆にc案の問題点は次のものを挙げることができる。a案・b案の空堀東肩推定位置の東側と西側ではb層の様相が異なる、空堀東肩推定位置の東側にはA層に覆われる土坑状の落ち込みがある、旧8区中央拡張部の石垣石材が抜き取られている、旧8区南拡張部・中央拡張部に明瞭なA層がない、などである。前の2点については盛土の堆積層や堆積状況の違いとして考えることも可能であるが、石垣についてはc案では説明し難い。

遺跡の状況確認は主として部分的な断面観察に留まり、遺構面として全体の発掘を行っていないため、3つの案のいずれかに確定することはできない。しかし、少なくとも再検出した石垣は慶長期の西堀内側に接して積み上げられた土塁内側（東側）裾部に構築されたものであることは確実である。

行幸御殿の遺構（図45）寛永3年（1626）9月6日から10日にかけて行われた後水尾天皇の二条城行幸の頃の状況を描いた絵図によると、調査地はこの時に造営された中心建物である行幸御殿の一部にあっている。行幸御殿は後水尾天皇のための御殿・中宮和子のための御殿・後水尾天皇の実母である中和門院のための女院御殿を中核にして、付属する御台所・御局・御車屋・下屋・門などの施設により構成されており、調査地はそれらの西端、台所に付属する部分にあたる。絵図には建物の名称の書き込みはないが、同じ規格の小規模な部屋が連なった状況が描かれている。

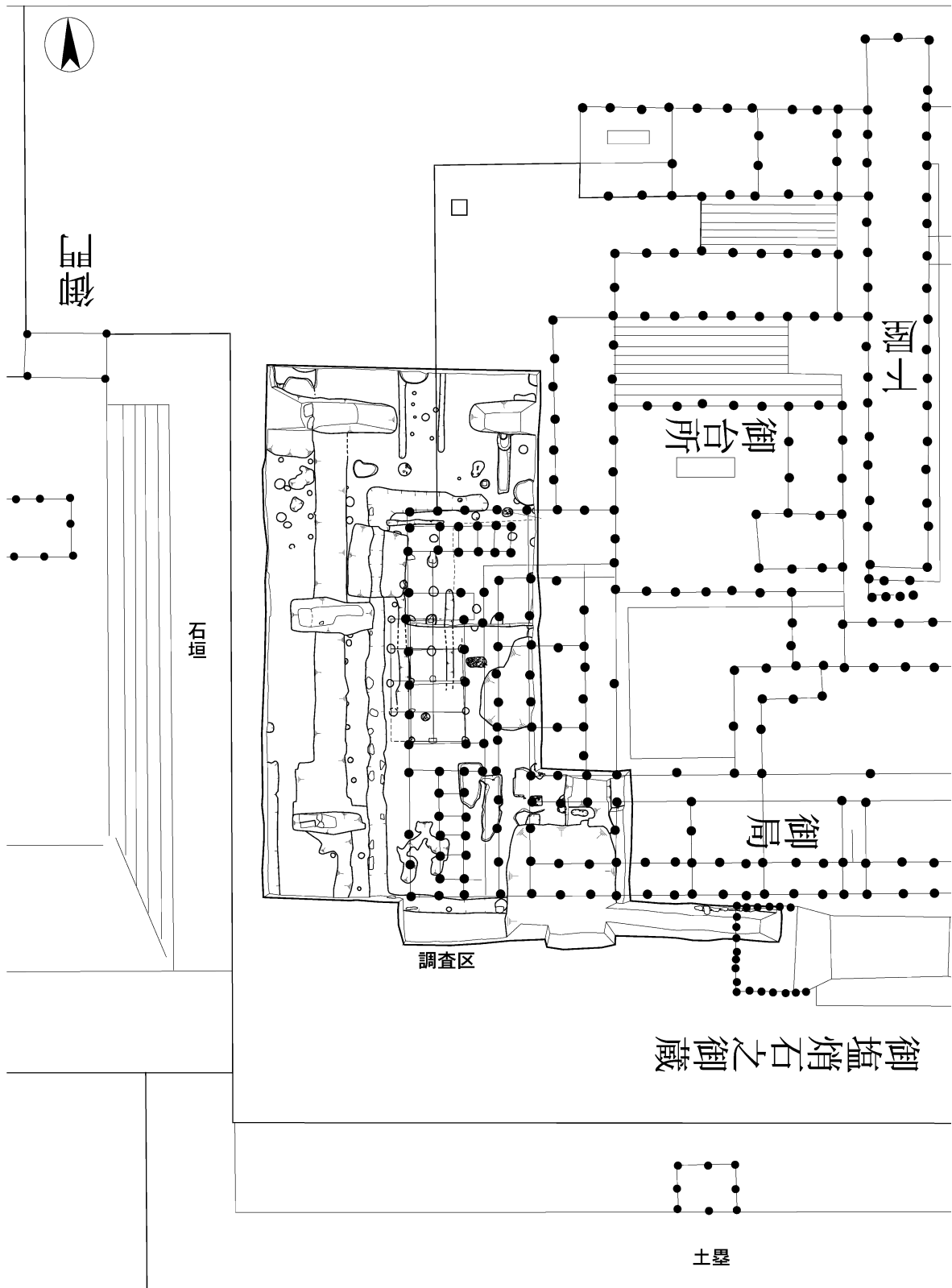


図 45 寛永期本丸御殿絵図と検出遺構
『行幸御殿并古御建物御取解不相成以前 二条御城中絵図』中井正知家蔵より作図

第3面で調査区中央部を中心に良好な状態で江戸時代前期の整地層・建物礎石・柱穴列・溝・柱穴・石列などを検出することができた。先にみたように行幸御殿造営にあたっては約50～110cmの厚さにおよぶ盛土の上に、約10～30cmの厚さの整地を行う。整地層は褐色粘質土・黄褐色砂泥・褐色砂泥などで粘質できめの細かい土層を用いており、中心建物がある東に向かって厚くなる。調査区東部では褐色粘質土の上に、ほぼ方形の平面形でさらに暗褐色砂泥を約10～20cmの厚さで積み上げる。暗褐色砂泥が拡がる部分の柱穴は根石を用いて礎石を据えるのに対して、西側の礎石では根石を使用した痕跡はない。整地と建物の構造の対応が推測できる。また、整地層検出面の標高は約38.8～38.9mで、寛永期の整地層検出面の標高が二の丸付近では約38.4～38.6m、本丸西側では約38.4mであることと対比すると、より厚く高い盛土・整地が行われたことがわかる³²⁾。

建物礎石柱穴列は南北方向に4列、東西方向に5列以上並ぶ。この他にも同時期の柱穴を検出しており、これらを絵図と重ね合わせると建物の配置がほぼ一致している状況が看取できる³³⁾。付属建物部分であるにもかかわらず大きな礎石を用いており、行幸御殿全体に対して嚴重な造営が行われた様子が想像できる。絵図には描かれていないが溝130は建物西側をめぐる位置にあり、区画および排水の機能をもっていたと考えている。溝130が北東部で途切れる部分では溝164・溝165・溝175が組み合わさっていることから、塀などを併用した出入口になっていたことも考えられる。なお、石列211は機能は不明であるが、御殿の基礎などの構造物であったことが考えられる。

このように絵図と検出遺構が合致することから行幸御殿の实在が確かめられ、絵図の活用が建物を復元する有効な方法となることが明らかとなった。しかしながら、行幸御殿には複数の絵図が残されており、それぞれの細部は必ずしも一致していない。絵図と検出した遺構との照合による、さらなる検討が今後の課題である。

土坑100やその他の遺構・包含層から出土した瓦の多くは行幸御殿に使用されたものと判断できる。菊丸瓦・輪違瓦・熨斗瓦の割合が多いことから、立派な葺棟を備えた御殿であったことが想像できる。また、建具引手も御殿所用のもので、豪華な内装をうかがい知ることができる。

歴史的な4泊5日のために造営された行幸御殿は、二条城行幸ののち間もなく寛永4年(1627)11月に解体・撤去され、その一部は後水尾院御所などへ移築された。ただし、遺跡の状況からはこの時に撤去されたのは建物部分であり、礎石や溝130の石材などはそのまま放置され、また、不要となった瓦やその他の遺物も周辺に廃棄されたことがわかる。一部の礎石が江戸時代中期の整地層上面に露呈していたことから、放置されていた礎石などの石材は必要に応じて抜き取られて、転用されたことが考えられる。

江戸時代中期以降の状況 調査では3層の江戸時代中期の整地層を認めており、調査地周辺では複数回の整地による嵩上げが行われたことがわかる。これは溝45の上部に重複して石鳥居の台石である石97が据え付けられていることから確実である。石を詰めた溝25・溝26・溝43・溝45は調査地内で途切れ、勾配をもたないことから最初の段階の整地に伴う暗渠と考えている。

創建時期は不明であるが、絵図によると江戸時代中期には調査地南西側に稲荷社があったことが示されている。文政13年(1830)の大地震では稲荷社の石鳥居・鳥居の多くが倒壊・破損したことが記録に残されており、³⁴⁾ 検出した石鳥居は稲荷社参道に設置されたものであることは間違いない。石97上面の一部が破損したのはこの地震によるものであろう。L字形石製品は破損した別の石鳥居の一部であった可能性がある。

石鳥居の方向からみて、稲荷社への参道は調査地北側から南北方向に延び、西に向けて屈曲していたものと推定できる。石鳥居に近接する位置にある石組92は関連施設か。また、石鳥居に重複する溝43・溝45は、推定される参道に平行して延びることから、より古い段階の参道の一部だったことも考えられる。

調査では稲荷社の位置を確定することはできなかったが、南西部で検出した礎石群は稲荷社との関連がうかがえるもので、社殿もしくは付属建物、あるいは玉垣などの一部であったと考えている。ただし、礎石の大きさからすると大規模な建物は復元できない。礎石に囲まれた土坑105からはイノシシ／ブタの後肢骨、また、周辺の整地層からは20枚以上の銭縷を含め寛永通寶が多数出土していることから、稲荷社への「おそなえ」・「お賽銭」であったことが考えられる。当時の稲荷社への信仰の一端がうかがえる資料である。

南東部で検出した土坑100は調査区外へ拡がる大型の遺構である。絵図には調査地南東側には焰硝蔵が描かれているが、東西に細長い絵図と異なり南北に細長い遺構であること、地下式収納施設は湿気を嫌う焰硝の保管には必ずしも適していないことなどから合致しない要素が多い。しかしながら、底面に礎石の可能性のある大きな石が散在することから、焰硝蔵とは別の収納施設であった可能性は残されている。

土坑100は大小の礫や多量の瓦・陶磁器類などにより一気に埋め立てられた。出土遺物の大部分は江戸時代前期に属しており、菊丸瓦などの瓦は行幸御殿の屋根を飾り、また、精緻な作りの白磁椀などの陶磁器は行幸御殿で使用された什器であろう。土坑100は行幸御殿南西側に位置していることから、既存の地下式収納施設を利用するかあるいは新たに大規模な土坑を掘削することにより、江戸時代中期になってから行幸御殿に関連する大量の廃棄物を処理したものと考えている。

一方、江戸時代中期から後期の絵図にある与力・同心屋敷の痕跡を認めることはできなかった。しかしながら、出土した棧瓦は与力・同心屋敷に使用されていた可能性が高い。また、土坑50からは日常雑器を中心とする土器・陶磁器類がまとまって出土しており、少量ながらもニホンジカの骨や貝殻などの食物残滓が含まれていることから、生活の一端をうかがうことができる

なお、江戸時代後期の遺構は少ないが、土坑20や瓦を廃棄した土坑があることから、ある程度の整備が続けられたことがわかる。

緑の園の遺構 今回の調査で出土した江戸時代中期以前の遺物は遺構に伴うものではない。調査地は平安京左京二条二坊三町にあまっていることから、平安時代以前の遺物は冷然院に関わるものである可能性が考えられる。また、少量ながらも鎌倉時代から桃山時代の遺物が出土したこ

とから、2000年から2001年にかけての調査成果と合わせると、二条城造営に伴う整地層の下層には冷然院をはじめとする当該時期の遺構が広がっていることが推定できる。

1区・2区とも調査を江戸時代後期から末期の整地層上面でとどめているため、江戸時代前期から中期の遺構は検出していない。しかしながら、江戸時代後期の土間・礎石を備えた柱穴などの番衆小屋に関連する遺構から、幕末の二条城の状況をうかがうことができ、今回の調査の成果として評価できる。また、2区の既設管断面では江戸時代前期の整地層である黒褐色シルト～細砂を確認した。今回の調査の直後に実施した確認調査では、北大手門からの城内通路に設定した調査区で江戸時代前期の路面を検出している³⁵⁾。今回検出した整地層は上面が堅く締まっており、検出面の標高も一致することから、同じ路面の一部であることは確実である。

(2) 瓦の種類と用途

ここでは桜の園で出土した遺物の大半を占める瓦について若干の検討を行うこととする。出土した瓦には軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦・平瓦・丸瓦・棧瓦・鬼瓦・烏衾瓦・熨斗瓦・菊丸瓦・輪違瓦・面戸瓦・その他の道具瓦がある。

これらのうち、軒棧瓦・棧瓦は時代が下がり、与力・同心屋敷に使用していたと考えている。また、三葉葵文と推定できる鬼瓦は徳川家の家紋であることから、本丸・二の丸の主要建物に使用されていた可能性が高い。

鬼瓦・烏衾瓦・熨斗瓦・菊丸瓦・輪違瓦は建物の棟を飾る瓦であり、その多くは行幸御殿の葺棟に用いられたものである。菊丸瓦・輪違瓦が特に目立つ。

熨斗瓦は、焼成前に施した沈線に沿って長方形に半裁するもの、長側面に金箔を施すもの、平瓦に比べて薄手のものを判別した。しかしながら、棟における熨斗瓦の使用状況からみれば判別できた数はあまりにも少なく、これらはむしろ特殊な個体であって、熨斗瓦の多くは破片では平瓦と区別が付かない状態で出土しているのであろう。あるいは平瓦を半裁して熨斗瓦として使用した割合が多かったと考えることができる。しかし、仮に平瓦を半裁した熨斗瓦が多くを占めたとしても、先の3種類を含む複数の種類の熨斗瓦を使用していたことは間違いない。

菊丸瓦は小型のものと大型のものに分けることができる。大きさの違いは使用される棟の部位によって使い分けられたことの反映である。文様の種類が多く、瓦当部分の接合技法や体部の形態にも複数の種類がある。瓦当面に金箔を施すものもある。文様・形態・技法の多様性が菊丸瓦の特徴として認めることができる。また、本丸・二の丸から出土した菊丸瓦と文様・技法が共通するものがある³⁶⁾。

輪違瓦はやや小型のもの、中型のもの、大型のものに分けることができる。縦断面の形状や凹面側の調整技法には複数の種類があり、菊丸瓦と同様の多様性を特徴として認めることができる。行幸御殿は二条城行幸ののち間もなく撤去・解体されたことから、屋根が補修されたとは考えがたい。したがって、行幸御殿造営にあたっては少なくとも熨斗瓦・菊丸瓦・輪違瓦については、文様の種類や微細な形態の違いを問わずに、数を集積して使用したことが推定できる。

次に金箔瓦について検討する。2000年から2001年にかけての調査³⁷⁾を含め、桜の園は二条城城内でも金箔瓦が出土する場所である。今回の調査では軒平瓦6点・軒丸瓦7点、菊丸瓦7点、輪違瓦32点、熨斗瓦38点、雁振瓦1点の合計91点の金箔瓦を認めた。輪違瓦・熨斗瓦が多い。南西部第2層からまとめて出土しており、次いで土坑100からの出土例が多い。第2層は江戸時代中期の整地層であり、土坑100は行幸御殿に関連する廃棄物を処理した遺構である。ところが、それぞれから出土した菊丸瓦には、金箔の有無による違いを問わず、同範・同文の瓦当文様をもつ菊丸瓦が多く含まれており、両者の密接な関連がうかがえる。

金箔瓦は類例からみて桃山時代を特徴付ける遺物であり、今回の調査で出土した瓦全体の出土量からみれば極少量であることから、二条城の造営や増改築にあたって新規に作成されたものではなく、他の施設から搬入されたと考えている。菊丸瓦・輪違瓦に多様な種類があること、本丸・二の丸・桜の園から出土した菊丸瓦に文様・技法が共通するものがあることは、この推測を裏付ける。ところが、行幸御殿についても搬入品が使用されたことになると、後水尾天皇のために贅を尽くし、意匠を凝らして新造された、といわれている行幸御殿の造営過程を考えるにあたって新たな論点として検討する必要がある。

今回の調査では、桜の園・緑の園における遺跡の状況の一端が明らかとなった。特に桜の園の調査地については慶長期の造営から江戸時代後期に至る遺構の変遷を詳しく検討することができた。今回の調査の直後に実施した確認調査では、それぞれ狭い調査範囲での成果であるが、緑の園・二の丸・本丸の各区域における遺構の変遷³⁸⁾が明らかになってきている。今後も堅実に調査例を積み重ねることにより、二条城を含む調査地の歴史の復元をさらにすすめることが必要である。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局、2007年。
- 2) 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版、2003年。
- 3) 註2)に同じ。
- 4) 註2)に同じ。
- 5) 「22 宮南東部(6)」『平安宮 I 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 6) 「26 宮南東部(20)」『平安宮 I 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 7) 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1983年。
- 8) 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1984年。
- 9) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-15 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003年。
- 10) 註9)に同じ。
- 11) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-13 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

- 12) 「史跡旧二条離宮」『平成 19 年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2010 年。
- 13) 「平安京左京三条一・二坊・神泉苑・史跡旧二条離宮」『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995 年。「平安京左京三条一・二・四坊」『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995 年。「平安京左京三条二坊」『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995 年。「平安宮左京三条一坊・史跡旧二条離宮」『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996 年。「平安京左京三条二坊・史跡旧二条離宮」『平成 11 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002 年。
- 14) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-12 史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002 年。『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-13 史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮廩院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2005 年。『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-16 史跡旧二条離宮(二条城)・平安京冷然院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2006 年。
- 15) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-15 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2010 年。
- 16) 註 9) に同じ。
- 17) 註 9) に同じ。
- 18) 註 9) に同じ。
- 19) 註 9) に同じ。
- 20) 平安時代後期以降、無釉化がすすんだ灰釉陶器を「灰釉系陶器」と呼称する。『平安京左京二条四坊十町 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 19 冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2001 年。
- 21) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996 年。
- 22) 鉄線による切り離し痕はすべていわゆる「コビキ B」手法である。『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会、1984 年。
- 23) 獣骨・貝殻の同定は丸山真史氏にご教示いただいた。
- 24) 二条城の歴史の変遷については、川上貢「第三編 二条城と伏見城の殿舎」『日本建築史論考』中央公論美術出版、1998 年に多くを学んだ。
- 25) 註 13 に同じ。
- 26) 河角龍典氏にご教示いただいた。
- 27) 「平安京左京三条一・二坊・神泉苑・史跡旧二条離宮」『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995 年。
- 28) 註 9) に同じ。
- 29) 本丸では寛永期の盛土は 1.4 m 以上山積みしている。註 15) に同じ。
- 30) 註 15) に同じ。
- 31) 中井均氏・森島康雄氏にご教示いただいた。
- 32) 註 11)・註 15)
- 33) 註 2) に同じ。
- 34) 二条城事務所、後藤俊樹氏にご教示いただいた。
- 35) 註 15) に同じ。
- 36) 註 15) に同じ。
- 37) 註 9) に同じ。
- 38) 註 15) に同じ。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-14							
編著者名	柏田有香・山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城) へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかなぎょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちょう 二条城町541番 地 二条城	26100	A453 1	35度 00分 46秒	135度 44分 53秒	2009年9月 7日～2009 年11月4日	947m ²	防災設備 工事 (確認調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	弥生時代 ～古墳時代		弥生土器・須恵器				
平安京跡	都城跡	奈良時代 ～平安時代		土師器・白色土器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦				
		鎌倉時代 ～桃山時代		土師器・瓦器・焼締陶器・灰釉系陶器・輸入陶磁器、瓦				
		江戸時代	溝、石鳥居、石組、集石、礎石群、礎石、柱穴列、柱穴、根石群、石列、土坑、土間、整地層	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品				
		近代	溝					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-14

史跡二条離宮（二条城）

発行日 2010年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961